

佐賀大学国際交流推進センター 令和6年度 年次報告書

Annual Reports of Center for Promotion of International Exchange
Saga University April 2024- March 2025



佐賀大学

ANNUAL REPORTS

巻頭言

佐賀大学国際交流推進センターにとっての令和6年度は、第4期中期目標・中期計画、並びに佐賀大学ビジョン2030に掲げた目標の達成に向けて令和4年度から行ってきた国際交流に関する改革が、3年目にして成果を上げてきた年度でした。具体的には、戦略的パートナーシッププロジェクト、佐賀大学交換留学制度SPACEの新しい枠組みの実施、留学生就職支援の実施、国際展示ルームの開設などを挙げるができます。また、エラスムス+の更新による海外研究者・職員の受け入れおよび佐賀大学研究者・学生の派遣、ホームカミングデー・ベトナム、中国同窓会の新体制づくりもあげられます。

戦略的パートナーシップは、令和5年度に3件をスカウトしたことにより、研究型4件、教育型5件が実施されることになりました。アメリカ・スリッパリーロック大学、ベトナム国家大学ハノイ農業大学、スリランカ・ペラデニア大学がスカウトされました。そして、サンドイッチプログラムなどの協議が進められています。SPACEは、SPACE-AGやSPACE-SE-Gなど、部局での受け入れが始まりました。留学生の就職支援も、日本語教育のビジネス日本語への転換と連動しつつ、インターンシップや企業相談会が実施され、その結果就職した学生も出てきました。

ホームカミングデーは、大島一里理事・副学長を団長として実施し、ベトナム同窓会が温かく迎え入れてくれました。また伊藤直樹駐ベトナム社会主義共和国日本国特命全権大使に出席していただき祝辞を賜りました。ベトナム国内からは多くの同窓生が訪れてくれ、同窓会から佐賀大学の正門と美術館を描いた絵を贈呈してもらいました。

国際展示ルームの開所と講演会は、今年度、佐賀大学の国際的取組を発信するために設けられた最も大きな成果です。

このように、今年度は、2023年1月頃にスタートした国際交流推進センターの体制改善について、具体化し始めた年度です。まだ成果はこれからですので、着実な成果をあげるべく、学生・研究者・地域の国際交流を促進させていく役割を果たしていきたいと思えます。

皆様には、今後とも一層のご支援、ご助言を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和7年3月

佐賀大学国際交流推進センター
センター長 三 島 伸 雄

目 次

巻頭言	1
I. 本年度のトピックス	
1. 戦略的パートナーシッププロジェクト	3
2. 国際展示ルーム開所	7
3. 佐賀大学海外版ホームカミングデー（ベトナム）	8
4. ウィーン工科大学と大学間学術交流協定を締結	14
5. 学長・理事表敬訪問	15
II. 留学生交流（派遣）	
1. 本学学生の海外派遣概況	17
2. 交換留学生の派遣	17
3. Saga University Study Abroad Program（SUSAP）	18
4. 令和6年度佐賀大学学生海外派遣奨励費	22
5. 令和6年度佐賀大学海外研修プログラム参加助成	24
6. キャンパスの国際化	25
III. 留学生交流（受入）	
1. 留学生受け入れの概況	29
2. SPACE-E（前期）/ SPACE-SAGA（後期） 実施報告	32
3. SPACE-ARITA 実施報告	36
4. SPACE-ECON 実施報告	46
5. SPACE-SE 実施報告	47
6. 令和6年度日本語・日本文化研修コース	50
IV. 研究者交流	
1. 令和6年度佐賀大学研究者国際交流支援事業	52
2. 外部資金（国際交流事業関係）	53
V. 社会連携	
1. 佐賀県および県内企業・団体と連携した佐賀大学の留学生就職支援事業	54
VI. 国際交流ネットワーク	
1. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動	63
2. 海外ネットワークの構築と情報発信	64
VII. 広報活動	
1. 本学ホームページにおける日本語・英語によるタイムリーな情報発信	65
VIII. 住環境整備等	
1. 佐賀大学国際交流会館	66
2. その他の住環境支援	66
資料	
1. 国際交流推進センター（組織図・役割・教職員）	67
2. 大学間学術交流協定校	68
3. 令和6年度留学生数	70
4. 佐賀大学学術交流協定取扱要項	72
5. 国際交流推進センター関連行事	74
6. 国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター規則	75
7. 令和7年度国際交流推進センター運営委員会名簿	79
8. 令和7年度戦略的パートナーシップ・プロジェクト・マネジメント専門委員会名簿	79
9. 国際行動指針	80

I. 本年度のトピックス

1. 戦略的パートナーシッププロジェクト

戦略的パートナーシッププロジェクト（以下、戦略的 PS プロジェクト）とは、本学の協定校の中から特に連携強化をする機関を選定し、互いの強みを生かした持続可能な研究・教育基盤の構築を目指す取り組みである。

令和 6 年度の事業の内容と成果は以下のとおり。






- （１）「佐賀大学のこれから－ビジョン2030－」に基づく令和 6 年度ビジョンプロジェクトの学内公募に応募し、採択される。
- （２）令和 6 年度に応募のなかから 9 件を採択し（国際共同研究型 4 件、国際共同教育型 5 件、うち 6 件は令和 5 年度からの継続、3 件をスカウト式申請として新規採択）、戦略的 PS 相手校との連携・共同による国際共同研究ないし、国際共同教育プログラムの計画、取組がそれぞれ実施された。
- （３）戦略的 PS 相手校との各取組は概ね 3 年間を見通した計画を想定しており、令和 7 年度以降は事業の成果創出を確実に促す観点から継続申請のみを支援対象とし、年度当初から実施者が取組に着手できるような事業計画提出時の採点による評価方式によらず、年度途中で取組の評価や改善を目的とした中間評価方式をとり、事業実施の早期化を図る。報告書の提出を求めるほか、中間報告会、最終報告会を開催することにより、戦略的 PS 専門委員会が各取組の進捗状況を確認し、フィードバック等を通じて PDCA による改善を図っている。令和 6 年度においても各取組の中間報告会、最終報告会を実施し、フィードバックを行い、実施者に対し改善を求めた。

令和 6 年度の成果：

1. 採択された 9 件のうち 7 件の取組について、本学主催（共催）の国際研究集会等が開催された。
令和 6 年度の参加者の報告数は合計 618 名に上り、令和 6 年度中の国際研究集会参加者 2,439 名の 25% を占めた。
2. 戦略的 PS 相手校へ 1 名を派遣し、サンドイッチプログラムの試行を実施、当該学生に特別研究奨励金を支給した。
・チェンマイ大学（タイ）
受入学生は今年度はなし。
3. JASSO 海外留学支援制度申請について、申請書の確認を行い、新規 4 件、継続 7 件を申請し、新規 3 件（派遣 2 件、受入 1 件）、継続 7 件（派遣 7 件、受入 0 件）が採択された。新規採択された派遣プログラムの内 1 件は戦略的 PS プロジェクト内で共同教育型として実施している事業内のプログラムである。

4. JASSO 海外留学支援制度新規採択教員向けのインセンティブ制度を構築し周知、令和 5 年度新規採択者 2 名に10万円の経費支援を実施した。
5. 高度な国際行動教育プログラム（サンドイッチプログラム）の情報を収集し、資料を作成した。
この資料に基づきチェンマイ大学との交渉を行った。チェンマイ大学とは、令和 7 年度にサンドイッチプログラムに関する学部間協定（MOU）を締結予定である。
6. 戦略的パートナーシップ関係の構築に向けてチェンマイ大学（タイ）創立60周年記念式典に出席

【図 1】 令和 6 年度戦略的 PS プロジェクト取組一覧

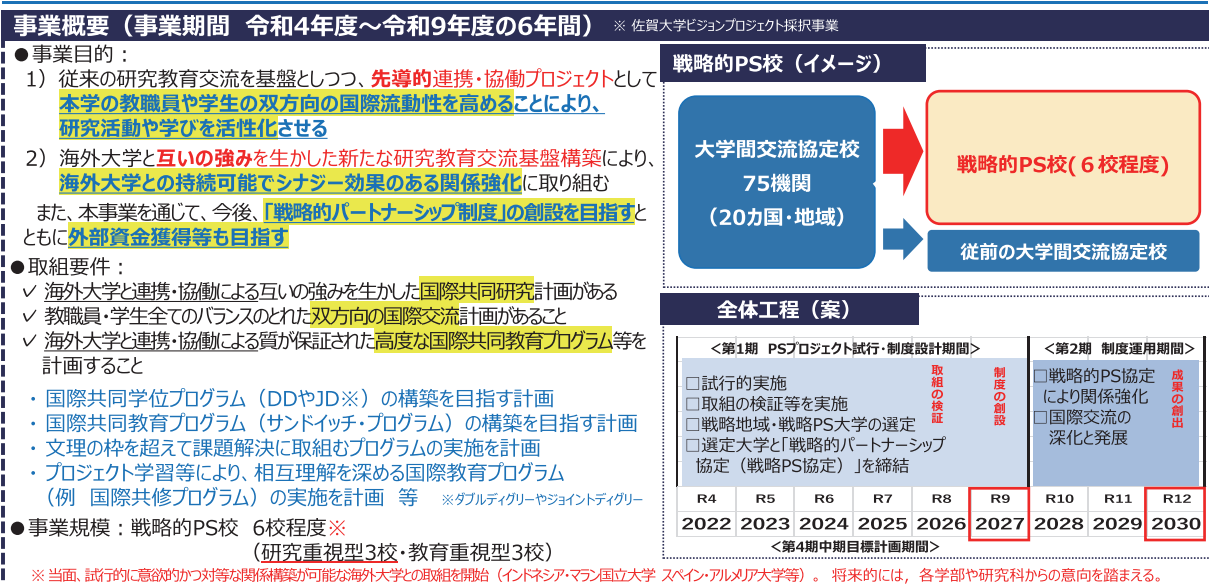
佐賀大学「ビジョン2030」ビジョンプロジェクト（学内計画）							令和6年度事業経費：20,360千円
令和 6 年度戦略的PSプロジェクト取組一覧							
種別	番号	連携国	連携機関名	国際共同研究／教育課題(取り組み)名	部局	実施代表者	
研究	A-1	インドネシア	マラン国立大学	日本における外国人の統合と人的資本の整備がアジアの経済発展に与える影響—インドネシア人の日本滞在者・帰国者の事例から— ・本学主催の国際研究会参加者数 331人（3回開催）	経済学部	Saliya De Silva 教授 早川 智津子 教授 中村 博和 教授 浅川 慎介 講師	
	A-2	中国	中国農業大学	東アジアを取り巻く農学関連課題の解決に向けた日中共同研究推進	農学部	徳田 誠 教授	
	A-3	中国	温州大学	低平地水路網地帯及び沿岸干潟における生態環境修復技術の開発 ・本学主催の国際研究会参加者数 22人（1回開催）	全学教育機構（主） 農学部 海洋エネルギー研究所	原口 智和 准教授	
	A-4	ベトナム	ベトナム国家農業大学	地域農業・農村社会における持続的循環型経済の形成に関する日越共同研究 ・本学主催の国際研究会参加者数 44人（1回開催）	農学部	辻 一成 教授	
教育	B-1	インドネシア	主連携大学：ハサヌディン大学 連携大学*：タドゥラコ大学 サムラランギ大学 ランブマンクラット大 東カリマンタン工科大学 スラバヤ工科大学	スマートLOWLANDによる持続可能な社会基盤構築に資する国際人材育成（理工学国際教育研究コンソーシアムの設立） ・本学主催の国際研究会参加者数 101人（1回開催）	理工学部	三島 悠一郎 講師	
	B-2	タイ	主連携大学：チェンマイ大学 連携大学*：タマサート大学 カセサート大学 コンケン大学 モンクット王ラカパン工科大学 バヤオ大学	持続可能で健康的な都市・農村社会のための先進的教育インフラの強化 ・本学主催の国際研究会参加者数 57人（2回開催）	理工学部（主） 農学部 医学部	小島 昌一 教授 後藤 隆太郎 教授 カン・タトクリスム 教授 田中 宗浩 教授 辻田 忠志 准教授 末岡 榮三朗 教授 小田 康友 教授	
	B-3	スペイン	アルメリア大学	再生可能エネルギーおよびバイオマスの課題解決教育 ・本学主催の国際研究会参加者数 30人（1回開催）	農学部（主） 先進健康科学研究科 理工学部 ダイバーシティ推進室 海洋エネルギー研究所	辻田 忠志 准教授	
	B-4	アメリカ	スリッパリーロック大学	スリッパリーロック大学との短期留学プログラム派遣・受入事業	全学教育機構	ブレンダン・ヴァンドゥーセン 准教授	
	B-5	スリランカ	ペラデニヤ大学	気候変動下における農村開発に資する人材育成 ・本学主催の国際研究会参加者数 33人（1回開催）	農学部（主） 経済学部	藤村 美穂 教授 辻 一成 教授 辻田 忠志 准教授 Saliya De Silva 教授 篠崎伸也 准教授	

*本プロジェクトの連携期間数は1申請につき原則1か国（地域）・1機関としているが、主となる連携機関を明確にする場合のみ、複数機関・複数部局と連携し本事業を実施

【図2】 戦略的パートナーシッププロジェクト概要

佐賀大学 戦略的パートナーシッププロジェクト（戦略的PSプロジェクト）

～海外大学との連携・協働により、研究教育力の向上やイノベーションの創出、持続可能な社会を構築できる人材を育成～



アウトプットの例

- 戦略的PS校6校（研究重視型3校・教育重視型3校）の選定
- 教職員・学生の派遣・受入数の増加
- 派遣・受入研究者による審査付き国際共著論文数の増加
- 本学研究者主催による国際研究集会増加
- 戦略的PS大学との連携・協働による共同研究、共同教育の増加

期待されるアウトカム

- ✓ **本学の強みにつながる研究教育の多様性等の強化やグローバル化**
- ✓ **教職員・日本人学生の国際的な資質・能力の向上**

地域・国際社会へのインパクト

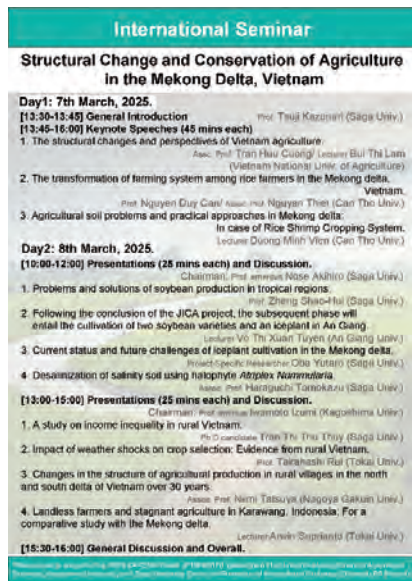
- ✓ **研究教育の強化と国際的なプレゼンス向上**
- ✓ **地域社会の発展に寄与する研究とイノベーションの創出**
- ✓ **持続可能な社会を構築できる人材の育成**

1. Outline of the Sandwich Program

○What is Sandwich Program (SWP)?

- ・ There is no clear definition of "Sandwich Program" by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) as it is not a degree program.
- ・ In general, this program refers to carrying out part of postgraduate research at a partner university.
- ・ In a well-developed international research environment, students on the program focus on research and writing thesis **under joint supervision**.





ベトナム国家農業大学との研究集会



チェンマイ大学との研究集会



マラン国立大学での国際セミナーの様子



温州大学学長との懇談の様子



チェンマイ大学（タイ）創立60周年記念式典の様子

2 国際展示ルーム開所

本庄キャンパス・産学交流プラザ1階に国際展示ルームを開所し、3月27日（木）に開所式と講演会を開催した。この国際展示ルームは、国内外からの来賓を迎える応接空間であり、佐賀が生み出した、日本および世界に誇る研究成果を広く地域に発信し、地域の理解を深めるとともに、地域の国際化を牽引する知的拠点である。開所式には、文部科学省、佐賀県、伊万里市、嬉野市、沖縄県久米島町、マレーシア工科大学の関係者が出席した。国際展示ルームには、佐賀大学の国際交流を示す世界唯一の、佐賀を中心としたロビンソン図法の壁面世界地図を常設展示し、海洋温度差発電（OTEC）の仕組みの理解促進に向けた装置、発電に利用した海洋深層水の複合利用によって生み出された商品、研究成果や国際交流状況紹介パネルなどが展示されている。

開所式では、まず、兒玉浩明学長が挨拶し、出席者への感謝の意が伝えられた。そして、国際展示ルームが佐賀大学の魅力を広く伝える場となり、地域社会や国際社会との連携をさらに深める拠点となることへの期待が述べられた。続いて、熊谷果奈子 文部科学省研究振興局大学研究基盤整備課課長補佐より、国際展示ルーム開設にかかるご祝辞をいただいた。次に、豊田一彦理事（研究・社会連携担当）から、国際展示ルームの趣旨と概要について説明が行われた。その後、世界地図の除幕式とテープカットが行われ、佐賀大学と海外との交流を表現した壁一面の佐賀を中心とした特別な世界地図が公開されると大きな拍手が上がった。最後に池上康之海洋エネルギー研究所長より、海洋温度差発電について模擬用模型を用いて説明が行われ、参加者からの大きな賞賛が寄せられた。

開所式に伴う講演会では、教養教育2号館で『佐賀大学の知の世界展開と地域振興』～海洋再生可能エネルギーの挑戦～をテーマとした講演が行われた。はじめに三島伸雄副学長（国際担当）より「佐賀大学の国際戦略と将来展望」について、続いて池上康之所長より「SAGA モデルによる海洋エネルギー研究所の知の世界展開」と題して講演が行われ、本学の教職員、一般市民を含む大勢の方が出席した。本学では今後、国際展示ルームが佐賀大学の魅力を広く伝える場となり、地域社会や国際社会との連携をさらに深める拠点となることを期待している。



佐賀大学産学交流プラザを活用した国際研究成果の発信強化プロジェクト

～産学官の連携・協力による国内活動の成果展示のみならず、世界注目の海洋エネルギー研究所をはじめとする国際交流活動の展示等を産学交流プラザに新たに設置し、プラザの施設にふさわしい公共の場として、産学交流プラザ全体を活性化～

○ 海外から興味関心、注目されている佐賀大学の海洋エネルギー研究所の研究成果等を、デジタルツールに加えて、物理面に「近距離」にあるステークホルダーに対しても、魅力あふれる効果的に情報を発信していくため、HP等のデジタル広報のみならず、佐賀大学のスペースを活用した情報発信も重要
○ 2023年度実績 海外からの訪問 約210人（参考値・産学交流プラザのインフォメーションコーナー訪問者 約500人）

国内・海外のステークホルダーへの発信強化			
2024 (R6)	2025 (R7)	2026 (R8)	2027 (R9)
プロジェクト企画立案、実施（1年目） ✓ 準備 ✓ 関係機関に出す予算要求 ✓ 整備費手許可と整備開始 ✓ 開所式の実施	プロジェクト本格実施（2年目） ✓ 準備 ✓ 発信強化 ✓ 近距離のステークホルダーへの認知度向上 ✓ 海外からの来客者の高評価	プロジェクト実施、検証（3年目） ✓ 分析・検証 ✓ 発信強化 ✓ 近距離のステークホルダーへの認知度向上 ✓ 海外からの来客者の高評価	プロジェクト実施、改善（4年目） ✓ 改善 ✓ 発信強化 ✓ 国内外に伝わる広報の実現

3. 佐賀大学海外版ホームカミングデー（ベトナム）

3.1 佐賀大学海外版ホームカミングデー in ハノイ

【日時】 令和6年12月15日（日）15時～17時

【場所】 ホテルデュパルクハノイ（ハノイ市内）

【参加者】 本学関係者（7名）、元留学生（23名）、在ベトナム日本関係機関（2名）、ホーチミン佐賀県人会（1名）、佐賀県庁（2名）、その他 総勢38名

【式次第】

- 開催挨拶 佐賀大学 理事（企画・将来計画担当）・副学長（学長代理）大島 一里
- 来賓挨拶 在ベトナム日本大使館 特命全権大使 伊藤 直樹
ベトナム国家大学ハノイ校経済大学副学長 グエン・アン・トゥー
- 乾杯 佐賀大学副学長（国際担当）・国際交流推進センター長 三島 伸雄
- 佐賀県紹介 佐賀県地域交流部多文化共生さが推進課長 西浦 聡子
- 佐賀大学の今とこれから 佐賀大学副学長（国際担当）・国際交流推進センター長 三島 伸雄
- 佐賀大学友好特使委嘱
佐賀大学理事（企画・将来計画担当）・副学長 大島 一里
- 佐賀大学ベトナム人留学生同窓会役員・活動紹介
同窓会会長 グエン・ドゥック・ファイ
同窓会副会長 ブイ・ディン・タン
同窓会秘書 グエン・フエン・チャン
- 元留学生自己紹介
- 閉会の辞 佐賀大学副学長（国際担当）・国際交流推進センター長 三島 伸雄

【概要】

過日、上記日時・場所において、佐賀大学海外版ホームカミングデーを開催した。海外版ホームカミングデーとは、海外の協定校との連携強化および海外在住の卒業生と関係者とのネットワークの維持・構築を目的とし、平成24年度から年1回以上開催している。ベトナム国内でのホームカミングデー開催は、今回3度目となった。

当日はベトナムにおける協定校であるベトナム国家農業大学、ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学、ベトナム国家大学ハノイ校経済大学などから参加いただいた。その他、元留学生や佐賀大学への留学を控えた現地学生に加え、在ベトナム日本国大使館、佐賀県人会、佐賀県地域交流部等、ベトナムを拠点に活動する関係者など、多方面から総勢約38人の参加を得た。

冒頭、本学の大島理事（学長代理）より開催挨拶があり、続いて、在ベトナム日本大使館の伊藤 直樹特命全権大使、ベトナム国家大学ハノイ校経済大学副学長、グエン・アン・トゥー准教授から祝辞を頂戴し、続いて佐賀大学副学長（国際担当）・国際交流推進センター長 三島伸雄教授より乾杯の発声後、会が始まった。その後佐賀県多文化共生さが推進課西浦課長より、本ホームカミングデーの開催に対するお祝いと佐賀県を紹介する動画や、佐賀県とベトナムの交流について紹介され、三島副学長からは「佐賀大学の今とこれから」と題して、本庄、有田、鍋島キャンパスの各部局・施設についての動画による紹介および本学の最新の研究状況、学生の活動について報告が行われた。

また式中に友好特使委嘱式が行われ、同窓会長であるグエン・ドゥック・ファイ氏と、副会長であるブイ・ディ

ン・タン氏に友好特使を委嘱した。委嘱後には各役員の紹介および挨拶が行われるとともに、同窓会の活動紹介も行われた。さらに、ベトナム元佐賀留学生会から本学に対し記念品の贈呈が行われ、その後元留学生2名より、本学の思い出について語っていただき、式典は終始和やかな雰囲気で行われた。

最後に、三島副学長より閉会の挨拶が行われ、集まっていた皆様へ感謝をお伝えするとともに、開催準備に尽力いただいた、同窓会役員の皆様にお礼の言葉が伝えられ、出席者全員で記念撮影を行い、別れを惜しみつつ、またの再会を期して閉会した。



児玉学長の挨拶を大島理事が代読



同窓会からの記念品贈呈
(左) フイ同窓会長と (右) 大島理事



記念撮影

3.2 佐賀大学プロモーション in ハノイ

佐賀大学プロモーションとして、ベトナム国家農業大学、ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学、ベトナム国家大学ハノイ校経済大学に訪問したほか、在ベトナム日本国大使館にも訪問した。

○ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 (ULIS VNU-Hanoi)

(1) VNU-Hanoi 関係者との意見交換 (12月12日 (木) 10時～11時)

【ULIS VNU-Hanoi】 Hoa Ngoc Son 副学長、Luu Manh Kien、協力開発部部长、Dao Thi Nga My 日本語日本文化学部長、Tran Thi Minh Phuong 日本語日本文化学部副学部長、Tran Kieu Hue 日本語日本文化学部副学部長、Nguyen Huyen Trang ULIS 中学校長 (佐賀大学元留学生) ら 6 名

【本学】 大島理事、三島副学長、矢田国際企画室長、中尾事務員

- ・表敬訪問では三島副学長より佐賀大学の概要や紹介等を行った。意見交換では、学生交流や国際共同研究について話し合われ、特に、今後の研究者交流、学生交流に関わるプログラムの要望や方向性について活発な意見が交わされた。



(2) 学生向け留学説明会

上記表敬訪問と並行し、学生を対象として本学の留学説明会を実施した。

【説明者】 古賀准教授、山田コーディネーター、鳴海コーディネーター

【参加人数】 24名

- ・説明資料をもとに、佐賀大学の概要、交換留学制度、佐賀での学生生活について説明した後、質疑応答を行った。



○在ベトナム日本国大使館

関係者との意見交換（12月13日（金）9時～10時）

【先方】 神谷 直子 広報文化センター 一等書記官

【本学】 三島副学長、矢田室長、中尾事務員

- ・三島副学長より海外版ホームカミングデーへの出席および祝辞をいただくことに対する謝意が述べられ、

佐賀大学の概要として留学状況や国際交流活動等について紹介を行った。在ベトナム日本国大使館からは、ベトナムの大学における日本の大学との交流等に関する有益な情報を提供していただいた。



○ベトナム国家大学ハノイ校大学経済大学（VNU-UEB）訪問

（１）VNU-UEB 関係者との意見交換（12月12日（木）14時～15時）

【VNU-UEB】 Nguyen Anh Thu 副学長ら23名

【本学】 大島理事、三島副学長、古賀准教授、矢田室長、中尾事務員、
山田コーディネーター、鳴海コーディネーター

- ・ Nguyen 副学長からの表敬を受けた後、今後の両大学の国際交流に関する意見交換を行った。意見交換では、学生交流や国際共同研究について話し合われ、本学からの派遣を増やすための取り組みや新しいワークショップ、シンポジウムの開催に向けての活発な意見が交わされた。



（２）学生向け留学説明会

上記表敬訪問と並行し、学生を対象として本学の留学説明会を実施した。

【説明者】 古賀准教授、山田コーディネーター、鳴海コーディネーター

【参加人数】 10名

- ・ 説明資料をもとに、佐賀大学の概要、交換留学制度、佐賀での学生生活について説明した後、質疑応答を行った。



○ベトナム国家農業大学（VNU-A）訪問

（１）VNU-A 関係者との意見交換（12月13日（金）14時～15時）

【VNU-A】Pham Van Cuong トレーニング・研究開発担当副学長、Nguyen Duc Huy 植物クリニック院長、Pham Thi Minh Phuong 農学部教員、Nguyen Thi Ngoc Thuong 経済経営学部教員 Tran、Thi Thanh Phuong 国際協力室職員ら計7名

【本学】大島理事、三島副学長、矢田国際企画室長、中尾事務員、山田コーディネーター、鳴海コーディネーター

- ・表敬訪問として Pham Van Cuong 副学長より歓迎の挨拶がされ、本学三島副学長より挨拶が返された。表敬訪問では本学の元留学生が同席し終始和やかな空気で歓迎された。意見交換では、学生交流や国際共同研究について話し合われ、本学が2022年から開始しており、ベトナム国家農業大学が相手校の一つとして選出されている「戦略的パートナーシップ・プロジェクト」や、教員がそれぞれ相手校で講義を行えないかななどの話題を中心に活発な意見が交わされた。



（２）学生向け留学説明会（15時～15時30分）

上記表敬訪問の後、学生を対象として本学の留学説明会を実施した。

【本学】大島理事、三島副学長、矢田国際企画室長、中尾事務員、山田コーディネーター、鳴海コーディネーター

【参加人数】33名

- ・説明資料をもとに、佐賀大学の概要、交換留学制度、佐賀での学生生活について説明した後、質疑応答を行った。



(3) キャンパスツアー (15時30分～16時)

【本学】大島理事、三島副学長、矢田国際企画室長、中尾事務員、山田コーディネーター、鳴海コーディネーター

Nguyen Duc Huy 教授の案内で、キャンパスの施設及びキャンパス等を視察した。



4. ウィーン工科大学と大学間学術交流協定を締結

理工学部教授 三島 伸雄 副学長（国際担当）は、2024年9月18日（水）、ウィーン工科大学との大学間の学術交流協定調印式に学長代理として参加し、ウィーン工科大学教授 Peter Ertl 研究・革新・国際担当副学長と調印を行った。

本学とウィーン工科大学との関係は、三島教授が1990年に日本からの最初の正式交換留学生（オーストリア政府奨学生）として派遣され、さらに1998年に佐賀大学理工学部講師時に文部科学省在外研究員として派遣されたことに端を発する。それ以来、ウィーン工科大学建築プランニング学部と理工学部都市工学部門との交流覚書に基づき、教育・研究交流を継続してきた。特に、ウィーン工科大学の学生や教員を日本に招待し、三島教授が研究フィールドとしている佐賀県鹿島市肥前浜宿の伝統的町並みでのワークショップなどに受け入れ、佐賀大学学生をウィーン工科大学でのワークショップに派遣を行ってきた。ウィーン工科大学から来日した学生のうち2名が肥前浜宿の伝統的建物を題材にした修士号を取得するなど、顕著な成果を上げている。この度、これらのことがウィーン工科大学でも高く評価され、九州では初めてのウィーン工科大学との学術交流協定校になった。



5. 学長・理事表敬訪問

2024年4月23日 国立政治大学副学長表敬訪問

学生・学術交流に関する意見交換のため、国立政治大学から Ching-Ping Tang 副学長が理事を表敬訪問された。



2024年5月24日 楊慶東中国駐福岡総領事学長表敬訪問

新中国駐福岡総領事の着任のご挨拶等や今後の本学と同国の学術交流機関との交流強化にかかる意見交換のため、楊慶東総領事はほか2名が学長を表敬訪問された。



2024年 5月30日 チェンマイ市、チェンマイ大学学長表敬訪問

Monchai Phongkiatkong 副書記ら 4 名とチェンマイ大学 Sant Suwatcharapinun 建築学部 副学部長ら 3 名が理事を表敬訪問された。



2025年 2月3日 安東大学学長表敬訪問

学生・学術交流に関する意見交換のため、安東大学から、Chung Tai Joo 学長ほか 5 名が学長を表敬訪問された。



Ⅱ. 留学生交流（派遣）

1. 本学学生の海外派遣概況

令和6年度には、各2単位の海外交流実習科目の短期研修プログラム SUSAP として、夏季にオーストラリア・ラトロープ大学プログラム「英語力強化ホームステイプログラムーホームステイで多文化社会オーストラリアの生活様式を体験し、高度な英語スキル向上を目指す。」（8～9月：12名）及びインドネシア・スラバヤ工科大学プログラム「CommTECH『ジャワ島のしなやかなコミュニティ構築と宗教間の融和の推進』とマラン国立大学文化体験プログラム」（8～9月：9名）、韓国・大邱大学プログラム「韓国語・韓国文化入門プログラムー韓国文化を楽しみながら韓国語の基礎を習得する」（8～9月：11名）を実施した。春季には、台湾・東華大学プログラム「台湾人学生や現地留学生と一緒に学び、多様な台湾文化に触れてみよう」（2～3月：16名）および米国・パシフィック大学プログラム「アメリカの協定校で英語コミュニケーション力に自信をつけよう」（2～3月：10名）、スペイン・アルメリア大学プログラム「スペイン文化と国際交流を体験する」（2～3月：14名）を実施した。

2. 交換留学生の派遣

令和6年度第1期派遣者は6名、第2期派遣者は3名で合計9名を派遣した。

令和4年度2月に佐賀大学学部生・大学院生全員を対象として実施した「海外留学についての意識調査」の結果によれば、学部生・大学院生共に海外への留学を希望する学生が過半数を占めている。学生が留学したい国・地域として挙げている場所は全体的に欧米地域がアジア圏を上回っているが、いずれの場合でも「語学力への不安」を留学に踏み切れないハードルとして挙げている。学生が交換留学を実現させるためには留学先で勉学を実現できる語学力を獲得することであるが、とりわけヨーロッパ、北米、オセアニアへの交換留学には TOEFL ITP や IELTS 等で高いスコアを得る必要がある。また効果的な学習方法を見つけたり、英語学習のモチベーションを維持したりすることの支援として、令和元年4月に導入したオンライン学習システム（Academic Express3）を令和2年度より留学希望者及び留学派遣候補者以外の学生にも提供しており、令和6年度には合計48名の学生が Academic Express3を受講した。一方、受講登録をしたものの途中で脱落するというケースも存在していたため、利用者の学習意欲を高めるべく、前期・後期で計6回のフォローアップセミナーを実施した。

また、上記「海外留学についての意識調査」の結果にも反映されているように、学部・大学院生共に、英語のスキルのうち特に会話力に自信がない学生が多いため、国際交流推進センターは、令和3年11月より「オンライン・イングリッシュ・ラウンジ」（OEL）を導入し、オンラインによる英会話の実践の機会を提供している。このシステムは、民間企業が提供するフィリピン人インストラクターによるオンライン英会話を25分間利用できるチケットを希望者に週2枚まで配布し、午前9：00～午後11：30までの間で都合のよい時間に講師を選んで予約、利用するというものであり、フィリピン人インストラクターとオンラインでインタラクティブに英会話を実践できることから、利用者からの評価も高い。

実施時期	参加者数	チケット配布枚数
4月	55名	60枚
5月	84名	100枚
6月	103名	125枚
7月	67名	75枚
8月	52名	60枚
9月	65名	75枚
10月	74名	80枚
11月	77名	80枚
12月	65名	75枚
1月	63名	75枚
2月	48名	50枚
3月	49名	50枚

3. Saga University Study Abroad Program (SUSAP)

SUSAP 佐賀大学短期海外研修プログラムは、平成25年度より本格的に実施を開始した、全学の学生を対象とし、以下の4項目を目指す短期研修プログラムである。

- ①外国語の運用能力を高めること。
- ②海外協定校等での講義や現地学生・海外からの学生との共同活動や意見交換を行うこと。
- ③一般市民との交流を通して、現地の社会や文化、生活習慣を学ぶこと。
- ④多様な文化や価値観を理解し国際的な視野を育むこと。

令和6年度、前期に実施した3つの海外派遣プログラムに合計31名が参加し、後期に実施した3つの海外派遣プログラムには、合計40名が参加し、年間合計参加者数は71名となった。

令和6年度実施の短期留学（協定校プログラム）参加者内訳 ※カッコ内は募集人数

夏季プログラム：

スラバヤ工科大学（インドネシア）：9名（15名）

ラトロープ大学（オーストラリア）：11名（20名）

大邱大学（韓国）：11名（15名）

春季プログラム：

東華大学（台湾）：16名（15名）

パシフィック大学（アメリカ）：10名（20名）

アルメリア大学（スペイン）：14名（15名）

計 71名

本短期研修のターゲットは1、2年生であるが、令和6年度参加者数合計71名のうち、1年生の参加者は19名、2年生の参加者が38名であった。学部別でみると、経済学部（14名）、芸術地域デザイン学部（11名）、教育学部（12名）、医学部（3名）、理工学部（12名）、農学部（18名）となっており、全学部から参加があった。参加者数

を男女比で見ると、男性17名、女性54名となっており、女性が約76%を占めている。

一般的傾向として SUSAP 参加者は、英語が得意であったり、海外の文化に関心があったりする者が多いが、これは SUSAP の参加要件として一定の語学力が求められることが関係している。一方、入学時の TOEIC の成績が悪かった、中学・高校の時から英語が苦手と思い込んでいる学生は、海外研修や留学に興味を示さないと考えられる。これらの学生に語学能力の向上への可能性を示し、留学への興味を抱かせるような取り組みを継続的に実施する必要がある。この必要に照らし、今年度はグローバルな視点を育成することを目的とした、国連ハビタットの職員を招聘して特別講演等の啓発イベントを実施したが、今後も継続的な取り組みが必要である。

すべて対面の海外派遣プログラムであったが、特にオーストラリア、米国、スペインのプログラムは参加費が比較的高額であったにもかかわらず、多くの申し込みがあった。今後は、このような学生のニーズを踏まえ、語学力向上や異文化コミュニケーション能力向上に資するプログラムを推進していく必要がある。広報に関しても、今後も継続的に留学プログラムの紹介、利用可能な奨学金の情報と共に学内の国際交流に関するイベント、サークルの紹介を行い、国際交流の機運を高めていくことが必要である。学生の留学実現のための意志決定にとって、教員の学生への働きかけの影響は大きく、留学希望者が特定の研究室に集中する傾向があるため、国際交流に協力的な教員とのネットワーク構築も継続的に行っていく。また、学内の国際交流イベントへの参加が SUSAP などへの参加のきっかけとなった者も少なからずいるため、国際交流を身近に感じることでできるイベントや広報は今後、より一層推進していく必要がある。

以下、令和6年度に国際交流推進センターが実施した6つの短期研修プログラム SUSAP の概要を紹介する。

【SUSAP 2024 Summer：オーストラリア・ラトロブ大学プログラム】

『英語力強化ホームステイプログラムーホームステイで多文化社会オーストラリアの生活様式を体験し、高度な英語スキル向上を目指す。』

本研修の目的は、オーストラリアの公立大学であるラトロブ大学の付属語学学校で、様々な国籍の学生と共に週20時間の授業を受講し、高度な英語能力を習得することである。事前研修では、オーストラリアの社会や文化、異文化間コミュニケーション、日本の歴史・文化に関する基礎知識について学び、研修に必要な知識とスキルを身につけた。ラトロブ大学付属語学学校での研修では、ディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ペアワークなどを取り入れた授業が展開され、特に Listening・Speaking 能力の向上を図った。コース期間中には Writing テストが課され、テーマに沿った英作文を作成し、教員から詳細な添削を受けた。研修期間中、日本文化に関心のある現地学生のパディが1～2名割り当てられ、放課後や週末を利用して交流を行った。また、本研修はホームステイプログラムであり、参加者はホストファミリーとの生活を通じてオーストラリアの日常生活や社会について学ぶ機会を得た。事後研修では、現地での学びや体験を振り返り、日本語による口頭発表と報告書の作成を行った。

本研修の参加費用は約70万円（授業料、ホームステイ費、海外旅行保険、渡航費）であり、JASSO 奨学金が該当者に支給され、それ以外の者には佐賀大学が奨学金を支給した。そのため、実質的なプログラム参加費用は54万円～60万円となった。

■ 担当教員：石松弘幸 准教授（国際交流推進センター）

■ 実施期間：2024/8/20～2024/9/28（40日間、移動日含む）

■ 単位付与：海外交流実習（基本教養科目）2単位

【SUSAP 2024 Summer：インドネシア・スラバヤ工科大学プログラム】

『CommTECH「ジャワ島のしなやかなコミュニティ構築と宗教間の融和の推進」とマラン国立大学文化体験プログラム』

本研修の目的は、佐賀大学の協定校であるインドネシア・スラバヤ工科大学（ITS）で実施される「CommTECH 2024－多様性の中の調和」に参加し、様々な国の学生と共にインドネシアの多様な文化・文化遺産を体験し、多様性について理解を深めることである。事前研修では、インドネシアの社会・文化、異文化間コミュニケーション、日本の歴史・文化に関する基礎知識について学び、研修に必要な知識とスキルを身につけた。スラバヤ工科大学での研修では、フィールドワークやディスカッションを通じて地域社会やグローバルな問題についての理解を深めた。また、インドネシア語の学習、伝統音楽・ダンス・料理の体験、課題解決型プロジェクトを行い、参加者は実践的な学びを得た。CommTECH 最終日には成果発表会が実施され、参加者がグループごとに制作した動画が披露された。さらに、スラバヤでの研修後にはマランに移動し、マラン国立大学の学生との文化交流（折り紙・浴衣体験）を実施した。事後研修では、現地での学びや体験を振り返り、日本語による口頭発表と報告書の作成を行った。

本研修の参加費用は約25万円（研修費、宿泊費、海外旅行保険、渡航費、ビザ申請費）であり、佐賀大学奨学金が9名に支給された。

■ 担当教員：石松弘幸 准教授（国際交流推進センター）

■ 実施期間：2024/9/7～2024/9/24（18日間、移動日含む）

■ 単位付与：海外交流実習（基本教養科目）2単位

【SUSAP 2024 Summer：韓国・大邱大学校プログラム】

『韓国文化を楽しみながら韓国語の基礎を習得する』

本研修の目的は、韓国の協定校である大邱大学校に約3週間滞在し、韓国語と韓国文化を学ぶことである。本プログラムは、韓国語の基礎を習得する初心者から上級者まで参加が可能であり、プレースメントテストの結果により6つのレベルに分かれて週32時間の韓国語授業を受講した。韓国語授業では、文法、聞き取り、書き方を中心に学び、言語の基礎力を強化した。また、授業以外にも、大邱近郊の視察、韓紙工芸、韓国の歌、韓国映画などの文化体験を通じて韓国文化への理解を深めた。大邱大学校の海外協定校の学生と共にプログラムに参加し、現地学生がバディとして1名ずつ割り当てられ、授業後や休日に交流を行った。事後研修では、現地での学びや体験を振り返り、日本語による口頭発表と報告書の作成を行った。

本研修の参加費用は約18万円（授業料、登録料、寮費、布団貸出費、海外旅行保険料、渡航費）であり、6名の授業料（60万ウォン）が免除された。

■ 担当教員：石松弘幸 准教授（国際交流推進センター）

■ 実施期間：2024/8/6～2024/8/24（19日間、移動日含む）

■ 単位付与：海外交流実習（基本教養科目）2単位

【SUSAP 2025 Spring：台湾・東華大学研修】

『台湾人学生や現地留学生と一緒に学び、多様な台湾文化に触れてみよう』

本研修の目的は、台湾・東華大学の講義を受講し、同世代の学生と共修・意見交換・交流を行うことで、台湾の歴史、社会、文化、生活習慣を学び、語学力向上と国際的な視野を育むことである。事前研修では、台湾の歴史・文化・社会、日本の歴史・文化、異文化間コミュニケーションに関する基礎知識を学び、研修に必要な知識とスキルを身につけた。現地研修では、英語または中国語による科目（語学・教養・専門分野）を各自の関心や目的に応じて選択し履修した。また、東華大学の学生バディが2名以上割り当てられ、サークル活動や小旅行などを通じて、放課後や週末も充実した時間を過ごした。事後研修では、現地での学びや体験を振り返り、日本語による口頭発表と報告書の作成を行った。

本研修の参加費用は約16万円（渡航費、空港－花蓮の移動、寮費、台北での宿泊費、海外旅行保険）であり、

JASSO 奨学金が該当者に支給され、それ以外の者には大学が奨学金を支給した。

- 担当教員：石松弘幸 准教授（国際交流推進センター）
- 実施期間：2024/11/11～2025/3/24（事前・事後研修含む）
- ※現地研修：2025/2/17～3/23（35日間）
- 単位付与：海外交流実習（基本教養科目）2単位

【SUSAP 2025 Spring：米国・パシフィック大学研修】

『アメリカの協定校で英語コミュニケーション力に自信をつけよう』

本研修の目的は、米国・パシフィック大学附属語学学校で、同世代の学生と共修・意見交換・交流を行い、米国の歴史、社会、文化、生活習慣を学ぶことである。事前研修では、米国の歴史・文化・社会、日本の歴史・文化、異文化間コミュニケーションに関する学習を行い、研修に必要な知識とスキルを身につけた。現地研修では、午前はスピーキング・リスニング、午後はライティング・リーディングのクラスに参加し、英語力の向上を目指した。週あたりの授業時間は13時間で、3週間にわたりスキルアップを図った。また、毎週1回、地域住民と交流する機会が設けられた。現地学生がバディとしてサポートし、学内のイベントやクラブ活動にも参加可能であった。事後研修では、現地での学びや体験を振り返り、日本語による口頭発表と報告書の作成を行った。

本研修の参加費用は約75万円（渡航費、授業料、寮費、海外旅行保険）であり、JASSO 奨学金は適用されなかったものの、大学が奨学金を支給した。

- 担当教員：石松弘幸 准教授（国際交流推進センター）
- 実施期間：2024/11/15～2025/3/24（事前・事後研修含む）
- ※現地研修：2025/2/19～3/17（27日間）
- 単位付与：海外交流実習（基本教養科目）2単位

【SUSAP 2025 Spring：スペイン・アルメリア大学】

『スペイン語・スペイン文化とSDGsについて学ぼう』

本研修の目的は、スペイン・アルメリア大学において、スペイン語・スペイン文化の学習とともに、SDGsに関連する科目を受講し、現地学生との交流を通じて異文化理解を深めることである。研修期間中、アルメリア大学の学生がバディとなり、学内イベントやクラブ活動への参加をサポートするなど、ヨーロッパの大学生と共に学び、交流する機会が設けられた。事前研修では、異文化間コミュニケーション、日本の歴史や文化の基礎知識、スペインの歴史、文化、社会、SDGsに関する学習を行い、研修に必要な知識やスキルを身につけた。現地研修では、スペイン語とスペイン文化に関する授業のほか、SDGsに関連する科目を受講し、学びを深めた。また、週末には現地の学生との交流活動やフィールドトリップを行い、実際にスペイン社会に触れる機会を得た。滞在はアルメリア大学の学生寮で行い、地元の学生やヨーロッパ各国からの留学生と共同生活を送りながら、異文化コミュニケーション能力を向上させることができた。事後研修では、現地での研修を振り返り、日本語による口頭発表と報告書の作成を行った。

本研修への参加費用は約50万円（渡航費、授業料、寮費、食費（平日3食・週末2食）、海外旅行保険、電子渡航査証申請費）であり、JASSO 奨学金は適用されなかったものの、佐賀大学が奨学金を支給した。

- 担当教員：石松弘幸 准教授（国際交流推進センター）
- 実施期間：2024/11/14～2025/3/24（事前・事後研修含む）
- ※現地研修：2025/2/14～3/3（18日間）
- 単位付与：海外交流実習（基本教養科目）2単位

4. 令和6年度佐賀大学学生海外派遣奨励費

佐賀大学学生海外派遣奨励費は、海外の協定校等において修学する学生に対し支給されるものであり、1学期間留学する者に15万円、1年間留学する者に30万円が支給される。

令和6年度は、外部資金等による奨学金が充実していたため、佐賀大学学生派遣奨励費は支給していない。

令和6年度佐賀大学学生海外研修支援事業

佐賀大学学生海外研修支援事業においては、本学が、コロナ禍により停滞した海外協定校等との国際交流活動（学生交流）の再活性化を促進し、国際交流推進センターが策定する国際行動指針における数値目標達成（日本人学生の海外派遣数の倍増（456人（2030年））に資するため、部局が独自に企画する、新規性と発展性に富み、波及効果が期待できるプログラムを支援する。また、その支援により、本学に在籍する日本人学生（日本国籍を有する者又は日本での永住を許可された者）に対し多様な海外学習の機会を提供し、国際性豊かな人材の育成を図るとともに、本学の教育・研究の国際化を促進することを目的とする。

令和6年度は、支援事業を2つのカテゴリーに分けて行った。

【令和6年度佐賀大学学生海外研修支援事業（新規プログラム支援）】

過去5年以内に海外研修プログラムを実施していない教員によるプログラムについて行い、海外派遣プログラムの裾野を広げることを目指した。令和7年度海外留学支援制度（協定派遣）への申請を見据えて、16日以上実施のプログラムを対象とし、令和7年度海外留学支援制度（協定派遣）への申請を行うこととした。

採択されたプログラムに参加し、支給要件を満たす学生には50,000円の奨学金が支給され、教員へ100,000円の支援を行う。

2件の申請があり、採択となったが、渡航安全上の問題が発生したため、プログラム実施・学生派遣に至らなかった。

令和6年度佐賀大学学生海外研修支援事業 申請一覧

番号	プログラム名	プログラム責任者	所属・職名	派遣国／地域	交流大学・機関	支援人数（人）	研修期間（移動日除く）	助成額（円）
1	「サハラ砂漠における地下および産業遺産の保存と復活に関する国際研修：ガフサ鉱山地域を対象として」	Derbel Mohamed Rami	理工学部・プロジェクト助教	チュニジア	カルタゴ大学 国立建築都市計画学部（ENAU）	-	-	-
2	アジアの歴史的地区における保存とアダプティブ・リユースに関する国際デザインワークショップ	宮原真美子	理工学部・准教授	バングラデシュ	North South University, Bangladesh Department of Architecture	-	-	-

【令和6年度佐賀大学学生海外研修支援事業（日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度（協定派遣）採択プログラム支援）】

日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度（協定派遣）に申請し採択された優秀なプログラムへの参加学生1人あたり5万円を支給し、1プログラムあたり5人を上限として支給することとした。その他の支援を受けない者を対象としたため、2プログラム3名（スリランカ2名、オーストリア1名）が対象となった。

【採択プログラムの成果報告】

サーリヤ・ディ・シルバ教授（経済学部）「発展途上国の持続可能な開発目標（SDGs）達成における日本の海外直接投資（FDI）と政府開発援助（ODA）の役割について～スリランカの経験から～」

本プログラムは「発展途上国の経済発展の現状とそれらの国々が直面する諸問題について理論的に学ぶとともに、フィールド調査を経験することによって社会科学的方法論を体得すること」を目的にしている。今回のテーマ「発展途上国の持続可能な開発目標（SDGs）達成における日本の海外直接投資（FDI）と政府開発援助（ODA）の役割について～スリランカの経験から～」では、学生はペラデニア大学の教員や学生からオンラインでスリランカに関する講義を受けたり、佐賀を中心とした課題については対面で、教員や外部講師から講義を受けたり、3ヶ月に及ぶ事前研修に取り組んだ。スリランカではペラデニア大学の教員や学生を対象に英語で発表し、質問にも苦戦しながらも英語で答えた。また、ODA 関連では JICA の支援による下水処理場や廃棄物処理施設、ペラデニア大学歯学部・医学部や附属病院に、FDI 関連では日系企業数社（高級食器の Noritake Lanka Porcelain、フェアトレードを推奨する KIYOTA COFFEE COMPANY LTD、スリランカで唯一の造船所 Colombo Dockyard PLC など）で様々なフィールド調査を体験した。学生には毎日レポート提出を課しており、日本と途上国の具体的事例を比較的に考察し、様々な事象について多面的に捉えたことを毎日まとめる作業をすることで、実地研修の大切な手法を身につけることができた。このことは、今後の学生生活のみならず、社会でも大いに役立つものである。現地での講義や交流を通して英語による発表や表現能力の向上、スリランカの文化や言語、習慣、宗教、民族を理解することも大変重要な点で、英語が得意な学生もそうでない学生も、スリランカの学生や各研修先のスタッフ等に積極的に英語で話しかけ、交流をはかり、「相互理解」を基本とする国際交流を実践していた。発展途上国の発展に貢献できるような人材育成のきっかけとしては、本プログラムを通して、留学を希望し始めたり、後期の授業選択の相談を受けたり、JICA の青年海外協力隊への関心、日系企業への就職など、手応えを感じた。



三島伸雄教授（理工学部）「日澳国際建築都市デザインワークショップ」

本プログラムは、グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用に対して、建築・都市デザインに関する知識や技術を有する人材を育成することを目的として実施した。ウィーン工科大学主催の国際ワークショップに佐賀大学学生が参加し、ウィーン工科大学と交流する日本各地の協定校からの学生やウィーン工科大学の学生と専門英語を使って議論した。その後ウィーンで日本がもたらした文化に関する講義を受け、現地を視察し、そこから理解できることについて話し合いやグループ発表を行なった。特筆できる成果としては、先方教員が佐賀大学学生を高く評価し、佐賀大学とウィーン工科大学との交流協定を締結できたことである。これまで、2015年頃から継続して学生・教員の派遣や受入を重ねてきたことが評価されただけでなく、学生の積極的姿勢が評価されたと考えられる。また、本プログラムで参加した学生はウィーンについて研究し、その成果を卒業研究として取りまとめた。そして修士に進学後、ウィーン工科大学に交換留学することを希望しており、ランドスケープ研究室を訪問し、先方大学教員と研究に関する議論を行なった。



5. 令和6年度佐賀大学海外研修プログラム参加助成

佐賀大学短期海外研修プログラム参加助成は、国際交流推進センターが企画・実施する全学の学生を対象としたプログラムに参加する学生に対し支給される。

令和6年度は、夏期、春期ともに3プログラムを実施したため、参加費の一部を助成した。

番号	プログラム名	支援人数 (参加学生数)	期間	助成額
1	オーストラリア ラトロップ大学プログラム	3 (11)	令和6年8月20日～9月28日	240,000円
2	インドネシア スラバヤ工科大学プログラム	9 (9)	令和6年9月7日～9月24日	450,000円
3	韓国 大邱大学校	0 (11)	令和6年8月6日～8月24日	-
4	アメリカ パシフィック大学プログラム	6 (10)	令和7年2月19日～3月17日	360,000円
5	台湾 東華大学プログラム	5 (16)	令和7年2月17日～3月23日	250,000円
6	スペイン アルメリア大学プログラム	13 (14)	令和7年2月14日～3月3日	1,300,000円
計		36 (71)		2,600,000円

6. キャンパスの国際化

キャンパスにおける多文化共生、とりわけ学生の互恵的な関係を創出することを目指して、国際交流推進センターでは令和元年まで継続した「佐賀大学グローバルリーダーズ」の後継として令和2年度より「佐賀大学グローバルサポーターズ」（以下、Gサポ）を実施している。Gサポに採用された学生は、国際交流推進センター・教務課留学生交流室と協働しキャンパスの多文化共生に貢献している。令和6年度はオープンキャンパスをはじめ、多くの対面イベントが再開し、多くの参加者で賑わった。

開催日	イベント名	日本人参加者	留学生参加者	参加者合計
5月11日	さがん春のピクニック	12	11	23
6月7日	カラオケナイト2024	14	25	39
6月16日	さがん田舎体験	3	12	15
7月8日	文化交流鑑賞会（International Week2024）	4	7	11
7月9日	Nostalgic Games（International Week2024）	12	7	19
7月12日	さがんワールドミュージックフェス（International Week2024）	47	23	70
7月17日	栄の国まつり総踊り・着付け練習会	0	7	7
8月5日	栄の国まつり	6	42	48
8月6日	フェアウェルパーティー2024夏	3	34	37
9月26日	ウェルカムパーティー2024秋	17	53	70
10月15日	秋の収穫フェス	6	14	20
10月31日	ハロウィンナイト	9	20	29
11月28日	手話イベント「サインゲームショー」	3	4	7
12月20日	カルチュラルナイト2024	32	96	128
1月15日	折り紙ワークショップ	7	12	19
1月30日	ムービーナイト	4	3	7
1月31日	節分イベント	4	3	7
2月17日	Farewell Party 2025 Spring	1	31	32

このような国際交流イベントへの参加者は、多くの場合、特定のリピーターに限られ、新規参加者が少数にとどまる傾向にある。特にコロナ禍では、口コミなどの情報の制限と共に、地域における一般的な国際化への消極的な態度、関心の低迷により、国際交流イベントへの参加の意欲が一般的に減退していると考えられたため、国際交流推進センターは、リピーター以外の学生にも一層広く周知を行うよう努めた結果、今年は全体の参加者数が対前年比で増加した。加えて、教職員の英語力強化、授業の英語化、異文化コミュニケーション能力強化等に関する試みを今年度も実施した。これは、グローバル化が加速的に進行する今日、佐賀大学の教職員も、国際化への意識を醸成する必要があるという認識に基づくものである。実際、国際化への関心には教職員の間で大きな乖離があるため、国際化に関心ある教員と接触している学生とそうでない学生の間に、国際化や国際交流に関する意識の格差が生じており、今後も継続的に、教職員を含めて国際化への機運を高めていくような取り組みを一層強化していく必要がある。

次のページで令和6年度の主な取り組みと今後の課題を述べる。

主な取り組み：

（１）留学希望者及び留学派遣候補者以外の学生を対象とするオンライン学習システム「アカデミック・エクスプレス３」の提供

２でも言及した留学希望者及び留学派遣候補者以外の学生を対象にした本事業では、令和６年度を通じて合計４７名が参加した。

（２）カナダ・サスカチュワン大学グウェナモスセンター教員によるアクティブ・ラーニング、プレゼンテーション集中研修（FD・SD）の実施

令和６年１１月、教職員の教育・研究スキル向上を目的として、「実践的な英語プレゼンテーション技法研修：カナダ・サスカチュワン大学の教育法専門家によるアクティブ・ラーニングとプレゼンテーション技法を学ぶ」と題し、同大学グウェナモスセンター教員による集中研修を実施した。本研修は、教員を対象としたFDおよび職員向けSDとして１日間にわたって行われ、佐賀大学の教職員および大学院生が参加した。本研修には、本学の教職員合計６名が参加した。内訳は以下のとおりである。

【学内】農学部：２名（教員）、医学部：１名（教員）、国際交流推進センター：１名（教員）、留学生交流室事務職員：１名、教育企画課事務職員：１名。研修は、午前と午後の二部構成で行われ、午前の部では、ウィノナ・パートリッジ講師（前サスカチュワン大学グウェナモスセンター講師）によるアクティブ・ラーニング研修が実施され、BOPPPS フレームワークを活用した学習成果と目標の設定、アクティブ・ラーニング戦略の実践に焦点を当てたワークショップが行われた。参加者はグループワークを通じて、教育現場での応用方法について理解を深めた。午後の部では、ブレンダン・ヴァンドゥーセン講師（全学教育機構）によるTEDスタイルのプレゼンテーション技法研修が実施された。効果的なプレゼンテーションスキルに関する理論を学び、ロールプレイを取り入れたワークショップを通じて、聴衆の関心を引くための話し方や説得力のあるトークの組み立て方について学んだ。研修後のフィードバックでは、講師の指導方法や実践的な内容が特に好評であり、参加者からは「理論だけでなく、実際の授業や発表に活かせるスキルを学ぶことができた」との意見が寄せられた。一方で、教員の参加者数が当初の想定より少なかったことが課題として挙げられた。今後は、教育法のFD研修を大学院生向けにも実施することが一案として考えられる。また、参加者の増加を図るために、口コミの活用や学部長の協力を得るなどの取り組みが必要である。本研修は、教育法やプレゼンテーションの理論を学ぶ機会となっただけでなく、実践の場としての意義も大きかった。

（３）第１回国際的に活躍する先輩から学ぶ講演会「JICA 海外協力隊の先輩から学ぶー海外協力隊の活動と国際的な課題ー」の実施

令和６年７月１０日、特定非営利活動法人九州海外協力協会から、２０１６年～２０１８年にかけてウガンダに海外青年協力隊として派遣されていた佐賀大学卒業生でJICA 海外協力隊OBの吉原伸彦氏を招き、「JICA 海外協力隊の活動と国際的な課題」をテーマに講演が行われた。講演では、吉原氏が新卒でJICA 海外協力隊に応募し、２年間ウガンダに派遣された際の活動内容や経験、現地の生活環境について具体的に紹介された。途上国での協力活動の実態や、異文化の中での適応の仕方、また国際協力の現場で求められるスキルについても詳しく語られた。参加者の中には、「海外協力隊について詳しく知らなかった」「国際協力に関心はあるが、自分に何ができるか分からなかった」という学生も多くいたが、吉原氏の体験談を通じて、具体的なキャリアパスや国際協力に必要な準備について学ぶ貴重な機会となった。学生たちは真剣に耳を傾け、時にはメモを取りながら聴講する姿が印象的であった。質疑応答の時間では、「応募に必要なスキルは？」「活動中のやりがいと苦労は？」「帰国後のキャリアにどう活かせるか？」といった具体的な質問が寄せられ、吉原氏は自身の経験を交えながら丁寧に回答した。

（４）米国 ETS の公認トレーナー五十峰聖氏による「TOEFL ITP スキルアップセミナー」の開催

令和 6 年10月23日、佐賀大学と ETS Japan TOEFL 日本事務局の共催により、「TOEFL ITP スキルアップセミナー」を開催した。本セミナーでは、TOEFL ITP の概要、サンプル問題の体験、効果的な勉強法や情報の集め方についての特別講義が行われた。講師は、桜美林大学准教授であり、TOEFL テスト開発・運営元である米国 ETS の公認トレーナーである五十峰聖氏が務めた。佐賀大学の多くの海外協定校では TOEFL ITP スコアが必要であり、交換留学を目指す学生にとって重要な機会となった。また、TOEFL の勉強を始めたいが方法が分からない、適切な参考書を知りたいといった疑問を持つ学生に向けて、具体的なアドバイスが提供された。英語学習に興味がある方や、TOEFL のスコア向上を目指す方にとって、実践的な知識を得る貴重な機会となった。

（５）国連ハビタット福岡本部から平山拓也調整官による特別講演

令和 6 年12月 4 日、佐賀大学にて「第 2 回 国際的に活躍する先輩に学ぶ講演会：国連ハビタット福岡本部の先輩に学ぶ」を実施した。本講演では、国連ハビタット福岡本部（アジア太平洋担当）の平山拓也調整官を招き、「国連ハビタットの活動と国際問題に立ち向かうための語学力」をテーマに講演を行った。参加者の中には、「国連ハビタット」という機関についてあまり聞いたことがないという学生も多くいたが、平山氏の講演では、ハビタットの活動内容や世界が直面する住居環境問題について詳しく説明され、学生たちは真剣に耳を傾けていた。平山氏はカナダへワーキングホリデーで滞在した経験を持ち、語学力向上と国際的なキャリア形成の重要性についても述べ、これから大学での学びや経験を活かし、キャリアパスを築いていく佐賀大学の学生にとって、大変有意義な内容となった。終了後に実施したオンラインアンケートでは好意的な意見が寄せられた。

（６）グローバルサポーターズとの協働による国際交流イベントの実施

キャンパスの国際化、学生の海外留学への意識啓発に向けて、ウェルカム・フェアウェルパーティーの他、インターナショナルウィークやカルチュラルナイトなど、グローバルサポーターズとの協働による様々な国際交流イベントを実施した。

とくにカルチュラルナイトは、留学生や日本人学生がそれぞれの母国の文化を紹介するイベントで、グローバルサポーターズが企画・実施するイベントの中でも一大イベントとして毎年実施しており、令和 6 年度は留学生や日本人学生、教職員など128名が参加した。各国の文化を紹介するブースやパフォーマンス、ファッションショーなどを通して、日本に居ながらにして様々な国の文化に触れることが出来る、国際色豊かなイベントとなった。



参加者の集合写真



ファッションショーの風景



各国の紹介ブース（インドネシア）

今後の課題と新たな取り組み

（１）国際交流の促進とグローバル人材の育成

オンライン・イングリッシュ・ラウンジの利用者はリピーターが中心となっており、新規利用者の参加を促すための新たなアプローチが求められる。例えば、特定のテーマを設けたセッションを導入することで、多様な学

生が興味を持ちやすい環境を作ることが考えられる。また、グローバルサポーターズの体制強化として、卒業生による経験共有の場を設けることで、新メンバーがリーダーシップを学ぶ機会を増やすことができる。来年度は、新入生の段階から国際交流への関心を高めるためのオリエンテーションを実施し、より多くの学生が主体的に活動に参加できる環境を整える。

（２）英語能力測定テストの受験環境の向上

海外派遣や研究発表に必要な英語力向上のため、TOEIC IP や TOEFL ITP の受験機会をより多くの学生・教職員に提供することが重要である。これまでの広報活動に加え、各学部のカリキュラムと連携し、試験の受験を卒業要件の一部とするなど、より受験を促進する仕組みを検討する。また、国際交流推進センター主催の英語プログラム修了者に対し、テスト受験を奨励し、一定のスコアを達成した学生には学内での表彰制度を設けることで、モチベーションの向上を図る。無料受験の枠を拡大し、継続的な学習支援を行うことも有効である。

（３）オンライン英語学習の継続支援策の強化

「アカデミック・エクスプレス３」においては、学習の途中脱落を防ぐため、学習の進捗状況を可視化する機能を活用し、一定の進捗を達成した学生に対するインセンティブ（修了証の発行や単位認定など）を導入することが考えられる。また、学習の継続を促すため、グループ学習や定期的な進捗報告の場を設けることも有効である。さらに、受講者の声を集め、効果的な学習法やモチベーション維持の方法を共有することで、より多くの学生が長期的に学習を継続できる環境を構築する。

Ⅲ. 留学生交流（受入）

1. 留学生受け入れの概況

ここでは、平成27年から令和6年（5月1日）までの過去10年間の在籍身分別留学生数の推移【表1】、国籍別留学生数の推移【表2】をもとに佐賀大学の留学生受入れの実況を報告する。まず、【表1】のコロナ禍前の令和元年度を含む直近5年間を見ると、学位取得を目指した正規生は、令和元年度の152名から令和4年度の97名に大きく減少していたが、コロナ禍が明け、令和5年には119名、令和6年度には132名と復調し始めている。

【表1】平成27年～令和6年 在籍身分別留学生数の推移（毎年5月1日集計）

在籍身分	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
正規生（学位取得）	144	135	140	147	152	138	116	97	119	132
研究生	8	4	11	12	15	12	8	13	2	4
上記「正規生」と「研究生」のうち「帰巢」生（本学特別聴講学生、短プロ、日本語・日本文化研修生経験者）（R1以降）	6	4	3	4	11	12	10	13	15	16
特別研究学生	3	3	1	5	1	0	0	0	3	3
特別聴講学生	0	0	0	0	16	8	0	4	15	16
短プロ SPACE	48	55	58	64	39	14	0	6	28	29
科目等履修生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
日本語・日本文化研修留学生	2	4	1	1	1	1	1	1	1	1
連合大学院	4	6	13	11	10	10	9	15	19	15
計	209	207	224	240	234	183	134	136	187	200

※ 在留資格「留学」の学生数は鹿児島大学大学院連合農学研究科の学生を含む。

研究生については、令和元年度は15名であり、令和5年度は2名、令和6年度は4名で、その間の実況は、令和2年度から2年連続減少したものの、令和4年度は増加に転じた。令和5年度2名、令和6年度には4名と、再度大きく減少している。

特別聴講学生及び短プロ（短期留学プログラム）SPACEの交換留学生は、コロナ禍前には50～60名前後で推移していた。令和4年度に新規の受入れを再開し、10名を受入れ、令和5年度には43名、令和6年度には45名になり、戻っていると言える。交換留学生の増加が、「帰巢」を通じて、正規の大学院生の増加に寄与している。短期プログラムSPACE-EとSPACE（本年度後期からSPACE-EはSPACE-SAGA、SPACE-SE-B、SPACE-SE-G、SPACE-AGと分離された）の学生の「帰巢」はその多くが国費留学生としての「帰巢」となっている。表に記載はないが、本年度（令和6年度）は前にSPACE-Eに参加し、大学院生として「帰巢」した学生は7名に達している。特別聴講学生は、交換留学終了後に日本からの奨学金を獲得できない場合でも大学院生としての「帰巢」が見られることから、特別聴講学生から大学院生への「帰巢」も再開すると思われ、令和6年度には実際、1人「帰巢」した。このように令和4年度には、大学院生・研究生の合計110名のうち、「帰巢」者は13名、令和5年度は119名のうち15名、令和6年度は132名のうち16名である。このように優秀な正規大学院留学生獲得の更なる促進にはこの「帰巢」が鍵であると考えられる。SPACE-ARITA（芸術地域デザイン学部）、SPACE-ECON（経済学部）、SPACE-SE-G（理工学研究科・工学系研究科・先進健康科学研究科（生体医工学コース及び健康機能分子科学コース））、本年度から開設されたSPACE-SAGA（国際交流推進センター）、SPACE-SE-B（理工学部）、SPACE-AG（農学部）を経た留学生が大学院生として多く「帰巢」することを期待している。

次に、国籍別留学生数の推移【表2】を概観する。

【表2】平成27年～令和6年 国籍別留学生数の推移（各年5月1日集計）

国・地域		H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
アジア	インドネシア	5	10	11	19	16	9	9	14	22	29(24)
	カンボジア	1	3	3	5	2	2	2	1	3	3(1)
	スリランカ	5	6	6	5	5	4	3	8	11	7(7)
	タイ	12	19	19	8	7	7	5	6	5	6(5)
	韓国	9	18	17	18	17	11	6	6	13	14(5)
	台湾	11	11	8	15	13	4	1	3	10	6(0)
	中国	93	63	74	79	86	74	51	44	48	50(36)
	ネパール	2	3	1	0	1	1	1	1	2	2(2)
	パキスタン	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
	バングラデシュ	18	24	26	26	25	20	16	15	21	28(28)
	ベトナム	17	12	15	14	11	12	9	8	10	8(6)
	マレーシア	20	16	15	19	18	11	10	7	8	11(11)
	ミャンマー	1	3	5	8	11	11	10	6	5	3(3)
	モンゴル	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0
	ラオス	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
オセアニア	オーストラリア	3	1	2	1	1	0	0	0	0	1(0)
北米	アメリカ	1	1	1	0	1	2	0	0	0	3(0)
	カナダ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1(1)
中南米	エクアドル	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1(1)
	ブラジル	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
	メキシコ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1(1)
ヨーロッパ	アルメニア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	イギリス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)
	オランダ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	カザフスタン	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0
	コソボ	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1(1)
	スウェーデン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	スペイン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2(0)
	セルビア	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	ドイツ	0	1	1	3	1	1	1	0	1	1(0)
	トルクメニスタン	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	フィンランド	2	1	1	1	2	2	0	1	0	1(0)
	フランス	1	2	1	3	3	1	2	2	4	2(0)
	ベルギー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	ポーランド	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1(0)
	リトアニア	1	0	2	3	3	4	0	2	3	1(0)
	ルクセンブルク	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(0)
中近東	イラン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アフリカ	アンゴラ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1(1)
	ウガンダ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	エジプト	2	3	3	2	1	1	0	0	0	0
	エチオピア	0	0	0	1	1	0	1	1	1	1(1)
	ガーナ	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
	カメルーン	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	ケニア	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1(1)
	サントメ・プリンシペ	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1(1)
	ジンバブエ	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1(1)
	セネガル	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0
	チュニジア	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0
	ナイジェリア	0	0	1	1	0	1	1	0	2	4(4)
	ナミビア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)

国・地域		H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
アフリカ	ニジェール	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)
	ブルキナファソ	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0
	ブルンジ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)
	ベナン	0	0	0	0	1	1	1	2	2	1(1)
	南アフリカ	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0
	南スーダン	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	モザンビーク	1	2	2	3	2	1	0	1	2	2(2)
	モロッコ	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
計		208	207	224	240	234	183	134	136	187	200(132)
国・地域数		22	27	29	26	28	24	22	26	32	37

※在留資格「留学」の学生数は、鹿児島大学大学院連合農学研究科の数を含む。

※平成25年10月より短期留学プログラム（SPACE-J）が開始となり、平成26年度から特別聴講学生に分類されていた留学生は短プロ SPACE に加えられている。令和元年度から短期留学プログラム（SPACE-J）は募集を停止し、特別聴講学生としての受け入れに切り替えた。

*（ ）内は正規生数。R6年度から正規生数を加えた。

今年度、国籍別留学生数の正規生数（学部生を含む）を（ ）で令和6年度のみ新たに加えた。これにより近い将来の留学生の受け入れがある程度推測でき、さらに、これからの本学の受け入れの方針を立てることが可能である。表には出ていないが、学部生の正規生は韓国3名、中国4名、マレーシア9名、ジンバブエ1名、エクアドル1名、インドネシア2名、メキシコ1名で、これらを引くと、大学院生の正規生数は多い順に、①中国32名、②バングラデシュ28名、③インドネシア22名、④スリランカ7名、⑤ベトナム6名、⑥タイ5名、⑦ナイジェリア4名、⑧ミャンマー3名、⑨マレーシア2名、⑩韓国2名、⑪ネパール2名、⑫モザンビーク2名、⑬カンボジア1名、⑭カナダ1名、⑮イギリス1名、⑯コソボ1名、⑰アンゴラ1名、⑱エチオピア1名、⑲ケニア1名、⑳サントメ・プリンシペ1名、㉑ナミビア1名、㉒ニジェール1名、㉓ブルンジ1名、㉔ベナン1名である。まず、これらの国からは大学院生を受け入れる環境が本学に整っていることを示す。アフリカ諸国からの留学生が15名在籍しているが、これは、ABE イニシアティブ等で JICA 研修生を積極的に受け入れてきたことが功を奏し、近年では、アフリカ諸国から国費や私費の留学生が在籍するようになってきているためであると考えられる。今後もこれらの国からの大学院生数を増えるよう継続して教員は努力したいところである。

またアフリカ諸国を除いた国（2重下線の国）のうち留学生数から学部生と大学院生の正規学生数を引いた数、つまり、短期交換留学生、研究生などの数は、多い順に、①バングラデシュ14名、②中国10名、③韓国6名、④インドネシア3名、⑤ベトナム2名、⑥タイ1名である。とすると、これらの国からは将来、「帰巢者」が、すなわち大学院生の正規生数として再入学する学生が期待できる。バングラデシュからの正規の留学生数は将来的に中国を上回ると予想される。また、インドネシアからの大学院の正規学生数も期待できる。かつて多くの留学生が在籍していたタイ、ベトナム、ミャンマー、マレーシアのうち、2024年度、2025年度にホームカミングデーを開催したタイとベトナムについてはホームカミングの良い結果の兆しが見られる。タイに関しては、ホームカミングデーの開催を通して、タイの地方の大学生がバンコクで学ぶ場合と日本の大学の学部で学ぶ場合を比較して金銭的コストは日本の方が抑えられることが明らかとなった。

以上を踏まえると、本学が積極的に大学院生数増加を目指して戦略的に取り組むことが可能であり、かつ、その可能性がある国は、マレーシア、スリランカ、台湾が挙げられる。まず、台湾からの留学生は本年度の大学院の正規生数は0名であり、この点については何らかの対応が必要であると考えられる。次に、スリランカに関しては正規生数が7名であるが、短期の交換留学生を増やすことで将来的に大学院の正規生数の増加につなげることができないか検討の余地がある。最後に、マレーシアについては学術・学生交流提携大学がないため、短期の交換留学生も受け入れていない。この状況を改善し、交流の基盤を整えることで大学院の正規学生数の受け入れにつながることを期待される。

本学では現在独自の制度である「佐賀大学友好特使」を活かした広報活動や海外版ホームカミングデーの開催

などを通して、各国の同窓会組織との連携を深めている。これにより、帰国した外国人留学生とのネットワークを強化し、その活用による留学生の誘致に取り組んでいるところである。今後スリランカ、マレーシアが次のホームカミングデーの開催候補国となると思われる。ただしタイやベトナムと異なり、二つの国のどちらかでホームカミングデーを開催する場合は、より下準備が必要であろう；1）スリランカからは私費で留学生が来るのが難しい、2）マレーシアとは学術・学生交流の提携大学がない。

さらに、戦略的パートナーシップ（P S）校で国際会議を開催し、本学とP S校の教員が研究発表を行うことで、P S校の学生に本学の研究内容を直接紹介する機会を創出し、将来的に、本学で学位取得を目指す留学生の増加につなげるという取り組みも検討に値するだろう。

最後に、ホームページやSNS等による広範囲な広報活動を行うことが重要であると考えられる。

2. SPACE-E（前期）、SPACE-SAGA（後期） 実施報告

■コーディネーター

古賀 弘毅 准教授（国際交流推進センター）

■実施目的

SPACEの改革によって本年度前期までのSPACE-E（英語プログラム）は、学部と交換留学生の関係深化、大学院への「帰巢」増加を目的に、本年度後期に、①理工学部のSPACE-SE-B（学部生用）とSPACE-SE-G（大学院生用）、②農学部のSPACE-AG、そして、③文系学部のSPACE-SAGAに分割を行った。SPACE-SAGAでは佐賀大学の正規学生が派遣を望む海外交流提携校からの受け入れを主目的とする。このため、佐賀大学の正規学生（主に日本人の学生）が留学を希望する欧米の大学や一部の中国、台湾、タイの大学などからも留学生を受け入れている。もう一つの目的は、佐賀大学正規の学生（主に日本人学生）が異文化を体験し、留学への動機づけとするなど、正規学生の受け入れ留学生との異文化交流体験につなげることである。この二つの目的に従い、これらの大学からの受け入れ留学生にとって魅力あるプログラムにする工夫が必要である。

■実施概要

令和5年度後期入学から令和6年度後期入学の留学生で、1学期滞在の留学生、そして、2学期滞在の留学生と分けて順次報告する。また令和4年度に対面によるプログラムが再開され、令和4年10月に参加した学生のうち1名が2学期目にも参加した【表1】。

【表1】令和5年度後期～令和6年度前期（SPACE-E）

番号	受入学部	国籍	性別	在籍大学	指導教員	奨学金
1	農学部	インドネシア	女	リアウイスラム大学	鈴木 章弘	JASSO

加えて4月入学の学生を17名受け入れた【表2、3】

【表2】令和6年度前期のみ（SPACE-E）

番号	受入学部	国籍	性別	在籍大学	指導教員	奨学金
1	教育学部	アメリカ	男	スリッパリーロック大学	林 裕子	
2	教育学部	リトアニア	女	ヴィタウタスマグヌス大学	後藤 正英	
3	教育学部	オーストラリア	男	ラトロープ大学	古賀 弘毅	
4	芸術地域デザイン学部	ベトナム	女	ハノイ国家大学外国語大学	重藤 輝行	
5	芸術地域デザイン学部	台湾	女	国立東華大学	藤井 康隆	
6	芸術地域デザイン学部	インドネシア	男	IPB 大学(ボゴール農業大学)	石井 美恵	
7	経済学部	韓国	女	全南大学校	吉田 友紀	
8	経済学部	台湾	女	国立東華大学	角田幸太郎	
9	理工学部	インドネシア	女	マラン国立大学	池上 康之	
10	理工学部	インドネシア	男	サムラツランギ大学	大串浩一郎	佐賀大学奨学金
11	理工学部	インドネシア	男	サムラツランギ大学	三島悠一郎	
12	農学部	フィンランド	女	ユバスキュラ大学	徳田 誠	

【表3】令和6年度前期～令和6年度後期（前期 SPACE-E、後期 SPACE-SAGA）

番号	受入学部	国籍	性別	在籍大学	指導教員	奨学金
1	教育学部	アメリカ	女	スリッパリーロック大学	林 裕子	
2	教育学部	韓国	男	釜山大学校	石川美也子	
3	教育学部	タイ	女	タマサート大学	川中子 正	
4	経済学部	カンボジア	女	王立法経大学	内山真由美	
5	経済学部	カンボジア	女	王立法経大学	谷口みゆき	佐賀大学奨学金

これら計17名の学生の出身国別の人数は、アメリカ2人、オーストラリア1人、フィンランド1人、リトアニア1人、台湾2人、インドネシア4人、タイ1人、韓国2人、ベトナム1人、カンボジア2人である。受け入れ学部別に見ると、教育学部6人、芸術地域デザイン学部3人、経済学部4人、理工学部3人、農学部1人である。なお、令和6年度前期は13名の学生が修了し、無事SPACE-Eの所定の単位を修得し、修了証が付与された。

令和6年度前期のSPACE-Eから後期にSPACE-SAGAに変更した学生5名に加えて【表3】、10月に新たに学生6人が入学した【表4、5】。後期の学生の出身国・地域別の人数は、アメリカ1人、タイ1人、カンボジア2人、フィンランド2人、韓国2人、台湾1人、ベトナム1人である。受け入れ学部別に見ると、教育学部4人、芸術地域デザイン学部2人、経済学部5人である。先述したように、令和6年度後期からSPACEの分割が行われ、SPACE-SAGAは文系の短期留学受け入れプログラムとなっている。

【表4】令和6年度後期のみ（SPACE-SAGA）

番号	受入学部	国籍	性別	在籍大学	指導教員	奨学金
1	経済学部	韓国	女	釜慶大学校	中西 一	
2	経済学部	ベトナム	女	ハノイ国家大学経済大学	中村 博和	
3	経済学部	韓国	女	釜慶大学校	早川智津子	
4	芸術地域デザイン学部	フィンランド	女	ユバスキュラ大学	吉住 磨子	
5	芸術地域デザイン学部	フィンランド	男	ユバスキュラ大学	ステファニー・アン・ホートン	

【表5】令和6年度後期～令和7年度前期（SPACE-SAGA）

番号	受入学部	国籍	性別	在籍大学	指導教員	奨学金
1	教育学部	台湾	女	国立東華大学	萱島 知子	佐賀大学奨学金

なお、令和6年度後期に課程を終了した15名の学生のうち14名が修了認定を受けた。

SPACE-Eにおいて、学生は「日本事情研修A、B」、日本語科目（J）、インターフェースプログラムの「異文化交流」科目（C）、英語で提供されている基本教養科目（B）、各学部が提供している「専門選択科目（英語による講義）」（E）を選択し、履修した。科目詳細については【表6】、【表7】、また、『日本事情研修』の学外研修については【表8】を参照してほしい。

【表6】令和6年度前期 時間割（SPACE-E）

	月	火	水	木	金
I			Intercultural Communication I Intercultural Communication III	異文化交流 I Intercultural Communication III	
II	総合初級 I 総合初級 II	総合初級 I 総合初級 II 総合中級 I	Life in Global World	総合中級 I 異文化交流 III Western Culture	総合初級 II 実践日本語
III		アートインコンテキスト	Critical Thinking for the Modern Age		
IV	総合中級 I	理工学紹介 B	日本事情研修（B）	総合初級 I	文法発展導入
V		現代日本の社会経済問題	農学入門 B 食品と環境		

* Intercultural Communication I 集中講義

※「日本語」は能力別クラスになっており、SPACE-Eの学生は日本語初級 I から中級 I までを履修している。

異文化交流の科目では、正規学生（日本人学生）や他の国からの留学生との交流を通して日本文化、他の地域の文化を互い知ることができた。

【表 7】令和 6 年度後期 時間割（SPACE-SAGA）

	月	火	水	木	金
I			Citizenship Education	Cultural Metaphors Introduction to Sociology	
II	総合初級 I 総合初級 II 総合中級 I Key Concepts in Art	総合初級 I 総合初級 II	Intercultural Communication I	Introduction to Science Intercultural communication IV 異文化交流 IV	総合初級 II 実践日本語 E
III	Asian Economics		Aspects of Modern Society	総合初級 I 総合中級 I English Academic Writing I	実践日本語 A
IV	実践日本語 C	日本・東南アジア関係論	日本・佐賀事情研修(A)		文法発展導入 A
V			総合中級 I		理工学紹介A

【表 8】学外研修等

R 6 年 6 月 7 月	・日本事情研修 B（福岡市民防災センター、九州国立博物館、太宰府天満宮） ・日本事情研修 B（折り紙）
R 7 年 1 月	・日本事情研修 A：異文化交流Ⅳの学生と一緒に有田陶器鑑賞

「日本事情研修 A」では「異文化交流Ⅱ」と合同授業を行い、異文化交流に関するトピックで日本人学生と留学生の混在のグループで口頭発表する協働がなされた。

以上の科目の他に、SPACE-E では、申請時に自主研究を希望していた学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。自主研究のテーマは以下の通りである。

【表 9】令和 6 年度（SPACE-E、前期のみ）自主研究テーマ

学部	期間	指導教員	自主研究テーマ
農学部	2024. 4 - 2024. 9	鈴木 章弘	バクテリアの共接種による薬用植物カンゾウの効率的な栽培法の確立
理工学部	2024. 4 - 2024. 9	池上 康之	インドネシアにおける海洋温度差発電のポテンシャル評価に関する研究
理工学部	2024. 4 - 2024. 9	大串浩一郎	気候変動が降雨パターンと洪水流量の変化に及ぼす影響
理工学部	2024. 4 - 2024. 9	三島悠一郎	農業用水路における水生植物の繁茂の実態調査
農学部	2024. 4 - 2024. 9	徳田 誠	特定外来生物オオキンケイギクが在来植物の受粉に及ぼす影響

なお、各学部で運営・実施される SPACE-SE-G、SPACE-AG では自主研究と専門の学びが主である。

3. SPACE-ARITA 実施報告

■コーディネーター

三木 悦子 准教授（芸術地域デザイン学部）

■プログラム概要

SPACE-ARITA は佐賀大学と学術交流協定校を結ぶ芸術・デザイン分野の陶磁器による表現を、専門的に学ぶ、留学生を対象とした一学期間（4ヶ月）のプログラムである。本プログラムは在籍校にて陶磁器の授業やプログラムを履修していることが参加の前提であり、留学生が個々に立ち上げるメインプロジェクト「自主研究C（秋学期）／D（春学期）」を軸に、肥前地区の窯業について学ぶフィールドワーク「日本事情研修E（秋学期）／F（春学期）」に加え、自己の研究内容や興味関心により、有田キャンパスで開講される授業を選択して受講することで専門性を高めることができる、ユニークで柔軟なカリキュラムを提供している。留学生はSPACE-ARITA のプログラムの中で、正規学生（有田セラミック分野学生等）や肥前地区の窯業事業者との学術的で有意義な交流や、有田に暮らす中での地元の人々との交流を通じて、日本の社会や地域の人々への認識や理解を深めることのできる貴重な機会となっている。

また、学期開始から1ヵ月後には、自己紹介を兼ねたパネルプレゼンテーションを本庄キャンパスで開催している。これはSPACE-ARITA 留学生と本学学生との交流の場をつくるとともに、留学生の在籍校での授業内容やキャンパスライフ、現地生活情報などを本学学生に提供することを目的としている。こうした取り組みを通じて本学学生が将来留学を目指す動機付けになることを期待している。

履修科目は以下の表の通りである。

留学生の最低履修要件は各学期12単位以上で、修得した単位は佐賀大学の成績証明書として発行され、要件を満たした学生は、留学期間の終わりに修了証が授与される。また学期終了後には、佐賀大学で修得した単位数を、在籍大学の国際課またはそれに相当する部署に報告する。

指導教員

※留学生の研究内容により各研究段階によって専門分野の教員が指導する。

田中 右紀 教授（芸術地域デザイン学部）

三木 悦子 准教授（芸術地域デザイン学部）

湯之原 淳 准教授（芸術地域デザイン学部）

甲斐 広文 准教授（芸術地域デザイン学部）

SPACE-ARITA の履修科目

SPACE-ARITA	必修科目	自主研究C（秋学期）／D（春学期）	6単位	1学期あたり 12単位以上
		日本事情研修E（秋学期）／F（春学期）	2単位	
	選択科目	ロクロ成形Ⅰ（春学期）／Ⅱ（秋学期）／Ⅲ（春学期）	2単位	
		石膏型成型Ⅰ（春学期）／Ⅱ（秋学期）／Ⅲ（春学期）	2単位	
		陶磁成形技法Ⅰ（春学期）／Ⅱ（秋学期）／Ⅲ（春学期）	2単位	
		装飾技法Ⅰ（隔年開講）／Ⅱ（隔年開講）	2単位	

「自主研究C（秋学期）／D（春学期）」

「自主研究C（秋学期）／D（春学期）」は留学生のメインプロジェクトで、留学期間の大半をこの活動に費やす。プロジェクトの最初に有田で習得したい内容の研究テーマを設定し、基本的に毎週行われる教員とのミーティングを経て、方向性を決定する。そして相互に関連する「日本事情研修E（秋学期）／F（春学期）」と共に、研究への調査や試作・試験を行い、プロジェクトの内容をより深めていく。各留学生は各自の研究テーマに即し、アイデアの設計、型作り、生地成形、焼成等、やきものの過程を学習し、スケジュールを含むプロジェクト全体を管理する。また肥前窯業圏特有の専門的な知識によるアドバイスや技術指導は、毎週行われるミーティングで確認し、それぞれの進捗に合わせて専門教員が適宜行う。

留学期間の最後に、研究の軌跡をまとめたブックレット作成と、最終プレゼンテーションを有田キャンパスにて企画開催する。これは有田キャンパスを中心に肥前窯業圏でお世話になった作家や企業、佐賀県窯業技術センターや九州陶磁文化館、有田町歴史民俗資料館などの連携機関、更には地域住民の方々に学習成果を発表し、研究を還元することを目的としており佐賀大学の教員や学生、肥前地区の窯業事業者、地域住民、メディアなどあわせて約50名の方々が参加する。

「日本事情研修E（秋学期）／F（春学期）」

「日本事情研修E（秋学期）／F（春学期）」では、肥前地区の陶磁器産業の現場見学や、美術館や博物館見学による歴史的な観点を学び、肥前はやきものへの理解を深めることを目的としている。日本磁器発祥の地であり、世界に羽ばたいた有田焼の特殊性と、肥前窯業圏の様々なやきものの表現、陶磁器産業の現在を、日本文化を通して知ることができる。また見学先で調査や意見交換を行い、日本国外の陶磁器産業との比較を通して相対的にやきものを見ることで、改めてやきものの在り方について考える機会となっている。

本プログラムでは週1回、全15回の授業を、窯業関連の様々なところに訪問し見学するフィールドワークとして行い、自主研究との関連性を深めるため、基本的に学期の初旬（春学期：4月～5月、秋学期：10～11月）にかけて行う。最後に、調査・見学の軌跡をまとめたブックレットを作成する。

■令和6年度春学期（令和6年4月～8月）

実施概要

令和6年4月にドイツ Burg Giebichenstein University of Art and Design Halle（以下 BURG/Halle）よりドイツ人1名、アメリカ Slippery Rock University of Pennsylvania（以下 SRUP）よりアメリカ人1名、計2名の留学生を芸術地域デザイン学部芸術表現コース有田セラミック分野で受け入れた。学生は、必修科目である「自主研究D」と「日本事情研修F」、選択必修の「ロクロ成形Ⅰ」、「陶磁成形技法Ⅰ」／「装飾技法Ⅰ」を履修した。

春学期入学者（2か国・地域 2大学 2人）

	氏名	性別	大学名／国・地域	在籍校での専攻	在学期間
1	Mr. Breuer Linus Michel Fritz	男	BURG/Halle (GERMANY)	Industrial Design	半年
2	Ms. Samantha Kaitlyn Dennerlein	女	SURP (USA)	Art	半年

令和6年度春学期時間割

	月	火	水	木	金
I	(自主研究D)		(自主研究D)		(自主研究D)
II	(自主研究D)	「自主研究D」 全体ミーティング	(自主研究D)	SPACE-ARITA 日本事情研修F	(自主研究D)
III	ロクロ成形 I	装飾技法 I / 陶磁成形技法 I	(自主研究D)		(自主研究D)
IV	ロクロ成形 I	装飾技法 I / 陶磁成形技法 I	(自主研究D)		(自主研究D)
V			(自主研究D)		(自主研究D)

「パネルプレゼンテーション」

7月3日(水) 14:40~16:10、A101教室(オンライン併用)にて開催。SPACE-ARITA 留学生2名は、自国について、出身大学での教育やこれまでの制作について触れ、自己紹介を行った。さらに芸術地域デザイン学部地域デザインコースから、フィンランドのユバスキュラ大学へ留学した桶本さん、リトアニアのヴィタウタスマグヌス大学へ留学した塚本さんの2名が、本学部学生からの視点で交換留学について話した。芸術系の交流協定校4校について、教育内容や海外生活などの留学体験の実情を一度に知ることができる機会となり、正規学生の留学意識の向上に繋がったと思われる。

芸術地域デザイン学部の交換留学のお話

'24.07.03
WED
14:40-16:10
@A101
TEAMS:「芸地デ・国際交流」
チームコード
0bbf011

14:40-14:50 冒頭説明
14:50-15:30 SPACE-ARITA 交換留学生の大学紹介
▶ Mr. Erwan Linus Michel Fritz / GERMANY
▶ Ms. Samanthia Kaitlyn Dennerlein / USA
15:30-15:50 芸術地域デザイン学部の留学体験紹介
▶ 地域デザインコース 桶本 優 さん
▶ リトアニアのヴィタウタスマグヌス大学へ留学した塚本 さんの2名が、本学部学生からの視点で交換留学について話した。



「自主研究D」

「自主研究D」テーマ

1	Mr.Breuer Linus Michel Fritz	<p>「Intersections between nature and human」</p> <p>自然とそれに対する人為介入のコントラストをテーマに、自然の素材と工業的に量産された特徴的なモチーフを組み合わせる。有田焼の磁器の原料である陶石そのものに、人が作り出した工業的なモチーフを切削して加工し、日本の自然と文化に対する外国人としての非常に個人的な視点で、自然と人為の相互作用をアイコニックに作品として表現した。</p>	
2	Ms.Samantha Kaitlyn Dennerlein	<p>「Growth」</p> <p>有田が長い歴史の中で培ってきた様式をオマージュし、有田の植物や紅葉、そして現地調査や滞在中に訪れた場所からインスピレーションを得てイラストレーションにし、私らしい紋様を染錦で表現した。これらの作品はここ有田での私個人の大きな成長の旅そのものである。</p>	



「日本事情研修F」

オリエンテーションで学生に配布する、秋学期の見学等を記した予定表は以下の表の通りである。

日本事情研修予定表：The schedule of “Field work on Japanese affairs” 2024

	日	時限	内容
1	10-Apr Wed	I ~ II 9 : 00~12 : 00	オリエンテーション、有田歴史民俗博物館見学、佐賀県窯業技術センター Introduction, to visit Arita Fork & History Museum, Saga Ceramics Research Laboratory
2	19-Apr Fri	II ~ IV 10 : 00~12 : 00 13 : 30~14 : 30 15 : 00~16 : 00 16 : 30~17 : 00	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 有田 vol.1 (フィールドワーク (学外見学一日研修)) 有田町内散策：泉山陶土採掘場、大銀杏、口屋番所跡、トンバイ壁、陶山神社、天狗谷窯跡、唐臼 to study porcelain industry in Hizen district vol.1 (1day field work in Arita) Walking around Uchiyama district: Izumiyama Quarry, Oicho (Big Gingko Tree), Old Guard House, Tonbai Walls Area, Tozan Shrine, Ruins of the Tengudani Kiln, Karausu (Working Hammer Mill) 九州陶磁文化館見学：Kyushu Ceramic Museum 田島商店：Tajima clay factory 山辰製型所：Yamatatsu-seikeisho (model&mold making factory)
3	26-Apr Fri	II ~ IV 10 : 35~11 : 30 13 : 00~14 : 00 14 : 30~15 : 30 16 : 00~17 : 00	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 有田 vol.2 (フィールドワーク (学外見学半日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.2 (1day field work in Arita) 福稔生地：Fukutoshi raw products making factory 錦右エ門陶苑：Kin'emmon-touen (pottery) 柿右衛門窯：Kakiemon (traditional pottery, national treasure 14th Kakiemon) 卸団地他：Arita Será the showrooms of wholesale company
4	22-May Wed	I ~ II, IV 9 : 15~10 : 15 10 : 30~ ~12 : 20 14 : 55~16 : 15	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 有田・波佐見 vol.3 (フィールドワーク (学外見学半日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.3 (1day field work in Arita and Hasami) 白山陶器：Hakusan Porcelain (porcelain manufacturer) 焼物公園・陶芸の館 (波佐見焼資料館)：Open Air Museum of Kilns in Hasami, Ceramics Hall (Hasami-yaki museum) 中善窯：Nakazen-kama (porcelain manufacturer) 香蘭社：Koransha (porcelain manufacturer)
5	7-Jun Fri	I ~ IV 9 : 00~10 : 30 11 : 30~12 : 15 14 : 30~15 : 30 16 : 00~17 : 00	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 伊万里・唐津周辺 vol.4 (フィールドワーク (学外見学一日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.4 (0.5day field work to Imari and Karatsu) 畑萬陶苑・大川内山見学：Hataman-touen (pottery), to see around the porcelain field of Nabeshima domain “Imari Ohkawachi-yama” 作礼窯：Sakurei-gama (pottery) 太郎衛門窯：Tarouemon-kama (traditional pottery) 唐津城：Karatsu-jo (the important castle of porcelain of Karatsu domain in Edo period)
6	26-Jun Wed	II 10 : 30~11 : 30	プレゼンテーション・ブックレット提出 Submitting the data of Booklet



「最終プレゼンテーション」

8月6日（月）17:00～19:00、有田キャンパス、プロジェクトルームにて開催。SPACE-ARITAでの半期の学習成果を「自主研究D」の最終作品とBooklet、「日本事情研修F」のBookletを展示。発表は学生や教員、窯業関係者や地域住民に広く開かれ、コンセプトや表現につながる考え方、制作過程や制作方法、その中での課題や展開などが発表された。その後、留学生それぞれの展示場所で様々な感想や意見交換がなされた。有田滞在中の外国人クリエイターも多数参加しており、SPACE-ARITAの最終プレゼンテーションが周知され、国際的な研究交流の場となってきたことがわかる。終了後は学生主催の交流会が行われ、共に学んだ学生と最後の親睦を深めていた。





■令和6年度秋学期（令和6年10月～令和7年2月）

実施概要

令和6年10月にオランダ Design Academy Eindhoven（以下 DAE）よりデンマーク人1名、ドイツ BURG/Halle よりドイツ人1名、計2名の学生を芸術地域デザイン学部芸術表現コース有田セラミック分野で受け入れた。学生は、必修科目である「自主研究C」と「日本事情研修E」、選択必修の「窯芸基礎」、「陶磁成形技法Ⅱ」、「ロクロ成形Ⅱ」／「石膏型成形Ⅱ」を履修した。

秋学期入学者（2か国・地域 2大学 2人）

	氏名	性別	大学名／国・地域	在籍校での専攻	在学期間
1	Mr. Krimmer Sebastian	男	BURG/Halle (GERMANY)	Visual Art / Sculpture	半年
2	Ms. Astrid Vagner Thomsen	女	DAE (NETHERLANDS)	Studio Do-Make	半年


令和6年度秋学期時間割

	月	火	水	木	金
I	陶磁成形技法Ⅱ		（自主研究C）		窯芸基礎
II	陶磁成形技法Ⅱ	「自主研究C」 全体ミーティング	（自主研究C）	SPACE-ARITA 日本事情研修E	窯芸基礎
III	石膏型成形Ⅱ／ ロクロ成形Ⅱ	（自主研究C）	（自主研究C）		（自主研究C）
IV	石膏型成形Ⅱ／ ロクロ成形Ⅱ	（自主研究C）	（自主研究C）		（自主研究C）
V		（自主研究C）	（自主研究C）		（自主研究C）

「自主研究C」

「自主研究C」テーマ

1	Mr. Krimmer Sebastian	<p>[KEMURI NO MUSUBI-nodes of smaoke]</p> <p>電線やケーブルが秩序か無秩序か空に模様を作り、構造を与え、幾何学的なパターンを構築する。あちこちで散乱したホースやコードがきっちりと巻かれて整然と並んでいるものもあれば、乱雑に横たわっているものもあり、それらの予測不可能な経路に興味を持った。この「無秩序」を、器という「秩序」ある構造に組み入れた二面性のある器のシリーズを制作した。</p>	
---	-----------------------	---	--

2	Ms. Astrid Vagner Thomsen	<p>[Unnecessary Necessities]</p> <p>日本の、伝統に深く敬意を払いつつも、様々なものに遊び心ある装飾を施すユニークな文化性の融合をレンズとして使い、装飾が「不要」とされてきた現代の西洋デザインにおける装飾の位置づけを再考した。長い歴史によって培われた技術の結晶である陶磁器に、使い捨てプラスチックの工業的な痕跡を統合し、現代生活における装飾と細部への感謝の念を蘇らせた。</p>	
---	---------------------------	--	---



「日本事情研修E」

オリエンテーションで学生に配布する、秋学期の見学等を記した予定表は以下の表の通りである。

日本事情研修予定表：The schedule of “Field work on Japanese affairs” 2024

	日	時限	内容
1	2-Oct Wed	Ⅲ 13:00~14:30	オリエンテーション・泉山陶土採掘場・有田歴史民俗博物館見学 Introduction, to visit Izumiyama Quarry and Arita Fork & History Museum
2	3-Oct Thu	Ⅲ・Ⅳ 13:00~16:10	九州陶磁文化館・佐賀県窯業技術センター見学 to visit Kyushu Ceramic Museum and Saga Ceramics Research Laboratory
3	9-Oct Wed	Ⅱ~Ⅳ 10:00~11:00 11:15~12:00 12:00~13:45 14:00~15:00 15:10~15:40	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 有田・波佐見 vol.1 (フィールドワーク (学外見学半日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.1 (0.5day field work in Arita) 田島商店: Tajima clay factory 中島石膏: Nakashima model&mold making factory 焼物公園・西の原南倉庫: Open Air Museum of Kilns in Hasami, the shopping place of porcelain 佐藤生地: Satou raw products making factory 松永鋳込: Matsunaga raw products casting factory

	日	時限	内容
4	24-Oct Thu	I ~ V 9 : 00~10 : 00 10 : 30~11 : 30 13 : 00~14 : 00 14 : 20~15 : 20 15 : 30~16 : 10	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 有田・波佐見 vol.2 (フィールドワーク (学外見学一日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.2 (1day field work in Arita) 今右衛門窯 : Imaemon-gama (traditional pottery, national treasure 14th Imamon) 十社 : Jussya (potteries which jointly manages a factory) 白山陶器 : Hakusan Porcelain (porcelain manufacturer) 深川製磁 : Fukagawa Seiji (porcelain manufacturer) 卸団地他 : Arita Será the showrooms of wholesale company
5	14-Nov Thu	I ~ V 9 : 00~10 : 30 11 : 20~12 : 00 14 : 00~15 : 00 15 : 30~17 : 00	肥前地区の焼物産業について学ぶ - 伊万里・唐津周辺 vol.3 (フィールドワーク (学外見学一日研修)) to study porcelain industry in Hizen district vol.3 (1day field work to Imari and Karatsu) 畑萬陶苑・大川内山見学 : Hataman-touen (pottery), to see around the porcelain field of Nabeshima domain "Imari Ohkawachi-yama" 川上清美陶房 : Kawakami Kiyomi-toubou (pottery) 殿山窯 : Tonoyama-kama (pottery) 名護屋城博物館 : Nagoya-jo Museum and Nagoya-jo ruins (the important castle of porcelain of Karatsu domain in Edo period)
6	6-Dec Fri	II 10 : 30~12 : 00	プレゼンテーション・ブックレット提出 Short Presentation with Booklet



「最終プレゼンテーション」

2月13日(木) 17:00~18:30、プロジェクトルームにてオンライン併用で開催。SPACE-ARITAでの半期の学習成果を「自主研究D」の最終作品とBooklet、「日本事情研修F」のBookletを展示。発表では留学生の作品の大きなインスピレーションとなった、海外に住む彼らの視点だから見えた有田や日本の特徴的な景色について話し、制作方法や、その中での課題解決法、表現方法などが発表された。発表には学生や教員を始め、窯業関係者や彼らが滞在中に関わった地域住民も参加しており、有田という地域の中に溶け込みながら留学生活を送っていた感じが感じられた。その後、留学生それぞれの展示場所で様々な感想や意見交換がなされた。終了後は学生主催の交流会が行われ、共に学んだ学生と最後の親睦を深めていた。





4. SPACE-ECON 実施報告

■コーディネーター

中村 博和 教授（経済学部）

■プログラム概要

協定大学で日本語を学んでいる学生を対象にして、経済学部で開講している経済学・経営学・法学の入門・基礎・発展の授業の履修、セミナーへの参加、そして自主研究を行うことで、社会科学と日本社会について学ぶと同時に日本語の能力をさらに向上させることを目的としている。自主研究を必須としており、日本語専攻の学生に対しては、学術的な日本語を書く能力と話す能力の向上を特に重視している。専攻が社会科学である学生には日本と自国の社会を比較しながら、日本社会の理解を進める自主研究を推奨している。プログラムに参加する学生には、経済学部が実施する実地研修や公開講座に参加することも推奨し、佐賀の産業を実地で知り、地域の人々とのふれあいを通じて日本の人々や文化について理解を得ることも可能となるようにしている。

● プログラムと単位

1 学期あたり最低10単位を取得することが求められる。条件を満たした学生には、修了時に佐賀大学から修了証が授与される。また、佐賀大学からは成績証明書を発行するので、所属大学での単位認定は、この成績証明書に基づき、所属大学の評価基準と手続によって行う。なお、各学期において取得した単位数は、所属大学に報告される。

授業は指導教員と相談の上、選択する。また、授業を担当する教員の承諾も得る必要があり、受講者数が制限される場合には受講できないことがある。

履修可能な科目は以下のとおり。

教養教育科目（日本語科目を含む）	選択	1 学期あたり10単位以上を履修する。演習に参加、自主研究の単位数の選択については指導教員と相談して決める。
専門教育科目（講義）	選択必修 (必修6単位)	
演習	必修 (2単位または4単位)	

■2024（令和6）年度の履修者と修了者について

2024（令和6）年度の前学期に中国（5名）、台湾（1名）の6名がSPACE-ECONの学生として学習を行った。うち3名は2023年後期から1年間の受け入れであり、3名が2024年9月からの入学である。2023年後期からの留学生は2024年9月にプログラム修了要件を満たし修了した。

2024（令和6）年度の後学期に、韓国（2名）・ベトナム（1名）の3名がSPACE-ECONの学生として入学した。うち1名は1年間の受け入れであり、2名が半年間の受け入れであった。半年間の受け入れの学生は2025年3月でプログラム修了要件を満たし修了した。

指導教員の決定は学部国際交流委員会で事前に決定し、履修生が自主研究での専門分野選択を希望する場合は指導教員を変更することも可能としており、とくに日本語専攻ではなく、在籍大学での専攻分野が指導教員の専攻と合致しないケースもあったため、自主研究のテーマにあわせて指導教員の変更を行った。

オリエンテーションに際して、修了要件を説明し、社会科学の学修経験が少ない学生には1年次生が履修する科目を履修するように指導を行なった。また指導教員には少人数のセミナーへの参加を認め日本人学生との交流

ができるようにすることを依頼した。

学部の特設講義として、日本経済に関する科目をゼミナール形式で行っており、前期は4名の留学生が受講した。後期は3名の留学生の受講であったが、単位取得とはならない学部1年生の日本人学生も2名参加し一緒に日本経済と比較しながら中国・韓国・台湾の経済と社会を学んだ。日本語専攻の留学生が主であるため単位互換について懸念しており、協定校と協議をして進めていかなければならないと考えている。

5. SPACE-SE 実施報告

■コーディネーター

カーン タウヒドゥルイスラム 教授（理工学部機械工学部門）

■コース概要

大学院 SPACE-SE は、佐賀大学の理工学研究科、工学系研究科、先進健康科学研究科（生体医工学コース及び健康機能分子科学コース）が開設した本学の協定校に所属する大学院生を対象としたプログラムである。授業は英語で開講される。プログラムは各研究科提供の専門科目を選択科目として、研究科の「自主研究」を必修科目として提供する。プログラムに参加する学生は、佐賀大学での研究及び学習によって、理工学研究科、工学系研究科及び先進健康科学研究科において選択した分野の知識を深め、技能を身に付けると共に、日本人学生との交流を通じて日本の文化や事情を経験することで、国際共同研究の端緒をつかむと共に、国際社会での活躍の礎を築くことができる。これらのことを通じて佐賀大学の国際化への貢献も期待される。

※令和6年度後期より SPACE-SE は、SPACE-SE-B（学部生用）と SPACE-SE-G（大学院生用）に再編した。

■応募資格

大学院 SPACE-SE プログラムに応募する学生は、以下の条件を満たすことが必要である。

- 1) 佐賀大学との間で学生交流協定を締結している、もしくは、締結予定の海外の大学に在籍する正規学生であること。
- 2) 佐賀大学に留学している期間、所属大学において正規生として在籍していること。
- 3) 所属大学で大学院生（修士1年生以上、博士後期課程も可）であること。
- 4) 提出可能な英語運用力を示す証明書を有すること。

■受入時期と受入期間

受け入れ時期は10月又は4月とし、期間は半年又は1年とする。

■プログラムと単位

1 学期あたり最低10単位を修得することが求められる。詳しくは以下の「学期当たりの必要履修単位の内訳表」に与えられている。条件を満たした学生には、プログラム修了時に佐賀大学から修了証が授与される。また、佐賀大学から成績証明書が発行されるので、所属大学での単位認定は、この成績証明書に基づき、所属大学の評価基準と手続きによって行う。なお、各学期において取得した単位数は、所属大学に報告される。

- 1) 指導教員と相談の上、授業を選択する。また、授業を担当する教員の承諾も得る必要がある。なお、受講者数が制限される場合は受講できないことがある。
- 2) 履修可能な専門科目は大学院生対象の英語科目である。

学期当たりの必要修得単位の内訳表

* 専門科目	選択必修 2 単位以上	1 学期あたり10単位以上修得すること。
特別自主研究	必修 8 単位	

* 部局の EPGA の科目一覧表を参照。

■応募手続（参考）

必要な書類

- 1) 申請書（写真を添付すること）
- 2) 希望する指導教員から事前に受け入れの同意を得たことを示す電子メール等
- 3) 推薦状 1 通：所属する大学院あるいは出身大学の指導教員によるもの
- 4) 出身大学で発行された成績証明書
- 5) 英語運用力を証明するもの（3つの条件のうち、いずれかを満たすこと：1. CEFR B2、2. 大学院の授業が英語で行われていることを示す証明書、3. CEFR B 2 相当の英語運用力）
- 6) 所属大学で発行された在学証明書 1 通
- 7) 在留資格認定証明書交付申請書（写真を添付すること）
- 8) 健康診断書（申請書内にある）
- 9) 銀行の残高証明書
- 10) パスポートのコピー

申請締切

- 1) 2024年秋学期：2024年 5 月15日
- 2) 2025年春学期：2024年11月15日

申請方法・申請先

- 1) 申請書類一式をスキャンしたものを電子メールにて送付すること。
- 2) 学生から直接、送付された申請書類は受け付けない。必ず、協定校の窓口を通じて送付すること。
- 3) 申請書類送付先及び事務上の問い合わせ先：student-int@mail.admin.saga-u.ac.jp

■結果発表について

書類審査の結果は、各大学を通じ、学生に送付されます。

- 1) 2024年秋学期：2024年 6 月上旬
- 2) 2025年春学期：2025年 2 月中旬

■2024年度の履修者について

➤ SPACE-SE

2024（令和6）年度の春学期にフランスのブルゴーニュ大学の2人（1人は理工学研究科、1人は先進健康科学研究科）と前年度秋学期にポーランドの1人（理工学研究科）合計3人のSPACE-SE 学生が入学し、全員が同じ年度の9月に修了後帰国した。

➤ SPACE-SE-B

2024年10月から理工学部で短期留学生プログラム（SPACE-SE-B）を初めて開始した。インドネシアのサムラツランギ大学、マラン国立大学、ランブンマンクラット大学からそれぞれ1人ずつ合計3人の学生が本プログラムに入学し、全員が同じ年度の3月に修了後帰国した。

➤ SPACE-SE-G

2024年10月からSPACE-SE（大学院）プログラムをSPACE-SE-Gに変更したが、今年度は受け入れる学生がいなかった。



SPACE-SE の終了式記念撮影（2024年 8 月 6 日）



SPACE-SE-B の終了記念撮影（2024年 2 月17日）

6. 令和6年度日本語・日本文化研修コース

■コース概要

本学の日本語・日本文化研修コースは、JASSO からの奨学金を受給し、研修生が、学生も含めた日本人が英語より日本語で話しかけ、日本語で話しかけられることが多い地域で生活し、大学では正規学生（主に日本人学生）と共修する中で、日本語や日本・地域の文化を体験し身につけるプログラムである。プログラムでは、全学教育機構提供の「外国人留学生プログラムのための授業科目」（日本語科目）や日本人学生との共修科目である「インターフェース科目」、また自分の興味や将来の学びに応じた教養科目や各学部提供科目の中から選んで履修することができる。これは平成25年度の日本語カリキュラム改革によるもので、自分の専攻分野や興味に応じた学部の科目を履修し、地域での生活や日本人学生との共修の中で日本語及び日本文化を身につけることができるようになった（表1）。下記の単位を修得すると、修了時に、佐賀大学から修了証が授与される。また、佐賀大学のクラブ、サークル（文系・スポーツ系など）に入り活動を通して友人を作り、日本人と交流を深めるよう、指導している。

【表1】 日本語・日本文化研修生の履修細則

区分		授業科目名	単位数	修了要件
教養教育科目	外国人留学生プログラムのための授業科目			選択必修 2単位以上修得すること
	インターフェース科目			選択必修 2単位以上修得すること
学部間共通： 教育科目	留学生プログラム 教育科目	日本事情研修A	2	選択必修
		日本事情研修C	2	2単位以上修得すること
		日本事情研修B	2	選択必修
		日本事情研修D	2	2単位以上修得すること
全学教育機構が開設する授業科目				選択必修
各学部が開設する授業科目				10単位以上修得すること
計				18単位以上

■コーディネーター

古賀 弘毅 准教授（国際交流推進センター）

■留学期間

令和5年10月～令和6年8月 受入、令和6年10月～令和7年8月 受入（予定）

■応募要件

渡日前に日本語能力試験N2を取得していること。

【表 2】令和 6 年度日本語・日本文化研修コース受講生（令和 5 年 10 月～令和 6 年 8 月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
インドネシア	女	教育学部	ガジヤマダ大学（文化学部・日本語日本文化プログラム）	大学

【表 3】令和 6 年度日本語・日本文化研修コース受講生（令和 6 年 10 月～令和 7 年 8 月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
タイ	女	教育学部	チェンマイ大学（日本語）	大学

渡日前に日本語能力試験 N2 を取得していることを条件とすることで、佐賀大学の現行の日本語カリキュラムや日本人学生との共修授業、学部専門科目の履修が可能となり、高い教育効果が期待できる。

Ⅳ. 研究者交流

1. 令和6年度佐賀大学研究者国際交流支援事業

○令和3年度から、コロナ禍での新たな研究者の国際交流の推進のため、当センターにおいて、海外協定校や研究機関等とのパートナーシップを一層強化するとともに、本学の研究者らの国際交流体制を構築し、研究者の国際交流を推進することを目的に、研究者国際交流支援事業を実施している。

○令和6年度は、オンラインと対面のハイブリットを活用した本学の研究者が主催する国際研究集会（国際会議、国際シンポジウム及び国際セミナー等）を13件支援し、630人（大学院生を含む）が国際交流を行った。

【図1】 令和6年度研究者国際交流支援事業



【図2】令和6年度研究者国際交流支援事業一覧

番号	申請者	所属・職名	申請区分	実施方法	相手国	国際研究集会名	開催期間
1	田 中 右 紀	芸術地域デザイン学部・教授	中規模	ハイブリッド	アメリカ、ドイツ、イギリス	Industrial Design Department at the School of Design, University of Illinois at Chicago/USA, European Ceramic Work Center/ NETHERLANDS, ウェストミンスター大学/ イギリス	2024年12月19日
2	高 橋 智	理工学部・教授	中規模	ハイブリッド	韓国	Workshop on particle physics and cosmology: Saga 2025	2025年 2月12日 ～2025年 2月14日
3	嘉 数 誠	理工学部・教授	一般	ハイブリッド	アメリカ	第4回ダイヤモンドデバイスワークショップ	2025年 2月21日
4	三 木 悦 子	芸術地域デザイン学部・准教授	一般	ハイブリッド	オランダ、ドイツ、アメリカ	春学期・秋学期 ‘SPACE-ARITA’ 自主研究成果発表会	2025年 8月 6日
5	カミスイルサイド アイ マ	農学部・助教授	一般	ハイブリッド	ブラジル	International seminar on gall midges (Diptera: Cecidomyiidae) ecology and biodiversity [ハエ目タマバエ科の生態と生物多様性に関する国際セミナー]	2025年 2月18日
6	辻 一 誠	農学部・教授	一般	ハイブリッド	ベトナム	ベトナム・メコンデルタにおける農業構造変化と農業生産力の保全に関する国際セミナー	2025年 3月 6日 ～2025年 3月 9日
7	土 屋 貴 哉	芸術地域デザイン学部・教授	一般	対面	チェコ共和国	チェコ共和国 - 日本・芸術家国際交流2024	2024年 8月13日 ～2024年 9月 1日
8	柳 健 司	芸術地域デザイン学部・教授	一般	対面	スイス	スイス（ゾロトゥルン） - 日本・芸術家国際交流2024	2024年 4月15日 ～2024年 5月19日
9	田 中 宗 浩	農学部・教授	中規模	ハイブリッド	ベトナム	ダナン生物資源研究会	2025年 1月 6日
10	Rami DERBEL	理工学部・プロジェクト 助教授	中規模	ハイブリッド	チュニジア	国際会議 JIT2025	2025年 3月 2日 ～ 3月 4日
11	三 島 伸 雄	理工学部・教授	中規模	ハイブリッド	タイ、チュニジア、オランダ	建築都市デザイン国際セミナー －災害に強い持続可能な歴史的町並み保存活用 のトータルデザイン探 求研修－	2024年 3月 4日 ～ 3月11日
12	富 永 昌 人	理工学部・教授	中規模	ハイブリッド	インドネシア	学術協定締結 5 周年を記念した国際研究集会	2024年12月 4日
13	藤 井 康 隆	芸術地域デザイン学部・ 准教授	一般	ハイブリッド	中国	博物館と文化遺産青年学者交流会	2025年12月 2日 ～12月14日

○特徴ある取組として、理工学系分野において学部長、教員等を現地に派遣し、カリマンタン工科大学（インドネシア）、と協定5周年の調印式と記念国際研究集会を開催した。



交流の様子

2. 外部資金（国際交流事業関係）

令和6年度外部資金（国際交流事業関係）

事業名	申請数	採択数	獲得額（円）
JSPS 外国人特別研究員（一般）	11	0	-
JSPS 外国人特別研究員（欧米短期）	1	1	700,000
JSPS 外国人招へい研究者	1	0	-
JSPS 令和6年度・新規二国間交流事業（共同研究・セミナー）	9	1	2,000,000
JSPS 令和6年度・継続二国間交流事業（共同研究・セミナー）	-	(2)	2,800,000
JST さくらサイエンスプログラム	8	4	9,965,392
JST インド若手研究人材招へいプログラム	2	0	-
JASSO 帰国外国人留学生短期研究制度	2	0	-
合計	34	8	15,465,392

V. 社会連携

1. 佐賀県および県内企業・団体と連携した佐賀大学の留学生就職支援事業

令和6年度は、国際交流推進センターが外国人留学生の地元就職促進事業を開始して4年目であった。

佐賀大学卒業留学生の日本就職実況

令和6年度末現在で、本学の卒業生の進路に関するデータで最新のものは令和5年度のデータであり、推移を見るため、令和4年度（一昨年の年度）と令和5年度（昨年度）のデータを見る（表1）。

【表1】令和4、5年度末の卒業生の進路データ

年度の 卒業生数	日本国内						出身国（地域）				日本・出身国 （地域）以外				卒業 （修了） 留学生総数	国内進学者を除いた数	国内就職者割合%
	県内就職	県外就職	県内進学	県外進学	その他	計	就職	進学	その他	計	就職	進学	その他	計			
R 4	8	5	27	1	4	45	5	0	11	16	0	0	0	0	61	33	39
R 5	7	9	16	2	3	37	13	0	8	21	0	1	0	1	59	41	39

国内就職者割合は令和4年度、令和5年度とともに39%と変化はなかった。文部科学省「留学生就職促進教育プログラム」（後述）は5年間で国内就職者割合が50%に達することを求めている。

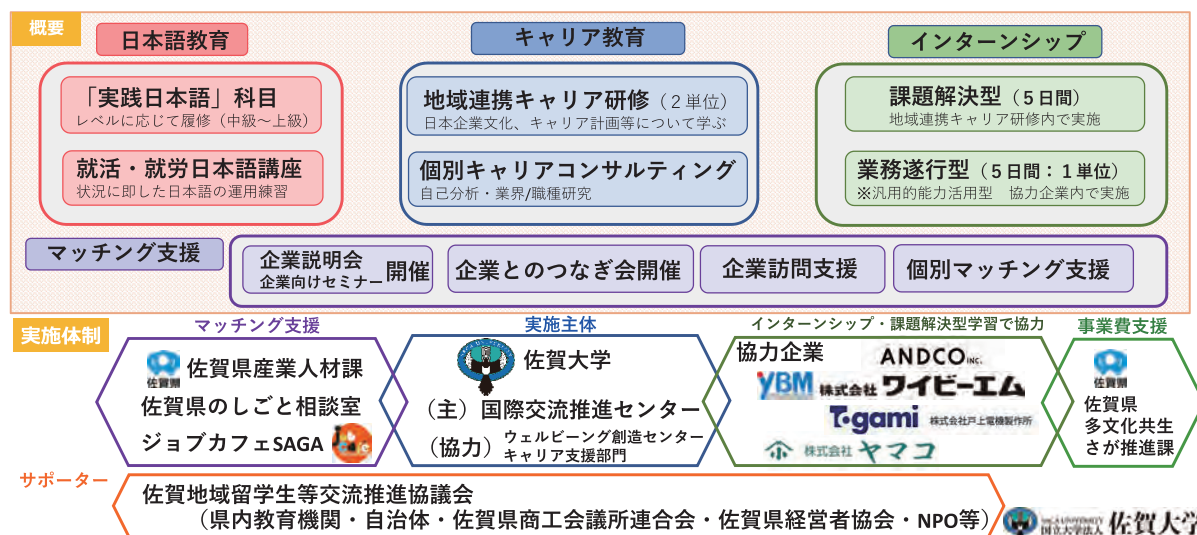
外国人留学生の地元就職促進事業の概要のみをここに繰り返す。同事業の趣旨概要は令和3年度の年報を詳しくは参照されたい。佐賀大学は、佐賀県や県内関係機関と連携し「外国人留学生地元就職促進プログラム（佐賀大学版）」を提供することにより、文化多様性に資し、修士・博士号を持つ外国人留学生の佐賀県や日本への就職を促進する（表2）。

【表2】佐賀大学の外国人留学生地元就職促進授業

佐賀大学の外国人留学生地元就職促進事業

事業目的 佐賀大学の外国人留学生の地元就職促進事業（令和5年度より開始）

- 佐賀県や県内関係機関と連携し、「外国人留学生地元就職促進プログラム（佐賀大学版）」を提供することにより、文化多様性に資し、本学の外国人留学生の佐賀県や日本への就職を促進
- 本事業を通じて、外国人留学生の就職・フォローアップまでの支援を実効的に行う体制を整備
- 佐賀県や地元企業の協力の下、支援体制の整備・強化を図ることで、本学が実施している留学生受入れプログラムをより一層魅力的なものとし、優秀な留学生を受け入れる好循環を生み出す



本事業を通じて、外国人留学生の就職・フォローアップまでの支援を実効的に行う体制を整備し、これにより、本学が実施している留学生受入れプログラムをより一層魅力的なものとし、優秀な留学生を受け入れる好循環を生み出す。

本年度は、昨年度のインターンシップ試行を経て、大学院の教養科目『地域連携インターンシップ』を提供した。

文部科学省「留学生就職促進教育プログラム」の認定

『佐賀大学外国人留学生地元就職促進プログラム（PILWo）』は留学生就職促進教育プログラムとして文部科学省に認定された。これにより、本学は令和5年度後期（秋学期）から5年間、学習奨励費の優先配分（年間10枠）を受けられることができるようになった。（5年間実績を積み、5年後にまた申請すれば継続して採択されることは可能である）。申請の概要は以下を参照。

参画企業・組織：佐賀県、ジョブカフェ SAGA、（株）ANDCO、（株）YBM、（株）戸上電機製作所、（株）ヤマコ

履修要件：（1）佐賀大学に在籍する正規の学生であること。

（2）日本国内での就職を目指す外国人留学生であること。

（3）日本語能力試験 N2 程度のコミュニケーション力のある者、又は、N2 相当の日本語能力の習得を目指す者

修了要件：（1）ビジネス日本語（本学の「実践日本語 A、B、C、D、E、F、表 5、6 参照）科目（2～4 単位）※日本語科目の必須単位は各学生によって異なるため、合計単位が幅のあるものになっている。

（2）『地域連携キャリア研修』（通年 2 単位）

※課題解決型インターンシップ（企業課題のプロジェクトワーク）1単位を含む

（3）『地域連携インターンシップ』（汎用的能力活用型の業務遂行インターンシップ）（夏季集中5日間、1単位）。

※各学生が所属する研究科の専門活用型インターンシップで代替可。

なお、個別キャリア・コンサルティング、マッチング支援を活用しての就職活動は『地域連携キャリア研修』において評価する。上記、単位認定されるものの他、プログラム内で開催される各種セミナー等への参加を必須とする。

教育プログラムの認定により、プログラム定員と同数の学習奨励費の優先配分を受けることとなったが、同時に本学の課題も顕在化している。課題としては事業参加学生が主に国費留学生であったり、就職支援以外併給不可の奨学金を受給している学生が多く、就職支援の奨学金を受ける対象者がかなり少ないという点である。本プログラムについて広報することで私費の正規留学生を獲得し、プログラムの受講者数の確保につなげたい。

「地域連携キャリア研修」（令和5年10月～令和6年9月）の第2学期

本年度、国際交流推進センターは全学教育機構で大学院教養科目「地域連携キャリア研修」の第2学期目を提供した。受講生の一部は先学期から引き続き受講した4人で、理工学研究科1名、地域デザイン研究科地域マネジメントコース3名の学生である（表3）。

【表3】令和5年度後期～令和6年度前期「地域連携キャリア研修」の受講生

	所属研究科	課程	卒業(予定)年月	国籍	就職活動	日本語運用力	*就職状況
1	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2025/03	カンボジア	在学中	N2	帰国
2	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2025/03	中国	在学中	N1	就活中
3	理工学研究科 建築環境デザインコース (EG)	修士課程	2025/03	中国	在学中	N2	内定
4	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2026/09	中国	在学中	N1	内定

*令和7年3月10日現在

「地域連携キャリア研修」の第2学期分の8回分の授業内容は、日本の企業が出す課題に関して小研究をするプロジェクト・ラーニング教育（インターンシップおよび就労の準備となるもの）である。プロジェクト・ラーニングではこの学期、(株)ANDCO様、YBM様、ヤマコ様に協力をいただいた。ANDCO様の課題を受講生2人が、YBM様を1人が、ヤマコ様を1人が担当し、5回の授業と授業外で準備を行った。

1月12日：企業から企業への提案プロジェクトの課題出題

- ・ANDCO（ITコンサルタント会社）：『佐賀の産業課題に対するChatGPTを活用した解決案』＜観光、海苔産業＞
- ・YBM（環境に係るエンジニアリング）：『ワイビーエムでは海外にも製品（機械）を販売しているが、皆さんの国や地域の方々と信頼関係を築くための特徴や性格、注意点などを教えてほしい』
- ・ヤマコ（海苔加工）：ヤマコの海外法人では東南アジア諸国、アメリカ、ヨーロッパに製品を輸出している。①同諸国での新たな海苔需要創出と②アフリカ、インドへの進出戦略を提案して下さい。各国民の食に関する嗜好、製品タイプ、販売先企業、売上予測等。

4月11日～6月20日に小研究を行った。

6月6、13日：オンラインで解決案を企業の方に話し、コメントをいただき、修正の資料とした

7月4日：ANDCO社長に向かってANDCOの課題に提案した

7月11日：YBM海外営業部長に向かってYBMの課題に提案した

7月25日：ヤマコ佐賀工場課長に向かってヤマコの課題を提案した

ANDCO 担当のカンボジアの学生は ChatGPT を使って佐賀県の観光の宣伝を、さまざまな対象の顧客に対する動画の作成法を示した。中国からの学生は海苔産業に対する ChatGPT を活用した産業の進展法を提案した。YBM 担当の学生は中国のさまざまな地域の人々（とくに自分が出身する中国の東北地域）の性格の特徴を提供し、ビジネスの進め方や信頼関係の作り方を提案した。ヤマコ担当の学生はアフリカに市場開拓するのにアフリカにある日本食レストランに海苔を試食できるようにして、海苔を人々に知ってもらおうのいいだろうと提案した。

「地域連携キャリア研修」（大学院教養科目）（令和6年10月～令和7年9月）の第1学期

令和6年度後期・令和7年度前期（第3期目）の受講生は8人で、理工学研究科2名、地域デザイン研究科地域マネジメントコース5名、地域デザイン研究科芸術コース1名の学生である（表4）。

【表4】令和6年度後期～令和7年度前期「地域連携キャリア研修」の履修生

	所属研究科	課程	卒業(予定)年月	国籍	就職活動	日本語運用力
1	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2025年9月	中国	在学中	
2	理工学研究科（博士前期課程） 都市基盤工学コース（T型）	修士課程	2025年9月	ミャンマー 連邦	在学中	N 2
3	地域デザイン研究科 芸術デザインコース	修士課程	2026年3月	韓国	在学中	N 1
4	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2026年3月	中国	在学中	N 2
5	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2026年3月	中国	在学中	N 1
6	理工学専攻（修）（博前） 建築環境デザインコース（T型）	修士課程	2026年3月	イギリス	在学中	
7	地域デザイン専攻 地域マネジメントコース	修士課程	2026年9月	ベトナム	在学中	N 1
8	地域デザイン専攻 芸術デザインコース	修士課程	2026年9月	中国	在学中	N 1

本年度の第1学期分の7回の授業内容は、例年通り、日本での就活（講義）、日本の企業で活躍されている元留学生が講師を務める日本企業で認められる働き方（講義）、日本型雇用の特徴及び日本企業でのキャリアパス（講義）、履歴書・エントリーシートの書き方、佐賀県内企業就職情報の入手方法などを提供した。企業への提案プロジェクトの最初の授業では、学生の自己紹介、(株)ANDCO（ITコンサルタント会社）、(株)YBM（環境に関するエンジニアリング）、(株)ヤマコ（海苔加工）の3社の会社紹介（大学で）、プロジェクト課題提示を行っていただいた。

前年度の課題、「隔週授業のためか、授業スケジュールを学生が忘れ、欠席が目立つ」は、日本の企業文化慣習の協力企業の担当の方への敬意を強く学生に伝え、改善された。やはり、日本の小・中・高校を経験していない外国人留学生にはこのような文化慣習の伝達は避けられないだろう。

企業の協力は企業にとってプラスの面もあるが、負担でもあるので、協力企業を現在の3、4社から、6、7社に増やし、その中で、3年交代でやっていくなど、計画的に行う体制を整えることが必要であろう。

ゲストスピーカー及び連携による授業

10月26日（木）：授業②：「留学生のための就職活動セミナー」（ゲストスピーカー：キャリアバンク株式会社上野明音氏によるセミナー）
11月6日（木）：授業⑥：佐賀県しごと相談室西田和弘氏が授業に参加。各学生の自己紹介に担当教員とともにコメント
11月9日（土）：授業③：田中電子工業株式会社カイルディン・ビン・モハメド・ジョハン氏（元佐賀大学大学院留学生、佐賀大学友好特使）、「日本型雇用の特徴と日本の職場文化」どのようにして外国人が認められるようになるためにどのように働けがいいのかを詳しく教えていただいた
11月14日（木）：授業⑤：ゲストスピーカー日本貿易振興機構（ジェトロ）佐賀貿易情報センター中島諒士氏「日本企業でどのような人材になるか」 1）就職希望先の企業とそこのキャリアパス、2）外国人採用の目的（海外の開拓、日本企業の現地の法人マネジメント候補者として、インバウンド向けの研究開発、企業のグローバル化のため）とキャリアパス、外国人が日本の企業でどのように働いているかの動画

【表5】令和6年度前期 N2を目指す「実践日本語」科目（中級Iより上のレベル）

レベル	授業科目名	授業数(週)	担当教員	備考
中級1.5	実践日本語（B）	1	平川	中級Iと中級IIの間のレベル達成を目指す。N4とN3の間のレベルの達成を目指す。次の学期の科目はA。
中級II	実践日本語（D）	1	平川	N3レベル達成を目指す。次の学期の科目はC。
上級	実践日本語（F）	1	石田	詳しくは上級前半。N2レベル達成を目指す。次の学期の科目はE。

【表6】令和6年度後期 N2を目指す「実践日本語」科目（中級Iより上のレベル）

レベル	授業科目名	授業数(週)	担当教員	備考
中級1.5	実践日本語（A）	1	平川	中級Iと中級IIの間のレベル達成を目指す。N4とN3の間のレベルの達成を目指す。次の学期の科目はA。
中級II	実践日本語（C）	1	古賀	N3レベル達成を目指す。次の学期の科目はC。
上級	実践日本語（E）	1	平川	詳しくは上級前半。N2レベル達成を目指す。次の学期の科目はE。

全学教育機構の大学院教養科目「地域連携インターンシップ」（1単位）（夏季集中 令和6年8月～9月、インターンシップ体験は9月2日～6日）

本インターンシップで受講生は企業で汎用的業務遂行型の就業体験を行った。今回は、中国出身の地域デザイン研究科地域マネジメントコースの2人がヤマコで、カンボジア出身の同コースの1人が佐賀電算センターで、中国出身の理工学研究科 建築環境デザインコース1人がYBMでインターンシップを行った。令和5年度後期令和6年度前期の受講生の4人と同一である（表7）。

【表7】令和5年度「地域連携インターンシップ」履修者（【表3】と同じ）

番号	所属研究科	課程・学年	卒業年	国籍	日本語運用力	日本語運用力	就職状況
1	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2025/03	カンボジア	在学中	N2	帰国
2	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2025/03	中国	在学中	N1	就活中
3	理工学研究科 建築環境デザインコース（EG）	修士課程	2025/03	中国	在学中	N2	内定
4	地域デザイン研究科 地域マネジメントコース	修士課程	2026/09	中国	在学中	N1	内定

本年度が佐賀大学大学院教養科目として最初の提供学期であるので、シラバスから必要箇所を記載する。

講義概要：本科目は、日本の企業への就職を真剣に希望する留学生に業務遂行型のインターンシップを提供する。インターンシップは、佐賀県の支援を受け、県内の企業において企業の協力のもと実施される。インターンシップの内容は、受入企業が示すプログラムに従う。

担当：古賀弘毅（国際交流推進センター教員）＆早川智津子（国際交流推進センター副センター長）

講義形式：インターンシップ：夏季休業期間中（8月中旬から9月末まで）の連続5日間、企業に出勤し、8時間の就業体験を行う。インターンシップ先企業の視察（午前あるいは午後1回）：事前確認。オリエンテーション・ガイダンス（1.5時間）：県の担当者および教員がインターンシップのオリエンテーション、ガイダンスを行う。報告：2024年後期～2025年前期『地域連携キャリア研修』の最初の週の授業、2024年10月3日8：50～9：30に口頭で報告をする。報告30分、10分質疑応答。

開講意図：履修生が『地域連携キャリア研修』の内容（上記）を理解し、日本の企業や組織での就労を理解し、就労の意欲を向上させる。

到達目標：

- （1）『地域連携キャリア研修』の内容を実践する労働環境の実際を知る。
- （2）日本の企業や組織における職務内容と責任の一般を理解すること。
- （3）汎用的能力活用型の実務の一端を理解し、経験すること。

聴講指定：『地域連携キャリア研修』を履修したか、あるいは、履修中であることが必要。

成績評価：『インターンシップ報告書』及び受入企業からの『インターンシップ評価票』を総合的に評価して、点数を付け、成績を出す。

授業計画

- 1：3週間前に90分：オリエンテーション
 - ・古賀：シラバス、『就活ガイド』のインターンシップの頁、スケジュール確認、企業への受け入れ依頼文、企業の実習計画表（様式）、評価票（様式）、学生紹介票（企業見学时に提出）、学生生活課でインターンシップ保険特約b（会社の物の破損、他の人への加害）の購入
 - ・早川：労働＆法律関係（誓約書、協定書）
 - ・西田：インターンシップ心得
- 2：オリエンテーションのすぐ後、1日間の午前あるいは午後：初めてのインターンシップ企業の訪問（佐賀電算センター）：学生は紹介票と誓約書を持参。大学から協定書を事前に送る。
- 3：インターンシップ第1日目（8時間）、交通機関、昼ごはんは自分で会社と話して確認
- 4：インターンシップ第2日目（8時間）
- 5：インターンシップ第3日目（8時間）
- 6：インターンシップ第4日目（8時間）
- 7：インターンシップ第5日目（8時間）
- 8：報告会（『地域連携キャリア研修』の来学期の最初の授業、10月3日（木曜1校時）にて報告）30分

就職ガイダンス

前期（7月3日）、後期（10月23日）に各1回、就職ガイダンスを行った。日本企業への就職を希望する外国人留学生を対象に日本就職に関する心構えや就職に必要な日本語の習得方法、国際交流推進センターが実施している支援について説明した。



個別キャリアコンサルティング

令和3年度から引き続き日本での就職を希望する外国人留学生に対し個別キャリアコンサルティングを実施した。

『地域連携キャリア研修』での自己分析、業界・職種・企業研究、エントリーシートや履歴書の書き方、面接での自己表現の仕方の講義を受け、個別コンサルティングでキャリアコンサルタントから自己分析、自己表現のアドバイスを受ける。

この個別キャリアコンサルティングは、プログラム参加者以外も利用可としており英語でも対応している。

この支援が外国人留学生間で浸透してきており、利用者は増加傾向にある。そのため、令和6年度では、実施日程を3日間増やすなどして対応した。継続的にアドバイスを受けることで希望する企業の内定を獲得する学生も出ており、今後はそのような模範学生の活用例を共有していく予定である。

相談実績

前 期		
回	実施日	相談人数
第1回	令和6年5月15日	4
第2回	令和6年5月29日	5
第3回	令和6年6月12日	5
第4回	令和6年6月26日	4
第5回	令和6年7月10日	5
第6回	令和6年7月24日	4
第7回	令和6年8月7日	4

後 期		
回	実施日	相談人数
第1回	令和6年10月23日	5
第2回	令和6年11月6日	4
第3回	令和6年11月20日	3
第4回	令和6年12月4日	5
第5回	令和6年12月18日	5
第6回	令和7年1月15日	4
第7回	令和7年1月29日	5
第8回	令和7年2月19日	3
第9回	令和7年3月5日	4



就活・就労日本語講座

令和5年度に新しい取組として、大学の日本語講義では提供されない就活や就労に必要な実践的な日本語を学ぶ講座を提供した。企業で活躍している元留学生のビジネスパーソンが講師となり、職場における適切な振る舞い方を含めた日本語の表現や日本企業文化について学習した。

(開催実績)

令和6年度			
回	実施日	参加人数	内容
第1回	令和6年7月17日	11	敬語・ビジネス表現
第2回	令和6年8月7日	6	電話・メール対応
第3回	令和6年11月20日	8	履歴書の書き方
第4回	令和6年12月11日	4	履歴書の書き方



マッチング支援

令和6年度も令和5年度から引き続き、佐賀県やジョブカフェ SAGA との連携の下、マッチング支援のイベントに注力し、以下のセミナー、交流会を実施した。また、各イベント実施後には参加企業及び参加留学生に対するアンケート調査を実施し、それぞれのニーズを把握の上、取組む方策を探った。

➤ 8月6日「OB/OGの訪問によるセミナー」

→講師：日本の企業で活躍する本学を卒業した外国人留学生2人

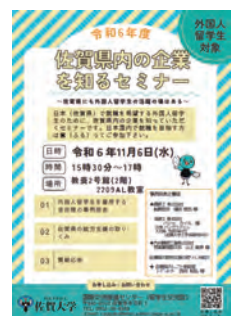
参加者：外国人留学生6人が参加



- 10月16日「はじめての外国人留学生採用セミナー・留学生と企業の気軽な交流会」
→佐賀県内企業16社、および外国人留学生38人が参加



- 令和6年11月6日「佐賀県内の企業を知るセミナー」
→外国人留学生18人が参加



- 12月4日「留学生と企業のジョブマッチング交流会」
→佐賀県内企業3社、および外国人留学生11人が参加



これらの取組みを受けてジョブマッチング交流会参加企業への外国人留学生の企業訪問をコーディネートした結果、9社に対し延べ7人が訪問を行った。

以上の取組により、外国人留学生の日本での就職活動への意欲の向上につながるとともに、佐賀県内の企業への関心の高まりと、県内企業への就職につながることが期待できる。

JLPT 受験料補助

日本での就職を実現するためには、相当の日本語コミュニケーション力が求められる。日本語学習に取り組み、JLPT 日本語能力試験を定期的に受験し、自身の到達度を確認していくことが必要である。そのため日本就職を目指す学生を対象に JLPT 受験料の補助を行った。

補助額：4,000円 補助人数：9人

VI. 国際交流ネットワーク

1. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動

佐賀大学では帰国留学生等を佐賀大学の友好特使として委嘱している。この友好特使を通じて海外の教育・研究情報、現地ネットワークに関する情報の収集や発信を行い、留学生との交流および国際学術交流の推進を図っている。

海外版ホームカミングデー in ハノイにて、本学で学んだベトナム人同窓会の発足式が行われ、会長のベトナム国家農業大学グエン・ドゥック・フイ教授、副会長のベトナム国家大学ハノイ校外国語大学講師ブイ・ディン・タン氏、秘書のベトナム国家大学ハノイ校外国語大学附属中学校校長グエン・フエン・チャン氏が登壇し、同窓会を通じ、ベトナムにおける佐賀大学関係者の連携を深めていきたい旨の挨拶がなされた。今後、佐賀大学海外同窓会ネットワーク（ベトナム元佐賀留学生会：SAV）の強化が期待されている。

資料1：友好特使管理簿

委託日	国名	名前	所属・職名（委嘱時）	備考
2013/9/20	中国	葛 堅	浙江大学 建築工程学院 教授	元佐賀大学教員
		石 堅忍	浙江工商大学 准教授	佐賀大学卒業生
		欧阳 金龙	四川大学 建築・環境学部 准教授	佐賀大学卒業生
		官 冬杰	重慶交通大学 教授	元佐賀大学非常勤研究員
		应 小宇	浙江大学城市学院 准教授	佐賀大学卒業生
		王 纯彬	浙江工商大学 准教授	佐賀大学卒業生
		祁 巍鋒	浙江大学 建築工程学院 講師	佐賀大学卒業生
2013/11/1	日本	副島 善文	日本たばこ香港取締役会長、香港佐賀県人会会長	香港中文大学プログラム
2014/1/15	スリランカ	Saliya de Silva	Senior Lecturer, Head of the Dept. of Agricultural Extension, Faculty of Agriculture, University of Peradeniya（現在：佐賀大学経済学部教授）	佐賀大学卒業生
2014/1/15	タイ	Chollada Luangpituksa	Associate Professor, Vice Dean, Faculty of Economics, Kasetsart University	研究交流・学生交流キーパーソン
2014/1/15	ニュージーランド	Ken Jackson	Research Professor, AIS St Helens; Research Associate and Former Director, Center for Development Studies, Auckland University	研究交流・学生交流キーパーソン
2014/5/30	日本	北村 隆則	香港中文大学 教授、元香港総領事	香港中文大学プログラム
2014/7/7	日本	江頭 利将	セイカン総合エンジニアリング 最高執行責任者（COO）、上海佐賀県人会幹事長	学生交流キーパーソン
2016/2/6	タイ	Panmanas Sirisomboon	Associate Professor, Department of Agricultural Engineering, Faculty of Engineering, King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang	佐賀大学卒業生
2017/2/11	ベトナム	Ngo Minh Thuy	ハノイ国家大学外国語大学 副学長	研究交流・学生交流キーパーソン
2017/12/9	中国	李 徳勝	北京工業大学 教授	佐賀大学卒業生
		宋 麗紅	天津科技大学 准教授	佐賀大学卒業生
2019/2/16	インドネシア	Susanto Somowiyarjo	ガジャマダ大学 教授	佐賀大学卒業生
		Indra Nugraha Abdullah	ヤマハ・ミュージカル・プロダクツ・アジア	佐賀大学卒業生
2019/12/14	マレーシア	Nazamid Saari	マレーシアブトラ大学	佐賀大学卒業生
		Muhammad Nizam bin Zakaria	トゥン・フセイン・オン大学	佐賀大学卒業生
2020/12/11	マレーシア	KHAIRUDDIN BIN MOHD JOHAN	田中電子工業株式会社	佐賀大学卒業生

2021/12/18	バングラデシュ	MUHAMMED ALAMGIR	クルナ工業技術大学 バングラデシュ大学助成委員会	佐賀大学卒業生
		NURUN NAHAR	ジャハンギールナガル大学 工学系研究科	佐賀大学卒業生
		MOHAMMAD ARIFUL ISLAM	クルナ工業技術大学	佐賀大学卒業生
2023/3/27	タイ	PAWINEE IAMTRAKUL	タマサート大学 准教授	佐賀大学卒業生
		SUEBSIT SARNTISART	Bank of Ayudhya Public Company Limited	佐賀大学元交換留学生
		PAKIN ANANBHAT	ZF CV Solutions (Thailand) Limited	佐賀大学卒業生
2024/9/28	中国	Ding Jian	上海交通大学 外国語学院 党委員会書記兼日本研究センター副センター長	佐賀大学卒業生
2024/9/29		Tang Xiaowu	浙江大学国際学院副院長 教授	佐賀大学卒業生
2024/9/30		Chen Xuedong	華中科技大学院士	佐賀大学卒業生
2024/12/15	ベトナム	NGUYEN DUC HUY	ベトナム国家農業大学	佐賀大学卒業生
2024/12/15		BUI DINH THANG	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学	佐賀大学卒業生

2. 海外ネットワークの構築と情報発信

佐賀大学では海外ネットワークの構築を目的として、本学を卒業した留学生・研究者の中からキーパーソンとなる人物を核とした海外同窓会を設置している。これまで6か国*において同窓会を設置しており、構築した海外ネットワークを強化し活性化するための一つの取り組みとして、佐賀大学海外版ホームカミングデーを毎年度実施している。これまで開催した「佐賀大学海外版ホームカミングデー」は以下のとおり。

*中国（2017年設置）、ベトナム（2017年設置）、インドネシア（2019年設置）、マレーシア（2019年設置）、バングラデシュ（2021年設置）、タイ（2023年設置）

海外版ホームカミングデー開催実績（令和6年度末現在）

	開催日	開催国	都市名
第1回	平成24年3月5日	ベトナム	ハノイ
第2回	平成24年9月10日	中国	杭州
第3回	平成25年8月22日	韓国	ソウル
第4回	平成27年3月10日	スリランカ	キャンディー
第5回	平成27年9月16日	インドネシア	ジョグ・ジャカルタ
第6回	平成28年2月6日	タイ	バンコク
第7回	平成29年2月11日	ベトナム	ハノイ
第8回	平成29年12月9日	中国	北京
第9回	平成31年2月16日	インドネシア	ジャカルタ
第10回	令和元年12月14日	マレーシア	クアラルンプール
第11回	令和3年3月20日	中国・インドネシア・マレーシア・ベトナム（オンライン）	—
第12回	令和3年12月18日	バングラデシュ（オンライン）	—
第13回	令和4年3月26日	バングラデシュ・中国・インドネシア・マレーシア・タイ・ベトナム（海外同窓会ネットワークイベント・オンライン）	—
第14回	令和5年12月17日	タイ	バンコク
第15回	令和6年12月15日	ベトナム	ハノイ

VII. 広報活動

1. 本学ホームページにおける日本語・英語によるタイムリーな情報発信

令和6年度は、国際交流推進センターより、海外版ホームカミングデーの開催や、海外からの表敬に関するプレスリリースの発信を19件行った。記事は大学内外・国内外への広報を意識するため、日本語での発信と併せて、英語でのタイムリーな情報発信に注力した。

また、佐賀大学国際交流推進センター HP の TOPIC 記事についても、英語での情報発信に取り組み、海外からの迅速な情報へのアクセス向上に寄与することができた。

(佐賀大学プレスリリース／日本語での発信)

韓国・安東大学のChung Tai Joo学長が児玉浩明学長を表敬訪問

佐賀大学 SAGA UNIVERSITY
〒840-8502 佐賀市本町1
Tel: 0952-28-8153 Fax: 0952-28-8921

PRESS RELEASE

2025年2月3日、韓国・安東大学のChung Tai Joo学長一行6名が本学の児玉浩明学長を表敬訪問し、山下宗利理事（教育・学生担当）や三島伸祐副学長（国際担当）が同席しました。

表敬訪問では、児玉学長一行を温かく迎え、歓迎の挨拶が述べられるとともに、安東大学から毎年優秀な留学生を本学へ送り出していることへの感謝の意が述べられました。またChung Tai Joo学長から当大学が東北国立大学と統合し、韓国教育部による「グローバル大学」事業に指定されたことなどの紹介や、本年に予定している学術交流協定の更新によって、今後両大学との関係が深められていくことが述べられ、今後の学生交流の促進に向けて意見交換が行われました。

本訪問の最後において、児玉学長から佐賀県の陶器を記念品として贈呈し、記念撮影が行われました。その後、今年の3月に当大学への留学を予定している本学の学生から訪韓な韓国語で挨拶と留学に向けた教養が述べられ、本表敬訪問は終極的に行われました。

当大学とは、1997年に学術交流協定を締結して以来、特に学生交流を中心に活発な交流が行われており、本訪問を機に、安東大学との交流がより一層発展することが期待されます。



Chung Tai Joo学長（左）と児玉学長（右）

(佐賀大学プレスリリース／英語での発信)

On February 3, 2025, President Chung Tai Joo of Andong National University in South Korea and a delegation of six paid a courtesy visit to Saga University President KODAMA Hiroaki, who was accompanied by Director YAMASHITA Munetoshi (Education & Student Affairs), Vice-President and Vice President MISHIMA Nobuo, Director of the Center for International Exchange. During the courtesy visit, President KODAMA warmly welcomed the delegation and gave them a welcoming speech, expressing his gratitude for sending excellent international students from Andong National University to Saga University every year. President Chung also introduced the university's merger with Gyeongju Provincial University and its designation as "Global University project" by the Ministry of Education of the Republic of Korea, and expressed his desire to continue to deepen the relationship with Saga University through the renewal of the academic exchange agreement scheduled for this year. After that, they exchanged opinions on how to promote student exchange in the future.

At the end of the visit, President KODAMA presented an Arita-yaki ceramic box from Saga Prefecture as a commemorative gift, and a commemorative photo was taken. Afterwards, a student who plans to study abroad at Andong National University in March of this year gave a speech in fluent Korean and expressed his aspirations for his study abroad.

Since the signing of an academic exchange agreement in 1997, there has been active exchange, especially in terms of student exchange. It is hoped that this visit will be an opportunity to further develop exchange with Andong National University. This program is designed to lead regional development in conjunction with the regional development strategies of local governments, to drive the growth of other universities in the region, and to support their growth into world-class universities in specialized fields.

VII. 住環境整備等

1. 佐賀大学国際交流会館

1) 国際交流会館の入居率

令和6年度の入居率は以下のとおりで、概ね充足していると言える。

	区分	居室数	寄宿料 (共益費含む) (円) [A]	令和2年度 入居率(%)	令和3年度 入居率(%)	令和4年度 入居率(%)	令和5年度 入居率(%)	令和6年度 入居率(%)	入居率平均(%) (除:令和2・3年度) [H] = ([E]+[F]+[G])/3
留学生用	単身	40	11,000	46.2	17.70	78.3	89.8	90.0	91.14
	夫婦	3	15,100	0	0	83.3	83.3	66.7	67.71
	家族	4	18,000	62.5	37.5	85.4	97.9	62.5	78.40
	家族 (旧:西宿舎)	19	16,200	78.9	62.5	66.7	68.8	81.6	87.02
合計①									
研究者用	単身	2	17,800	27.8	0	37.5	41.7	54.2	58.13
	夫婦	2	26,700	37.5	0	33.3	37.5	33.3	58.34
	家族	3	36,000	71.7	104.16	41.7	25.0	50.0	55.04
合計②									

2) 入居者の利便性向上の取組み

国際交流会館管理棟ラウンジの利用率向上に向けて、アクティブ・ラーニングに対応できる可動式の机・椅子の導入を行った。これにより、日々のコミュニケーションから様々なイベントにも対応できる環境が整ったことで、会館居住者だけでなくその他学生も含めた利用者数の増加を見込んでいる。

3) 国際交流会館入居者の安全確保の取組み

国際交流会館入居者の安全確保のため、令和6年12月18日にC棟において消防訓練を実施し、留学生とその家族、留学生チューター、関係者等30人以上が参加した。火災発生想定場所による避難動線を踏まえた避難訓練を実施した。

参加者のほとんどが消防訓練自体が初体験であったようで、緊張した雰囲気の中で訓練が実施された。

2. その他の住環境支援

上記会館の入居者以外の留学生は、大学周辺の民間アパート等に入居することとなる。このうち、交換留学生、日本語・日本文化研修生やJICA研修生等の留学生に対しては、アパート等の物件情報の提供を行っている。

また、その他の支援として、留学生が貸主とアパート賃貸借契約を締結する際、貸主が了承する場合には、(公財)日本国際教育支援協会が実施している「留学生住宅総合補償」(以下、保険)への加入を条件に、国際交流推進センター長名で連帯保証人となる機関補償制度を平成12年度から実施している。

資料1：国際交流推進センター（組織図・役割・教職員）

佐賀大学国際交流推進センター

HP <https://www.irdc.saga-u.ac.jp/ja/>

○平成23年9月28日、全学の国際交流事業を統括し、本学の国際化推進の牽引役及び対外的な窓口となる重要な組織として設置

* 国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター規則 第2条

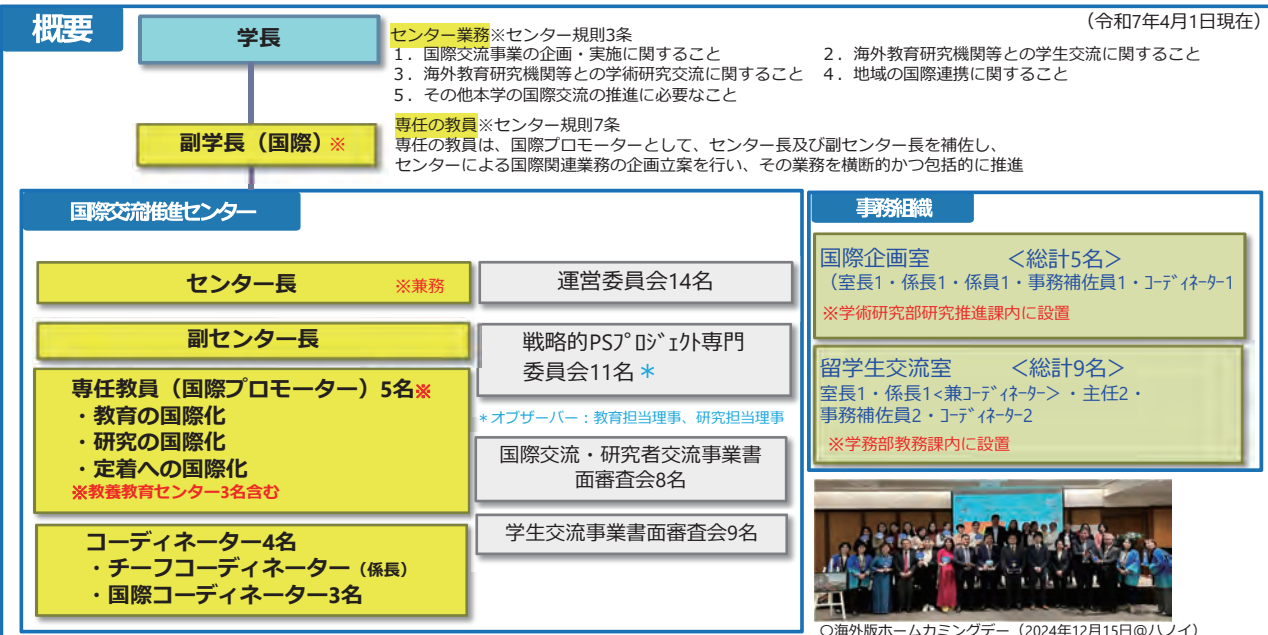
○センターは、本学の部局及び地域社会と連携し一体となって、海外の教育研究機関との国際交流並びに外国人留学生及び海外留学を希望する学生に必要な教育への支援を行うことを目的とした組織

○令和4年1月、国際交流推進センター「国際行動指針」、ロードマップ策定

○令和5年4月、佐賀大学国際交流推進センター将来構想策定

○令和7年3月、佐賀大学の国際戦略とその将来展望（対外周知）

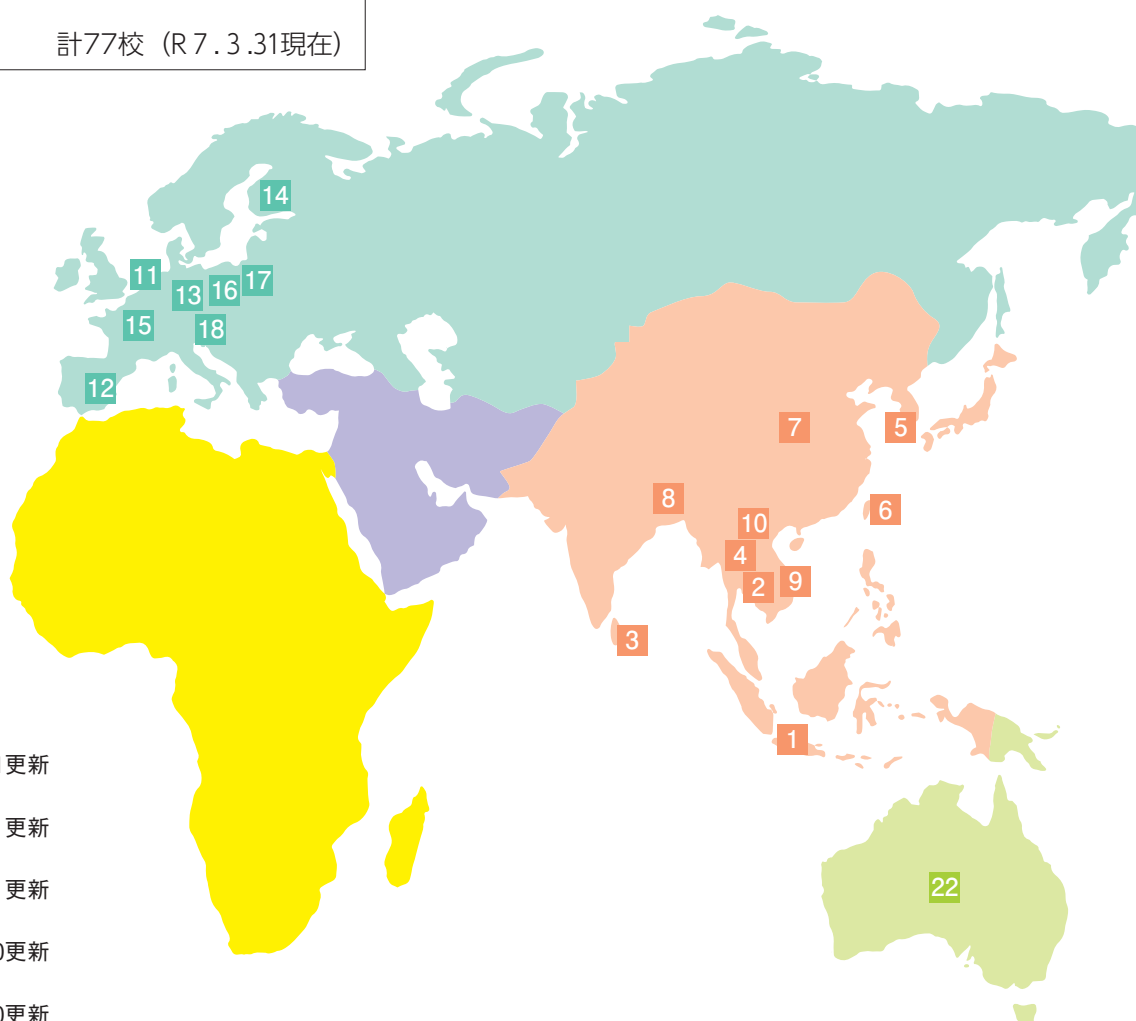
概要



資料 2

大学間学術交流協定校

計77校 (R7.3.31現在)



1 インドネシア共和国 (12)

- ハサヌディン大学
平13. 3. 9 令2. 11. 11更新
- ガジャマダ大学
平13. 11. 1 令3. 1. 8更新
- サムラツランギ大学
平14. 9. 13 令3. 11. 9更新
- リアウイスラム大学
平15. 7. 2 令2. 11. 20更新
- スリビジャヤ大学
平19. 6. 11 令2. 11. 30更新
- ダルマプルサダ大学
平21. 9. 4 令3. 7. 27更新
- セベラスマレット大学
平23. 3. 28 令2. 12. 30更新
- ジュアングダ大学
平23. 7. 15 令2. 9. 30更新
- マラン国立大学
平23. 12. 7 令2. 12. 16更新
- ボゴール農業大学
平23. 12. 27 令2. 11. 13更新
- ブラウィジャヤ大学
平26. 4. 14 令2. 9. 30更新
- スラバヤ工科大学
令元. 5. 21 令6. 5. 31更新

2 カンボジア王国 (2)

- プノンペン王立法経大学
平19. 8. 24 令2. 11. 17更新
- 王立プノンペン大学
平24. 11. 30 令3. 11. 11更新

3 スリランカ民主社会主義共和国 (1)

- ペラデニヤ大学
平11. 11. 30 令2. 10. 30更新

4 タイ王国 (5)

- カセサート大学
平8. 12. 6 令2. 12. 28更新
- コンケン大学
平10. 9. 28 令5. 11. 16更新
- チェンマイ大学
平17. 9. 9 令2. 11. 3更新

- モンクット王ラカバン工科大学
平20. 1. 3 令2. 11. 16更新
- タマサート大学
平25. 2. 13 令2. 11. 18更新

5 大韓民国 (10)

- 全南大学校
平3. 3. 8 令2. 9. 30更新
- 安東大学校
平9. 12. 11 令2. 11. 3更新
- 国民大学校
平11. 3. 29 令2. 11. 17更新
- 釜山大学校
平12. 2. 2 令2. 9. 30更新
- 釜慶大学校
平14. 4. 18 令2. 9. 30更新
- 済州大学校
平14. 8. 9 令2. 11. 13更新
- 韓国技術教育大学
平14. 10. 8 令2. 9. 30更新
- 培材大学校
平18. 7. 11 令2. 9. 30更新
- 牧園大学校
平19. 5. 16 令2. 11. 17更新
- 大邱大学校
平19. 6. 26 令2. 12. 28更新

6 台湾 (8)

- 輔仁カトリック大学
平13. 8. 9 令2. 11. 5更新
- 国立政治大学
平16. 9. 13
- 国立中興大学
平16. 9. 14 令2. 11. 9更新
- 国立台北大学
平17. 10. 6 令2. 11. 11更新
- 国立東華大学
平18. 6. 30 令2. 11. 4更新
- 元培医事科技大学
平19. 7. 6 令2. 9. 30更新
- 文藻外語大学
平21. 9. 4 令2. 10. 30更新
- 国立勤益科技大学
令元. 6. 28 令6. 5. 13更新

7 中華人民共和国 (13)

- 華東師範大学
平10. 5. 15 令2. 11. 16更新
- 北京工業大学
平10. 12. 8 令2. 11. 11更新
- 首都師範大学
平11. 4. 12 令2. 11. 11更新



- 中国農業大学
平12. 10. 17 令5. 11. 2更新
- 遼寧師範大学
平13. 11. 6 令2. 11. 2更新
- ハルビン工業大学
平13. 11. 12 令2. 11. 6更新
- 華東理工大学
平15. 4. 1 令3. 11. 26更新
- 浙江理工大学
平16. 9. 6 令2. 12. 14更新
- 西南政法大学
平19. 10. 31 令2. 11. 23更新
- 浙江科技学院
平19. 12. 25 令4. 3. 31更新
- 遼寧大学
平20. 4. 30 令2. 9. 30更新
- 温州大学
平30. 5. 28 令5. 5. 14更新
- 貴州民族大学
令4. 12. 19
- 8 バングラデシュ人民共和国(4)
● バングラデシュ工科大学
平13. 4. 27 令2. 10. 30更新
- ジャハンギルナガル大学
平22. 7. 26

- チッタゴン工科大学
平22. 9. 30 令3. 11. 4更新
- ダッカ工科大学
平25. 2. 20 令3. 11. 11更新
- 9 ベトナム社会主義共和国(5)
● ベトナム国家農業大学
平12. 12. 7 令2. 12. 4更新
- ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学
平19. 8. 6 令2. 11. 10更新
- アンザン大学
平25. 3. 11 令2. 11. 6更新
- カントー大学
平28. 8. 21 令3. 8. 10更新
- ベトナム国家大学ハノイ校経済大学
令元. 9. 24 令6. 9. 23更新
- 10 ラオス人民民主共和国(1)
● ラオス国立大学
平22. 1. 26
- 11 オランダ王国(1)
● デザインアカデミーアイントホーフェン
平28. 10. 19 令3. 10. 15更新
- 12 スペイン王国(1)
● アルメリア大学
令4. 8. 26

13 ドイツ連邦共和国(1)

- ブルク・ギービヒェンシュタイン
芸術デザイン大学ハレ
平29. 3. 30 令4. 3. 25更新

14 フィンランド共和国(1)

- ユバスキュラ大学
平25. 11. 8 令2. 12. 10更新

15 フランス共和国(3)

- ブルゴーニュ大学
平15. 7. 1 令5. 7. 19更新
- オルレアン大学
平17. 3. 31 令2. 6. 16更新
- リール大学
令6. 6. 6

16 ポーランド共和国(1)

- ルブリン工科大学
平18. 3. 3 令2. 9. 30更新

17 リトアニア共和国(1)

- ヴィタウタスマグヌス大学
平25. 8. 26 令2. 11. 26更新

18 オーストリア共和国(1)

- ウィーン工科大学
令6. 9. 18

19 アメリカ合衆国(2)

- パシフィック大学
平20. 2. 29 令2. 11. 12更新
- スリップリーロック大学
平24. 4. 4 令4. 9. 14更新

20 カナダ(1)

- ウィルフリッド・ロリエ大学
平22. 7. 13 令5. 6. 7更新

21 バハマ国(1)

- バハマ大学
令5. 9. 26

22 オーストラリア連邦(2)

- ラトロブ大学
平15. 7. 31 令5. 4. 17更新
- シドニー工科大学
平24. 8. 28 令4. 8. 3更新

資料 3：令和 6 年度 留学生数

国・地域 Country・Area	学部等 Faculties	合計 Total	学部 Undergraduates												学部計 Total				
			教育学部 Education		芸術地域 デザイン学部 Art and Regional Design		経済学部 Economics		医学部 Medicine		理工学部 Science and Engineering		農学部 Agriculture			地域デザイン研究科 Regional Design		医学系研究科 Medicine	
			国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense		国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense
計 Total		200	0		5		6		0		7		1		19	18		0	
			0	0	3	2	0	6	0	0	0	7	1	0		1	17	0	0
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal	2														0				
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	28														0				
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka	7														0	1			
ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myanmar	3														0				
タイ王国 Kingdom of Thailand	6														0				
マレーシア Malaysia	11				1		3				5				9				
インドネシア共和国 Republic of Indonesia	29			1							1				2				
大韓民国 Republic of Korea	14				1		2								3		1		
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam	8														0		1		
中華人民共和国 People's Republic of China	50						1				1				2		14		
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia	3														0	1			
台湾 Taiwan	6														0				
ケニア共和国 Republic of Kenya	1														0				
ナイジェリア連邦共和国 Federal Republic of Nigeria	4														0				
エチオピア連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Ethiopia	1														0				
ジンバブエ共和国 Republic of Zimbabwe	1												1		1				
ベナン共和国 Republic of Benin	1														0				
ナミビア共和国 Republic of Namibia	1														0				
ニジェール共和国 Republic of Niger	1														0				
モザンビーク共和国 Republic of Mozambique	2														0				
ブルンジ共和国 Republic of Burundi	1														0				
アンゴラ共和国 Republic of Angola	1														0				
サントメ・プリンシペ民主共和国 Democratic Republic of Sao Tome and Principe	1														0				
オーストラリア Australia	1														0				
カナダ Canada	1														0				
アメリカ合衆国 United States of America	3														0				
メキシコ合衆国 United Mexican States	1			1											1				
エクアドル共和国 Republic of Ecuador	1			1											1				
フィンランド共和国 Republic of Finland	1														0				
英国 United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland	1														0				
ルクセンブルク大公国 Grand Duchy of Luxembourg	1														0				
ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany	1														0				
フランス共和国 French Republic	2														0				
スペイン王国 Kingdom of Spain	2														0				
ポーランド共和国 Republic of Poland	1														0				
リトアニア共和国 Republic of Lithuania	1														0				
コソボ共和国 Republic of Kosovo	1														0				

(令和6年5.1現在) As of May 1, 2024

大学院 Graduate Schools														大学院計 Total	研究生 科目等履修生 特別聴講学生 Research・ Part-Time Students・ Special Audit	鹿児島大学 大学院連合 農学研究科 United Graduate School of Agricultural Kagoshima University	日本語・ 日本文化 研修生 Japanese Studies Students	その他 計 Total	国費・私費 計 Total			
修士課程（博士前期） Master's Course								博士課程 Doctoral Course		博士後期 Doctoral Course		博士後期 Doctoral Course			国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense		私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	
先進健康科学研究科 Advanced Health Sciences		理工学研究科 Science and Engineering		工学系研究科 Science and Engineering		農学研究科 Agriculture		医学系研究科 Medicine		理工学研究科 Science and Engineering		工学系研究科 Science and Engineering										
国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense		国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense		国費 National Expense	私費 Private Expense	
6		31		0		12		4		41		1		113	52		15		1	68	62	138
4	2	9	22	0	0	3	9	0	4	26	15	0	1		2	50	12	3				
										1	1			2					0	1	1	
2		2	8				1			12	1			26			2		2	18	10	
1						2								4		3			3	6	1	
			1							1				2		1			1	2	1	
		1								1	1			3	1	2			3	5	1	
											2			2					0	0	11	
1		5				1				8	5		1	21		5		1	6	17	12	
	1													2		9			9	0	14	
										1				2		2	3	1	6	4	4	
	1		4				6		4		3			32		14		2	16	0	50	
														1		2			2	1	2	
														0		6			6	0	6	
			1											1					0	0	1	
			3				1							4					0	0	4	
														0			1		1	1	0	
														0					0	1	0	
										1				1					0	1	0	
											1			1					0	0	1	
			1											1					0	0	1	
			1				1							2					0	0	2	
			1											1					0	0	1	
			1											1					0	0	1	
											1			1					0	0	1	
														0		1			1	0	1	
			1											1					0	1	0	
														0	1				1	1	0	
														0		1			1	0	1	
														0		2			2	0	2	
														0		2			2	0	2	
														0		1			1	0	1	
			1											1					0	0	1	
														0	1				1	1	0	
														0		1			1	0	1	
														0		2			2	0	2	
														0		2			2	0	2	
														0		1			1	0	1	
										1				1					0	1	0	

資料 4：佐賀大学学術交流協定取扱要項

(平成31年 1 月22日制定)

(趣旨)

第1 この要項は、佐賀大学（以下「本学」という。）における学術交流協定（以下「協定」という。）の締結に関し必要な事項を定めるものとする。

(協定締結の目的)

第2 協定は、外国の優れた大学、研究所等（以下「大学等」という。）との交流を推進することにより、本学の研究及び教育の活性化を図ることを目的として締結する。

(協定の区分)

第3 協定は、大学間協定と部局間協定に区分する。

2 「大学間協定」とは、本学が外国の大学等と大学間交流を実施するため、相互の学長名により締結する協定をいう。

3 「部局間協定」とは、本学の部局が外国の大学等、又は関係する部局等と学術交流を実施するため、相互の部局長名により締結する協定をいう。

(協定の締結要件)

第4 大学間協定は、次の各号のいずれかに該当し、及び学長が必要と認めたときに締結することができる。

(1) 複数の部局で同一の大学等との交流実績があり、それぞれ同時に協定を締結しようとするとき。

(2) 既に一部局で交流実績があり、他の部局も交流しようとするとき。

(3) 既に交流実績のある部局又は部局間交流協定を締結している部局において、当該部局及び相手大学等の双方が、大学間協定を締結することを希望している場合で、かつ、相手大学等から要請があるとき。

(4) その他本学の国際交流戦略上、大学間協定を締結することが必要なとき。

2 部局間協定は、部局単位で既に交流が実施されている場合又は協定締結後の交流計画が具体化している場合で、かつ、部局長が必要と判断したときに締結することができる。

(協定書及び附属文書)

第5 第2に規定する協定締結の証として、協定書を作成するものとする。

2 前項の協定書には、協定による交流の大綱、具体的な交流の実施方法等を規定するものとする。

3 前項の規定にかかわらず、協定の具体的な交流の実施方法等については、協定書に代えて附属文書を作成し、規定することができる。

4 協定書及び附属文書（以下「協定書等」という。）は、原則として英語で作成するものとする。ただし、双方の合意がある場合は、双方の母国語で作成することができる。

(協定の有効期限)

第6 協定を締結又は更新しようとする場合は、協定書等に有効期限を規定するものとし、その期間は5年以内とする。

(協定書等の署名者及び発効日)

第7 大学間協定の署名者は、学長とする。ただし、附属文書の署名者は、国際担当の副学長（以下「副学長」という。）とすることができる。

2 部局間協定の署名者は、部局長とする。ただし、学長又は副学長の連署を必要とする場合は、第8第2項に定める事前相談の際に、理由書を添付し、申し出るものとする。

3 協定書等の発効日は、双方の署名が完了した日とする。

(協定締結手続き)

第8 大学間協定を締結する場合は、協定締結を希望する部局の長から次に掲げる書類を添えて学長に申請するものとする。

- (1) 大学間学術交流協定締結申請書 (別紙様式第1号又は別紙様式第2号)
- (2) 協定書等の原案
- (3) 協定を締結する大学等の概要 (協定更新時は不要)

2 前項に規定する場合において、協定締結を希望する部局の長は、事前に国際交流推進センター長に相談するものとし、国際交流推進センター長は、協定締結の意義等を確認するとともに、協定書原案について書類確認を行うものとする。

3 学長は、大学間協定の締結を承認した場合は、第1項に規定する部局の長に対し、書面で通知するものとする。

第9 部局間協定の締結は、次に掲げる書類により、当該部局において行うものとする。

- (1) 部局間学術交流協定締結調書 (別紙様式第3号)
- (2) 協定書等原案
- (3) 協定を締結する大学等の概要

2 第8第2項の規定は、部局間協定を締結する場合において準用する。

3 部局長は、部局間協定を締結した場合は、当該協定書等の写しを添えて速やかに学長に報告しなければならない。
(更新、内容変更及び終結)

第10 大学間協定又は部局間協定を更新又は内容を変更しようとする場合の手続きは、締結手続きに準ずるものとする。

2 大学間協定又は部局間協定を終結した場合は、終結届を学長に提出する。(別紙様式第4号)

3 大学間協定を締結した場合は、特段の事情がある場合を除き、当該大学間協定を締結した大学等と現に締結している部局間協定は終結するものとする。

(協定書等の保管)

第11 協定書等の保管部局は、次の各号に掲げる区分に従い、当該各号に掲げるとおりとする。

- (1) 大学間協定 国際交流推進センター
- (2) 部局間協定 当該部局の担当事務部

(事務)

第12 協定に関する事務は、関係部局等の協力を得て、学術研究部研究推進課が行う。

(雑則)

第13 この要項に定めるもののほか、協定に関し必要な事項については、国際交流推進センター運営委員会の議を経て、国際交流推進センター長が定める。

附 則

この要項は、平成31年1月22日から実施する。

附 則 (令和元年10月2日改正)

この要項は、令和元年10月2日から実施し、令和元年10月1日から適用する。

附 則 (令和4年3月30日改正)

この要項は、令和4年4月1日から実施する。

附 則 (令和7年3月27日改正)

この規則は、令和7年4月1日から施行する。

附 則 (令和7年7月31日改正)

この要項は、令和7年8月1日から実施する。

資料５：国際交流推進センター関連行事

	佐賀大学生の派遣・教育・支援関係	外国人留学生の教育・支援関係	国際交流推進事業等	運営委員会
令和6年 4月	・留学フェア2024 (4/24)			・第1回国際交流推進センター運営委員会 (4/25) ・第2回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (5/13)
5月	・SUSAP2024Summer 説明会 (5/7, 8, 9)	・国際交流イベント「さがん春のビクニック」(5/11)	・チェンマイ市副市長、チェンマイ大学 (タイ) 理事 (5/30) ・新中国駐福岡総領事学長表敬 (5/24) ・米国領事館 佐賀大学訪問 (5/31)	・第3回国際交流推進センター運営委員会 (5/13) ・第4回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (5/29)
6月	・交換留学説明会 (6/5)	・国際交流イベント「カラオケナイト」(6/7) ・国際交流イベント「さがん田舎体験」(6/16) ・国際交流会館 (10月期) 入居募集 (6/27～7/21)	・国立台湾勤益科技大学、国立台湾中興大学表敬訪問 (6/24)	・第5回国際交流推進センター運営委員会 (6/27)
7月	・海外留学危機管理講習 (7/6) ・第一回国際的に活躍する先輩から学ぶ講演会 (7/10) ・令和6年度第一回交換留学成果報告会 (7/11) ・派遣交換留学生壮行会 (7/16) ・留学相談会 (7/17)	・日本での就職希望者に対するガイダンス (7/3) ・国際交流週間「インターナショナルウィーク」(7/8～12) ・第一回就活・就労日本語講座 (7/17)		・第6回国際交流推進センター運営委員会 (Web 会議) (7/4) ・第7回国際交流推進センター運営委員会 (7/25)
8月	・SUSAP2024Summer 実施 (韓国8/6～24、オーストラリア8/20～9/28、インドネシア9/7～9/24)	・交換留学生終了式 (8/6) ・フェアウェルパーティー2024夏 (8/6) ・OB/OGの訪問によるセミナー (8/6) ・第二回就活・就労日本語講座 (8/7) ・佐賀城築の国祭り総踊り参加 (8/25)	・JASSO 留学支援制度申請勉強会 (8/30)	・第8回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (8/22)
9月		・新入留学生オリエンテーション (9/26) ・ウェルカムパーティー2024秋 (9/26)	・上海交通大学、浙江大学、華中科技大学訪問 (9/28～9/30)	・第9回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (9/12) ・第10回国際交流推進センター運営委員会 (9/26)
10月	・TOEFL ITP スキルアップセミナー (10/23) ・SUSAP2025Spring 説明会 (10/8, 9, 10)	・第Ⅳ期佐賀大学外国人留学生地元就職促進事業開始 (10/3) ・国際交流イベント「秋の収穫フェス」(10/15) ・留学生と企業の気軽な交流会 (10/16) ・留学生のための就職活動セミナー (10/17) ・日本での就職希望者に対するガイダンス (10/23) ・国際交流イベント「ハロウィンパーティー」(10/31)	・WAFI 国際会議出席 (10/9) ・アルメリア大学訪問 (10/9) ・サムラツランギ大学表敬訪問 (10/10)	・第11回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (10/9) ・第12回国際交流推進センター運営委員会 (10/24)
11月	・令和6年度第二回交換留学成果報告会	・佐賀県内の企業を知るセミナー (11/6) ・インドネシア・スラバヤ工科大学短期受入プログラム (11/18～21) ・国際交流イベント「手話イベント：サインゲームショー」(11/28)	・アクティブラーニング& TED スタイル FD・SD 研修 (11/1)	・第13回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (11/15) ・第14回国際交流推進センター運営委員会 (11/28)
12月	・第二回国際的に活躍する先輩から学ぶ講演会 (12/4) ・トビタテ！留学 JAPAN 説明会 (12/6) ・交換留学説明会 (12/11)	・留学生と企業のジョブマッチング交流会 (12/4) ・国際交流イベント「カルチュラルナイト2024」(12/20)	・戦略的 PS 中間報告会 (12/4) ・海外版ホームカミングデー @ベトナム (12/15) ・スリランカ教育省大学助成委員長 学長表敬 (12/26)	・第15回国際交流推進センター運営委員会 (12/5) ・第16回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (12/24)
令和7年 1月	・海外留学危機管理講習 (1/8) ・派遣交換留学派遣壮行会 (1/30)	・国際交流イベント「折り紙ワークショップ」(1/15) ・国際交流会館 (4月期) 入居募集 (1/17～2/2) ・国際交流イベント「ムービーナイト」(1/30) ・国際交流イベント「節分イベント」(1/31)		・第17回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (1/14) ・第18回国際交流推進センター運営委員会 (1/30)
2月	・SUSAP2025Spring 実施 (スペイン2/14～3/3、台湾2/17～3/23、アメリカ2/19～3/17)	・交換留学生終了式 (2/17) ・フェアウェルパーティー2025春 (2/17)	・安東大学校表敬訪問 (2/3)	・第19回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (2/5) ・第20回国際交流推進センター運営委員会 (メール会議) (2/17) ・第21回国際交流推進センター運営委員会 (2/27)
3月		・新入留学生オリエンテーション (3/31) ・ウェルカムパーティー2025春 (3/31)	・戦略的 PS 最終報告会 (3/13) ・国際展示ルーム開所式、講演会 (3/27)	・第22回国際交流推進センター運営委員会 (Web 会議) (3/7) ・第23回国際交流推進センター運営委員会 (3/27)

資料 6：国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター規則

(平成23年 9 月28日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人佐賀大学基本規則（平成16年 4 月 1 日制定）第12条第 2 項の規定に基づき、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、佐賀大学（以下「本学」という。）における国際化推進施策及び戦略を企画立案するとともに、本学の部局及び地域社会と連携し一体となって、海外の教育研究機関との共同教育及び共同研究等の国際交流を推進し、外国人留学生及び海外留学を希望する本学学生に必要な教育への支援を行うことを目的とする。

2 前項に規定する「部局」とは、各学域、各学系、医療系、リージョナル・イノベーションセンター、アドミッションセンター、ウェルビーイング創造センター、教育開発推進センター、各学部、各研究科、教養教育センター、附属図書館、美術館、保健管理センター、共同利用・共同研究拠点及び各学内共同教育研究施設をいう。

(業務)

第3条 前条に掲げる目的を達成するため、センターは次に掲げる業務を行う。

- (1) 国際交流事業の企画・実施に関すること。
- (2) 海外教育研究機関等との学生交流に関すること。
- (3) 海外教育研究機関等との学術研究交流に関すること。
- (4) 地域の国際連携に関すること。
- (5) その他本学の国際交流の推進に必要なこと。

2 前項の業務に関し必要な事項は、別に定める。

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 専任の教員
- (4) 国際コーディネーターその他の必要な職員

(センター長)

第5条 センター長は、副学長のうち学長が指名した者をもって充てる。

2 センター長は、センターの業務をつかさどり、センターの職員を統督する。

3 センター長の任期は、当該副学長の任期とし、再任を妨げない。

(副センター長)

第6条 副センター長は、本法人の専任の教員のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

2 副センター長は、センター長を補佐し、センターの業務を掌理する。

3 副センター長の任期は、2 年とし、再任を妨げない。ただし、当該副センター長を指名したセンター長の任期を超えることができない。

4 副センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(専任の教員)

第7条 専任の教員は、国際プロモーターとして、センター長及び副センター長を補佐し、センターによる国際関連業務の企画立案を行い、その業務を横断的かつ包括的に推進する。

(国際コーディネーター)

第8条 国際コーディネーターは、業務に関する高度な専門性を持ち、第4条第1項各号の職員と協力し、センターの業務を処理する。

2 国際コーディネーターのうち、特に高度な専門性を持ち、コーディネーター業務の統括を行う者を、チーフコーディネーターと称する。

3 国際コーディネーターの選考は、次条に規定する運営委員会の議を経て、センター長が行う。

4 国際コーディネーターに関し必要な事項は、別に定める。

(運営委員会)

第9条 センターに、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 本法人の国際戦略に関する事項
- (2) 本法人の中期目標・中期計画のうち、国際交流の推進に関する事項
- (3) センターの管理運営の基本方針に関する事項
- (4) センターの専任教員の配置要望その他センターの人事に関する事項
- (5) 本法人の国際化に係る具体的施策の策定及び実施に関する事項
- (6) センターの予算及び決算に関する事項
- (7) その他センターの管理運営に関する重要事項

(組織)

第10条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 各学系から選出された教員 各1人
- (4) 学務部長
- (5) 学術研究部長
- (6) 専任の教員
- (7) チーフコーディネーター
- (8) その他センター長が必要と認める職員

2 前項第3号に掲げる委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 第1項第3号に掲げる委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第11条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。

(議事)

第12条 運営委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

ただし、教員の人事に関する事項及び特に重要な事項については、出席した委員の3分の2以上の賛成を必要

とする。

（意見の聴取）

第13条 運営委員会は、必要に応じて、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

（審査会）

第14条 運営委員会に、国際交流事業の選考を行うため、審査会を置く。

2 審査会に関し必要な事項は、別に定める。

（専門委員会）

第15条 運営委員会は、専門的事項を審議するため、必要に応じて専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会に関し必要な事項は、別に定める。

（事務）

第16条 センター及び運営委員会の事務は、各部局（第2条第2項に規定するものをいう。）及び事務局関係各課の協力を得て、外国人留学生及び海外留学を希望する学生に必要な教育並びに支援を行うことを目的とする業務に係るものは学務部教務課が行い、その他は学術研究部研究推進課が行う。

（雑則）

第17条 この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項については、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附 則

1 この規則は、平成23年10月1日から施行する。

2 国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置規則（平成16年5月18日制定）は、廃止する。

3 この規則施行後、最初に任命される第7条の副センター長及び第8条の鍋島サテライト長並びに第9条の室長及び部門長の任期は、第7条第3項、第8条第3項及び第9条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

4 この規則施行後、最初に任命される第12条の併任の教員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

5 この規則施行後、最初に任命される第15条第1項第6号から第10号までの委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則（平成24年3月28日改正）

1 この規則は、平成24年4月1日から施行する。

2 この規則施行後最初に選出される第15条第1項第8号の委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則（平成26年3月26日改正）

この規則は、平成26年4月1日から施行する。

附 則（平成27年3月26日改正）

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成28年3月25日改正）

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成29年3月22日改正）

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（平成30年3月28日改正）

この規則は、平成30年4月1日から施行する。

附 則（令和 2 年 4 月 21 日改正）
この規則は、令和 2 年 5 月 1 日から施行する。

附 則（令和 3 年 3 月 24 日改正）
この規則は、令和 3 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（令和 4 年 3 月 30 日改正）
この規則は、令和 4 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（令和 4 年 12 月 27 日改正）
この規則は、令和 4 年 12 月 27 日から施行する。

附 則（令和 6 年 3 月 29 日改正）
この規則は、令和 6 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（令和 7 年 1 月 24 日改正）
この規則は、令和 7 年 2 月 1 日から施行する。

附 則（令和 7 年 3 月 27 日改正）
この規則は、令和 7 年 4 月 1 日から施行する。

資料 7：令和 7 年度国際交流推進センター運営委員会名簿

(令和 7 年 7 月 1 日現在)

所属部局等		職 名	氏 名
国際交流推進センター	センター長	教授	三島 伸雄
	副センター長	教授	早川智津子
	国際コーディネーター	係長	山田佳奈美
	専任教員	准教授	古賀 弘毅
	専任教員	准教授	ヴァン・ドゥーセン・ブレンダン
	専任教員	准教授	金 美連
教育学系		教授	角縁 進
芸術学系		教授	有馬 隆文
経済学系		教授	中村 博和
医学系		特任教授	高橋 宏和
理工学系		教授	カーン・エムディ・タウヒドゥル・イスラム
農学系		准教授	藤田 大輔
学務部		部長	荒木 昌美
学術研究部		部長	溝口 寛士

資料 8：令和 7 年度戦略的パートナーシップ・プロジェクト・マネジメント専門委員会名簿 (令和 7 年 7 月 1 日現在)

所属部局等		職 名	氏 名
国際交流推進センター	センター長	教授	三島 伸雄
	副センター長	教授	早川智津子
教育学系		准教授	小松美和子
芸術学系		准教授	三木 悦子
経済学系		教授	Saliya De Silva
医学系		教授	寺本 憲功
理工学系		講師	三島悠一郎
農学系		准教授	古賀 豊司
学術研究部		部長	溝口 寛士
学務部		部長	荒木 昌美

国際行動指針（改訂版）

～「国際化指標の倍増」と「英語によるバックアップ体制の構築」を通じた
多様性が織り成す新たな価値創造の場 “SAGAN国際知的交流拠点”の実現～

2023年3月改定
佐賀大学 国際交流推進センター

国際行動指針（全体概要）

背景 (p3)

- DXや予測困難なVUCA時代の到来
- 学習指導要領の改訂による英語教育の変化
- ポストコロナ社会への対応
- ポスト留学生30万人計画・12万人派遣計画
- 「佐賀大学国際戦略構想（H23.1）」の策定から10年が経過

目的 (p4)

- 時代の変化に柔軟に対応しながら地域の国際化を推進
- 国際化を通じてブランド化を図り、選ばれる大学を志向
- コロナ禍で加速したICTを利活用した英語力の強化
- アジアにおける知的拠点として国際社会に貢献
- 10年後を見据えつつ第4期中期目標期間のビジョンと戦略の具体化・明確化

目指すべき姿 (p5)

○多様性が織り成す新たな価値創造の場「SAGAN国際知的交流拠点」の実現

基本目標 (p6)

○国際化指標の倍増

- (1) 日本人学生の海外派遣（戦略①）
- (2) 外国人留学生の受入れ（戦略②）
- (3) 国際共同研究の成果（戦略③・④）
- (4) 優秀留学生の国内就職（戦略⑤）
- (5) 外国人研究者の受入れ（戦略⑥）

○英語による バックアップ体制の構築 （戦略⑦）

具体的な戦略と行動計画

人材育成

- 【戦略①】日本人学生の国際人としての意識と実力を向上させる国際教育プログラムの強化（p7）
- 【戦略②】質の確保・向上を図る方向への転換により優秀な外国人留学生を戦略的に獲得（p10）

研究推進

- 【戦略③】国際化の先導となる学術分野及び重点プログラムの選択と質の向上支援（p12）
- 【戦略④】国際共同研究に対する意識底上げとスタートアップ研究支援（p14）

社会連携

- 【戦略⑤】企業や地域との連携による就職環境の改善（p16）

国際協働

- 【戦略⑥】受入れ及び派遣重点大学の設定とこれまでに輩出した海外研究者・教育者を介した外国人留学生・研究者の受入れ（p17）

体制整備

- 【戦略⑦】英語による教育・研究支援と広報の強化（p18）

留意事項

○本指針の実施に当たって（p20）
（新しい国際交流の在り方の検討、知的拠点として国際社会に貢献）

○本指針の柔軟な見直し（p21）
（モニタリングの実施、社会情勢の変化等を踏まえた機動的な対応）

○更なる進展に向けて（p22）
（クォーター制の導入等、中期的な検討課題の明示）

1. 背景

社会情勢の変化

- Society5.0時代に向けた動きやデジタル・トランスフォーメーション（DX）の潮流に加え、**予測困難なVUCA（※）時代が到来**（※Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性））
- 2018年3月、予測困難な時代に備え、未来社会を切り拓く資質・能力の一層確実な育成を目指し、学習指導要領が改訂され、**今後、新たな英語教育を受けた学生が本学へも入学**してくる状況
- 2018年度には、「日本再興戦略」や「第二期教育振興基本計画」における**日本人の海外派遣者数の倍増計画（大学等：6万人から12万人）も達成**し、2021年3月には「留学生30万人計画」骨子検証結果報告（以下、「検証結果報告」という）で目標を達成し、一定の成果が出ていると報告
- 2020年から流行した新型コロナウイルス感染症は、世界各地で人々の生命や生活、価値観や行動、経済や文化など社会全体に広範かつ多面的な影響を与えており、検証結果報告でも、**大学の技術流出防止対策の強化や新型コロナウイルス感染症の影響への対応**等、新たな状況変化や課題を報告

本学における国際化への対応

- 本学では、2011年1月に「佐賀大学国際戦略構想」（以下、「国際戦略」という）を策定、同年10月に佐賀大学国際交流推進センターを設置し、本センターが本学の国際化を推進してきた
- 国際戦略の策定から10年が経過する中、**本センターの人的資源不足等の組織・構造的な課題、本学の学生や研究者交流の課題などが顕在化**しており、これら課題を徹底的に省みることが必要！
- 本学の国際化に関する諸課題や本学を取り巻く学内外の状況の大きな変化、特に**新型コロナウイルス感染症の影響により、これまでの本学の国際交流の取組が大きく影響**を受けている状況等も踏まえ、今般、**新たに、国際交流推進センターの国際行動指針を策定した**

2. 目的

本指針のねらい

- 新型コロナウイルス感染症の影響によりニューノーマル時代が到来し、大きく変化している我が国と本学の国際化を取り巻く状況変化に柔軟に対応しつつ、**地域と共に未来に向けて発展し続ける大学**を目指し、**受入れ及び派遣の双方向の交流で地域の国際化**を推進
- 2018年以降は18歳人口の減少に伴い、大学進学率が上昇しても大学進学者数は減少局面に突入すると予測される中、本学の教育の質の維持・向上を図るため、海外から優秀な外国人留学生を積極的に受入れ、多様な人材を育成することで、**知的拠点として国際社会に貢献**
- 「**留学のための英語教育**」の充実を使命の一つとし、コロナ禍により一気に加速した**ICT推進体制を最大限に活用**して学生の英語力強化を行うとともに、**海外派遣日本人学生を増加**

本指針の位置づけ

- 国際化を通じて**本学が目指すべき姿と基本目標を明確化**し、**戦略的かつ組織的に取り組み**、具体的な行動計画をバックカスティングの発想で実行することで、「**大学のブランド化**」を図り、「**選ばれる大学**」となることを志向
- **今後10年（2030年）を見据え、当面、第4期中期目標期間（2022～2027年）**中に実施すべき具体的な戦略と行動計画を明確化した**今後の行動指針**であり、戦略的に取組を実施しつつ、**定期的に実施効果を検証し、適宜、指針の柔軟な見直し**を行い、**高い成果と質保証を実現**
- **国際交流推進センター**は、全学的な取組を中心に戦略を実施し、各部局が主体となって実施する戦略については、本センターが連携・サポートを行い、**大学全体の国際化の底上げと持続可能な大学の国際化を強く牽引**

3. 目指すべき姿

目指すべき姿

○ 多様性が織り成す新たな価値創造の場「SAGAN国際知的交流拠点」の実現

- ・ 18歳人口減少に対して、佐賀の地の利や特色を生かすことによる優秀な外国人留学生の積極的受入れ
- ・ 留学により多様な価値観、主体性及び柔軟性等を持つ学生を育成し、持続可能な社会(SDGs)に貢献
- ・ 「英語力強化」による佐賀大学の国際化の牽引／佐賀の競争力強化への貢献

内外の大きな環境変化の中、我が国が目指している2030年の姿は、Society5.0が実現される高い生活の質が享受される社会の中で、若い人の活力が生かされ、高齢者も社会に貢献し、イノベーションを創出しながら、グローバル競争の中においてダイナミックに成長している姿である。

翻って、本学が2030年に目指すべき姿は、「佐賀大学のこれから—ビジョン2030—」で示された3つの大学像。すなわち、18歳人口の減少をふまえた、様々な世代の学び手、佐賀の地の利や特色を生かすことにより、本学が受け入れた外国人留学生、また、留学により多様な価値観を得て、主体性と柔軟性等を持つ学生、そして、アジアをはじめとする世界中の外国人研究者等がキャンパスに集い、「英語力強化」による国際化の牽引により、「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより、新たな価値が創造される場」であり、「多様な価値観が集まるキャンパス」を持つ姿である。

このキャンパスは、換言すればアジアにおける知の基盤となる「SAGAN国際知的交流拠点」であり、この拠点を通じて多様な人材の協働により生み出される創造力と活力が生かされ、多様な人材が佐賀や我が国に定着し、佐賀の競争力強化への貢献や持続可能な社会（SDGs）に貢献している姿こそ、本学が目指すべき姿。ひいては、直面する地域や世界の課題を解決することのできる知識とその集約、その集約から協働で新たな価値を常に生み出していることこそが、「佐賀大学憲章」のもとで目指す「地域とともに未来に向けて維持・発展し続けている大学」である。

4. 基本目標

基本目標

○ 国際化指標の倍増

（1）日本人学生の海外派遣（戦略①）

- ・ 「若者の海外留学促進計画（H25.6.14閣議決定）」を踏まえて、留学のための英語力強化を推進し、日本人学生の海外派遣数を倍増【228人（2019年）→456人（2030年）】

（2）外国人留学生の受入れ（戦略②）

- ・ 「留学生30万人計画」を踏まえ、外国人留学生のための魅力ある受入れプログラム（本学の魅力発信、学生交流、住環境整備等）を拡充し、外国人留学生受入れ数を倍増【234人（2019年）→350人（2030年）】

（3）国際共同研究の成果（戦略③・④）

- ・ 国際化の先導となる学術分野及びプログラムの選択と重点支援を行い、国際研究集会への参加者数10%増に寄与するとともに、質の高い国際共同研究論文数を倍増【181件（2019年）→362件（2030年）】
- ・ 国際共同研究のスタートアップを支援し、国際共同研究数を倍増【149件（2019年）→298件（2030年）】

（4）優秀留学生の国内就職（戦略⑤）

- ・ 企業や地域との連携による国際化の実践プロジェクトを推進し、外国人留学生に対する日本語教育や企業インターンシップ等の強化を通じて、優秀な外国人留学生の国内就職（佐賀県重点）を倍増【7人（2019年）→14人（2030年）】

（5）外国人研究者の受入れ（戦略⑥）

- ・ 受入れ及び派遣重点大学の設定とこれまで輩出した海外研究者・教育者との関係を強化し、外国人研究者受入れ（JSPSへの応募支援等を含む）を倍増【149人（2019年）→298人（2030年）】

○ 英語によるバックアップ体制の構築（戦略⑦）

- ・ 上記5つの倍増目標に対する「英語によるバックアップ体制」を構築し、広報体制等を整備・強化

5. 具体的な戦略と行動計画 (1) 人材育成 (日本人学生) 戦略①

戦略①

日本人学生の国際人としての意識と実力を向上させる国際教育プログラムの強化
(日本人学生がグローバル化を認識するための取組と、留学希望者がその可能性を実現するための部局横断型の国際教育プログラムを整備し、中長期留学の増加を見据えた諸施策を実施)

現状・課題

- 学内国際イベントの参加者が少数・固定化
R3さがん国際フォーラム本学学生申込率 (p32参照)
第1回 0.64% (42人)
第2回 0.74% (49人)
- TOEICでは測ることが困難な留学に必要な英語能力の強化
- 海外志向でも、英語力や経済力の問題から留学をあきらめた事例が散見 (p32参照)
交換留学 (長期留学生数) の伸び悩み
34人 (2016年) → 26人 (2019年)



目標

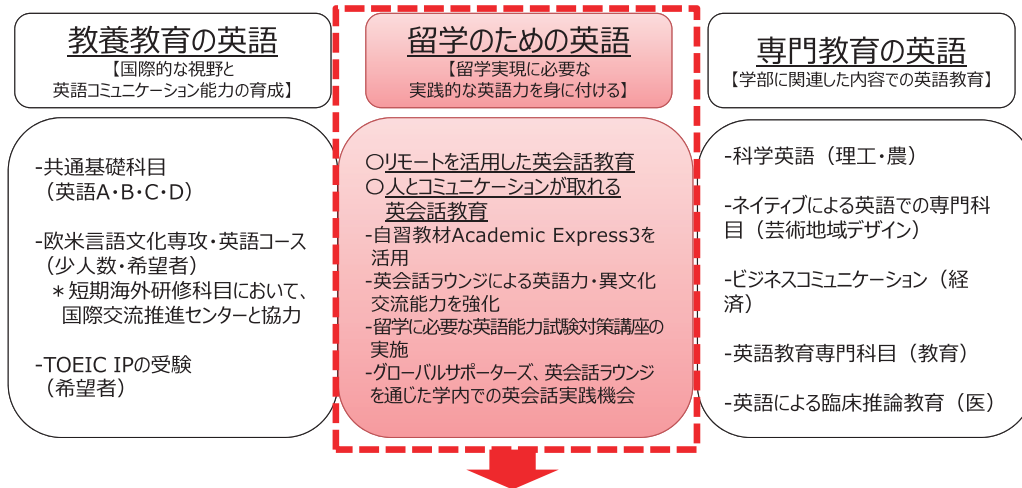
- 国際人としての意識の向上
- 外国人と円滑に交流可能なレベルの英語力
- 国際人として必要な異文化交流能力の獲得
- TOEFL等の英語能力試験導入による海外研修・留学に必要な英語力の実現
- 学内外の奨学金を通じた海外研修・留学支援
- 費用対効果が高く、価値が明確な海外研修・留学プログラムの実施

5. 具体的な戦略と行動計画 (1) 人材育成 (日本人学生) 戦略①

行動計画

- **国際人としての意識及び能力の向上** 【参照：佐賀大学における英語教育の役割分担】
 - ・「さがん国際フォーラム」等の定期実施による国際意識向上
 - ・外国人留学生等の外国人との交流の場を設定することによる、国際意識の養成
 - ・自習教材Academic Express3等の英語学習ツールを活用した英語力の向上
 - ・オンライン・対面英会話ラウンジによる英語力・異文化交流能力の強化
 - ・グローバルサポーターズ、英会話ラウンジを通じた学内での英会話実践の機会の実現
 - ・佐賀県・国際交流協会等との協力による国際交流機会 (イベント、セミナー、インターン) 実現と参加促進
 - ・日本人学生の留学に必要な英語能力試験 (IELTS、TOEFL等) 対策講座の実施
- **海外留学モデルの再構築**
 - ・協定校等とのオンライン研修を事前・事後研修に組み込んだ費用対効果の高い研修・留学プログラムの構築
- **留学説明会の実施、パンフレット等による留学システムの紹介**
 - ・プロフェッショナルの指導・支援による効果的な留学説明会の実施
 - ・留学意欲を高めるパンフレット等のツール制作と活用
- **大学院レベルにおける融合領域分野での教育カリキュラムに海外派遣プログラムを必須化**
 - ・カリキュラム設置を希望する研究科等には予算的支援を実施

佐賀大学における英語教育の役割分担 戦略①関連



国際交流推進センターが『留学のための英語教育』を主に担当・牽引し、
留学を希望する学生の支援を行い、海外に派遣する学生数の増加につなげる

5. 具体的な戦略と行動計画（1）人材育成（外国人学生） 戦略②

戦略②

質の確保・向上を図る方向への転換により優秀な外国人留学生を戦略的に獲得

（本学独自の魅力ある受入れプログラム等の充実と拡充、修了後の国内就職促進や帰国後もネットワーク強化による
入口から出口までのきめ細やかな手厚い支援により、外国人留学生の質の確保・向上を図る方向へ転換させ、
優秀な外国人留学生を獲得）

現状・課題

- 新型コロナウイルス感染症の影響による外国人留学生数の低下（p27参照）
240人（2018年）→ 134（2021年）
- 英語で講義を行う教員不足や講義科目の不足や質の問題（p32参照）
SPACE-Eの科目数 4科目（2021年後期）
- 佐賀大学基金等からの奨学金の拡充
佐賀大学基金奨学金
2万円／月・・・5人（2016年～2020年）
- 国際交流会館の老朽化
第2家族棟 築50年超（1970年建築）
- 外国人留学生の国内就職のための日本語能力に課題（p33参照）
国内就職率 10.7%（2020年）



目標

- 外国人留学生受入れプログラム等の充実による外国人留学生の質の確保・向上
- 本学教職員の入口から出口までの支援を拡充
- 奨学金等の経済的な支援の充実
- 外国人留学生への就職支援により、佐賀県や国内への就職及び日本への定着を促進

5. 具体的な戦略と行動計画（1）人材育成（外国人学生） 戦略②

行動計画

○ 外国人留学生と日本人学生が協働・共修する受入れプログラム等の充実と新規実施

- ・各学部・研究科の強み・特色を活かした特別コース等の充実や新規実施
- ・本学と国内外の協定大学等との間で、
 - ① ジョイント・ディグリー等の国際連携教育課程の実施
 - ② SPACEプログラムやサマープログラム等の受入れプログラムの充実
 - ③ ニーズに応じた新たな日本語授業の開設や本学の持つリソースを最大に活用した佐賀を学ぶ新たな協働プログラムの実施
 - ④ ニューノーマルに対応した遠隔・オンラインを活用したハイブリッド型の新たな教育研究システムへの参画
- ・教員公募時における英語をはじめとする外国語能力の確認や外国人数員の積極的な採用等
- ・英語での講義や実務対応等、国際交流の質の向上のためのFD & SDの充実や高度化のための研修会等の実施とインセンティブを与える等の具体的な対策を構築

○ 奨学金やチューター制度等の経済的な支援を実施

- ・校友会等の本学の同窓会組織また佐賀県や佐賀県内企業等、本学と関係機関の連携を促進し、外国人留学生への経済的支援を戦略的に実施するとともに一層の充実
- ・チューター制度の積極的活用及び快適な住環境の実現による受入れ環境整備



○ 国内就職を希望する外国人留学生への就職支援を実施

- ・本学の外国人留学生が卒業・修了後も佐賀県や日本に定着し活躍できるよう、佐賀県や企業等の関係機関と連携した日本語教育やキャリア教育、インターンシップ等を一体とした教育プログラムを提供し、外国人留学生の国内就職を促進 またキャリアに関する相談体制を充実

5. 具体的な戦略と行動計画（2）研究推進（先導研究） 戦略③

戦略③

国際化の先導となる学術分野及び重点プログラムの選択と質の向上支援

（これまでの国際化を先導する可能性のある学術分野及び重点プログラムを選択し、本学の国際化の効率的な深化と波及効果の向上のため、組織的に集中支援）

現状・課題

- 研究者の国際交流数の伸び悩み（p31参照）
634人（2016年）→ 745人（2019年）
- 国際共同研究数Scivalは、目標（128件）より高いが、2018年以降は年々減少（p33参照）
- 新型コロナウイルス感染症の影響による国際共著論文数減少の懸念
- 文化庁文化遺産国際協力拠点交流事業やJSPS特別研究員と比較して、JETROやJICAの採択は低調
JETRO 0件、JICA 1件（2019年～2021年）



目標

- 研究者の国際研究集会参加者数10%増
- 国際共同論文の質の向上（IFの高いジャーナルへの提出）
- JETROやJICAとの連携プロジェクト数の10%増

5. 具体的な戦略と行動計画 (2) 研究推進 (先導研究)

戦略③

行動計画

○ ビジョンプロジェクト2030のプロジェクトとして「戦略的パートナーシッププロジェクト（以下、「戦略的PSプロジェクト）」をはじめ国際共同研究プロジェクトや海外研究機関との共同プロジェクトの形成状況の検証

- ・ 中国・アメリカ・ヨーロッパなどの本学にとって国際共同研究が多い国との共同研究内容を把握
- ・ 本学と交流協定を持っている大学との共同研究状況を把握 例え、科研費（国際共同研究加速化基金）
- ・ JSPS外国人特別研究員等
- ・ 共同プロジェクトにおける共著論文の発表数（過去5年分）等を把握し、IF等に関して検証
- ・ 当該研究代表者等にヒアリングを行い、進捗状況・課題・必要とする支援等について把握
- ・ JETROやJICA事務所を訪問してヒアリングを行うとともに、学内で対策等を協議

○ 検証結果に基づく組織的集中支援

- ・ 国際共同研究におけるIFの高いジャーナルへの論文提出に対する掲載料を支援
- ・ 研究者国際交流支援事業等において、研究情報発信を伴った取組を強く支援

○ 戦略PSプロジェクト実施による先導的な外国人研究者の受け入れ雇用増

- ・ 戦略PSプロジェクト実施による受け入れ促進
- ・ 戦略PSプロジェクトによる国際共著論文発表を条件に研究を支援

○ 国際的通用性のある研究の振興のための研究者派遣や外国人研究者を招き入れによる質の高い国際流動性・国際頭脳循環

- ・ 戦略的PSプロジェクトにより、研究者派遣や外国人研究者の受け入れにかかる経済的インセンティブと対応スタッフの充実を図る

5. 具体的な戦略と行動計画 (2) 研究推進 (研究全般)

戦略④

戦略④

国際共同研究に対する意識底上げとスタートアップ研究支援

（本学の研究者を国際共同研究に引き出す観点から、国際的な研究に対する意識の底上げを図り、研究をスタートアップ・充実させ、国際共著論文や外部資金導入に結びつけるための取組の実施）

現状・課題

- 研究者の国際交流数の伸び悩み（p31参照）
634人（2016年）→ 745人（2019年）
- 国際共同研究数SciValは、目標（128件）より高いが、2018年以降は年々減少（p33参照）
- 新型コロナウイルス感染症の影響による国際共著論文数減少の懸念
- 国際関係での外部資金の採択率が低調（外国人特別研究員、二国間交流事業、国際共同研究加速化基金等）（p33参照）
採択率 31.6%（2019年～2021年）



目標

- 国際共同研究数の10%増
- 国際共著論文等の研究成果の10%増
- 科研費・国際共同研究加速化基金等による外部資金採択数の10%増

5. 具体的な戦略と行動計画（2）研究推進（研究全般）

戦略④

行動計画

- **国際化を目指す研究者（本学の外国人研究者を含む）への研究費支援**
 - ・ 研究の国際化のための研究者国際交流支援事業を実施
 - ・ 外国人研究者を研究メンバーに入れた国際共同研究のスタートアッププロジェクトの公募を実施
- **研究者の研究活動（外部資金応募等）に対する支援**
 - ・ 科学研究費助成事業（国際共同研究加速化基金）やJSPS特別研究員等の非採択分の査読と研究費支援の実施
 - ・ 外部資金応募等に対する英語での相談・査読体制を構築
 - ・ 事務手続き等における英語でのサポート体制を構築
- **国際関係外部資金獲得の増加に向けた説明会等の実施**
 - ・ 採択者による講演及び座談会等の開催
 - ・ 研究成果の発表会等の開催

5. 具体的な戦略と行動計画（3）社会連携

戦略⑤

戦略⑤

企業や地域との連携による就職環境の改善

（外国人留学生を対象に、地域及び産業界との連携・協力を得て、外国人留学生の地域行事参加・交流、企業インターンシップ等により、県内企業等への就職支援を実施する）

現状・課題

- 外国人留学生の国内就職のための日本語能力に課題（p33参照）
国内就職率 10.7%（2020年）
- 佐賀県内の中等教育機関と授業を通じた交流
（2015年より毎年交流）



目標

- 外国人留学生への就職支援により、佐賀県や国内への就職及び日本への定着を促進
- 外国人留学生と地域住民との相互理解の促進
- 本学進学の可能性のある中学生、高校生から異なる文化や価値観を持つ人材を輩出

行動計画

- **国内就職を希望する外国人留学生への就職支援を実施**
 - ・ 本学の外国人留学生が卒業・修了後も佐賀県や日本に定着し活躍できるよう、佐賀県や企業等の関係機関と連携した日本語教育やキャリア教育、インターンシップ等を一体とした教育プログラムを提供し、外国人留学生の国内就職を促進 またキャリアに関する相談体制を充実【再掲】
- **就職を可能とする外国人留学生と企業との交流、繋ぎ会開催に取り組む**
 - ・ 外国人留学生と企業との繋ぎ会等の企業との交流を促進
 - ・ 佐賀県からの外国人留学生への支援等を活用し、ネットワーク作り
（例、留学生のOB、OG訪問）の経費を支援
- **外国人留学生と地域住民との相互理解を促進する取組**
 - ・ 外国人留学生に地域との交流行事や本学が実施する地域貢献プログラムへの参加を促進、必要に応じて謝金等を支給
- **異文化交流を通じた異なる文化や価値観を持つ人材の育成**
 - ・ 異文化交流科目等や中学・高校等での交流イベントを通じて外国人留学生と高校生等との交流促進



5. 具体的な戦略と行動計画 (4) 国際協働

戦略⑥

戦略⑥

受入れ及び派遣重点大学の設定とこれまでに輩出した海外研究者・教育者を介した外国人留学生・研究者の受入れ

(帰国後に研究者・教育者、企業人等として活躍している外国人留学生海外アルムナイのネットワーク組織を今以上活用し、優秀な外国人留学生の恒常的確保や重点交流大学との間の教育・研究交流を強化)

現状・課題

- 外国人留学生・研究者の受入れ体制の整備・充実
- 帰国した外国人留学生や研究者と本学とのネットワーク組織の強化を推進



目標

- 老朽化した国際交流会館の整備
- 受入れ手続きのシステム化・ワンストップ化
- 海外版HCDを通じた人的ネットワークの強化により、受入れ・派遣の両面で質の高い循環型の国際交流（佐賀モデル）を実現

行動計画

- **重点交流大学の更なる明確化と、それを踏まえた戦略的な交流枠設定や単位互換の実施**
 - ・戦略的PS校の新設による地域戦略の明確化と戦略と合理性に基づく協定校の整理（廃止・新規開拓）の実施
- **帰国した外国人留学生等との海外版HCDを通じた人的ネットワークの強化**
 - ・本学と海外の協定大学との間や外国人留学生が帰国後も親日（親佐賀・知佐賀）人材として、本学との人材ネットワークを維持・強化して活躍できるよう、海外版HCD等を実施、またフォローアップの充実
 - ・海外のキーパーソンを核とした同窓会の組織化
- **本学への貢献者・功労者への表彰制度を設立**
 - ・本学の国際交流に貢献した人を対象に学長が表彰する制度を新設



5. 具体的な戦略と行動計画 (5) 体制整備

戦略⑦

戦略⑦

英語による教育・研究支援と広報の強化

(研究活動と国際教育プログラム等の国際活動を海外にアピールするため、英語による広報体制を整備強化し、本学一体となった国際広報活動を統一的・戦略的に実施)

現状・課題

- 本学の英語版と日本語版ウェブサイトの絶対的な情報量と更新回数の格差
- 国際広報活動に関する情報発信の体制の未整備
- ステークホルダーに向けた情報発信力の強化



目標

- 本学ウェブサイトにおける英語によるタイムリーで定期的な情報発信
- 各部局との連携による広報実施体制の整備と国際活動情報の集約・発信
- ステークホルダーに確実に情報を届けるためのソーシャルメディアや多様なコンテンツの活用による情報発信力の強化

5. 具体的な戦略と行動計画（5）体制整備

戦略⑦

行動計画

○ 本学ホームページにおける英語によるタイムリーな情報の発信と定期的な更新

- ・費用対効果を基準とした、日英両言語によるタイムリーな情報発信を実施（学長、理事、教員等の動画・肉声もテキストやビデオメッセージもその手段として適宜活用して発信）

○ 国際広報実施体制の整備に基づく本学一体となった戦略的国際広報の展開

- ・各部局と国際交流推進センターの連携による国際広報実施体制を再整備、本学の教育・研究活動や国際活動の情報を集約し、センターウェブサイトでの積極的な情報発信を実施

○ ソーシャルメディアや多様なコンテンツの活用による情報発信力の強化

- ・動画コンテンツや本学公式マスコットキャラクター「カッチーくん」等を活用し、ソーシャルメディアやセンターウェブサイトにおいて、適切な情報を適切なタイミングでかつ適切な手段で発信
また、これらのアクセス解析により効果を検証し、継続的に広報手段を改善



6. 留意事項

本指針の実施に当たって

- 佐賀大学国際戦略構想（2011年1月）の策定から10年が経過、本学を取り巻く環境も一変特に、2020年からの新型コロナウイルス感染症の影響により、国際的な人の往来が制限されたことに伴い、**デジタル技術を活用した新しい形態の学修の有用性が顕在化**、新たな潮流の一つに今後、国際的な人の往来が段階的に復活することも見据え、**新しい国際交流の在り方**の検証が必要と考え、本指針を新たに策定・実施
- 未来に向けて持続的に発展し続けるために、**ステークホルダーから関心・共感を得て支持してもらえ**るための**指針**の策定が必要 本指針の実施に当たる主たるステークホルダーは下記のとおり
 1. 本学を目指す海外の学生
 2. 本学に在籍する佐賀大学短期留学プログラム（SPACE）の外国人留学生
 3. 本学のアルムナイ（既卒の外国人留学生ネットワーク）
 4. これから海外留学を考えている本学の学生
- 外国人留学生の受入れを適切に推進していくためには、我が国の技術的優位性を確保・維持する観点等を踏まえ、**大学等における技術流出防止対策の強化とのバランスを図っていくことが重要** 本学での安全保障輸出管理体制に特に留意し、これらの施策を推進
- 本指針を実施していくにあたり、学部等の独自性を尊重し、**必要に応じてセンター内教職員の配置及びセンターの名称変更等を含めた組織の見直しを実施**

6. 留意事項

本指針の柔軟な見直し

- 世界的なコロナ禍が、これまで本学が積極的に取り組んできた日本人学生の海外派遣や外国人留学生の受入れといった国際交流の取組に大きな影響
- コロナ禍を契機として、これまでの対面による国際交流の価値が強く認識されるとともに、遠隔によるメリットも再認識され、遠隔教育や遠隔での異文化交流等、新しい形態の国際交流の取組が開始
- 一方、遠隔による新しい形態の国際交流では、十分な交流が出来ないことや時差への対応等も指摘され、今後は質保証も伴う、対面と遠隔とを最適に組み合わせたハイブリッドな国際交流の実証が必要
- コロナ禍が終息していない現状において、今後のポストコロナを見据えつつも、将来的なデジタル技術の更なる進展など予測困難な時代において、社会から求められる人材の在り方が変化する可能性があることから、**本学においても、モニタリングの実施や時代の変化に機動的に対応するため、策定後も国際行動指針の柔軟な見直し等の改善が必要**

6. 留意事項

更なる進展に向けて

- 今後のポストコロナの予測困難な新たな時代においても、大学が果たすべき使命は、教育研究活動の充実・高度化を通じて、社会変革の牽引役となる人材を育成することは不変
- 本学では、新しい国際交流の世界的な潮流やコロナ禍での経験も踏まえ、新たな国際行動指針により教育研究内容と教育研究環境の国際化を徹底的に進め、教育研究の総合力向上を図り、新たな世界「ニューノーマル」（新たな日常）における世界から見た「魅力ある佐賀大学」、「佐賀大学2030ビジョン」の早期実現を目指す
- また、新たな国際行動指針の下で国際化を進める中で、本学の更なる進展に向けて大学を切り拓く観点からも、以下の事項について、社会との接続の在り方等も含め、大学を取り巻く多様な関係者の意見を聴いた上で、必要な予算の確保を含め、大学全体で検討することが必要
 - ・学事暦等の多様化・柔軟化（日本人学生や外国人学生の双方にとって自らの能力や適性を思い描くキャリアパスに応じた多様な学び方が可能となるクォーター制度の大学全体での導入等）
 - ・本学の教育研究施設と現在の国際交流会館等、キャンパス全体が有機的に連携し、外国人留学生や研究者、日本人学生も含めた多様な人材が関わりを持ちながら共創できる場の実現のため、「佐賀大学国際寮（仮称）」の施設整備や施設マネジメント（管理の委託も含む）等の施設整備

